

東國並ニ
諸方官軍
巴ニ上洛
ス
征西將軍
ノ令旨

追申、東國并諸方官軍、已上洛候也。
鎮西恩賞、并朝敵退治以下事、爲有其沙汰、已御下著讚州候、則可有御渡海與州候、且
鎮西御船付以下之事、急可被召進故實之仁於與州之由、征西將軍令旨所候也、仍執
達如件、

十二月卅日

(五條額元)
勘解由次官(花押)

(字治博時)
阿蘇大宮司殿

是歲 法輝、上野長樂寺ニ入ル。(禪刹住持籍) (正平七年三月十
七日ノ條ニ收ム)

延元三年(京廷建武五年・曆應元年(八月二十
八日改)) 戊寅 (一九九八)

正月二十八日 是ヨリ先、二日、新田義興、顯家ト共ニ鎌倉ヲ發シテ西
上ス。美濃根尾山城ノ新田堀口貞滿、出デ、是ニ合シ、同國仲村庄ニ攻
メ入ル。是日、官軍、足利軍ト同國青野原ニ戰ヒ、轉ジテ伊勢ニ入ル。

(鶴岡社務記錄) 坤 曆應元戊寅正月二日、顯家卿出鎌倉而越海道(中略)同日顯家

卿已下於近江國青野原(不破)被打落伊勢國落行云々、

(瑠璃山年錄殘編) 上 正月十二日、(建武) (五年) 大納言殿橋本(遠江濱
名郡)マテ責登ル、同

(正月廿一日ヨリ廿八日、尾張國ニテ合戰畢、國(同カ)勢ウチマケテ伊勢國落

宗良親王
モ加ハリ
給フ

(李花集) 延元四年春頃にや、顯家卿なといさなひて、あつまよりはるくとの
ほりて、今の都へといそき侍しに、奈良天王寺のいくさやふれにしかの思ひのほ
かに吉野行宮に参りて、月日を送りしに、

(吉川家什書) 十三 經時御代 △六、四、六六五、

顯家卿追討事、相催一族、屬高參河守師冬、不日令發向海道、可致軍忠之狀如件、

建武五年正月廿日 左馬頭直義
判

(無時)
吉河小次郎殿

〔建武三年以來記〕 同五年、同(正月)廿二日、自東方飛脚來、陸奥國司顯家、勢已責入

尾張國黑田宿(栗原)云々、

同廿七日、越美濃國洲俣河(安八)由、令披露云々、

同二月三日、自垂井宿(不破)落勢州、

〔白河證古文書〕 上 (楓軒文書集) △六、四、六六六、
(九十一所收)

上野武藏鎌倉以下、所々合戰、悉無子細候、仍昨日廿四日、渡阿志賀川(美濃羽
栗郡)對治凶
徒、京都市不可有子細之由、國中靜謐、能々可有沙汰之狀如件、

延元三 正月廿五日 (無時)
(花押)

延元三年(建武五年・曆應元年)

黑田宿ニ
攻メ入ル
洲俣河ヲ
越ユ

足近川

大藏少輔殿

〔吉川家什書〕十三經久御代 △六、四、六六七

著到

吉河彦次郎經久申

右爲顯家卿誅伐屬御手可發向海道之由被成下御教書候間、自去正月廿迄于今、警固黑地（美濃不破郡山中村）要害以下、致忠節候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、（建武五年二月四日附高師判）

〔三刀屋文書〕（諸家文書） △六、四、六六八

目安

諏方部三郎入道信惠（扶重）申屬于當御手致度々軍忠間事

一今年正月廿二日、海道御發向之間、御共仕、於美濃國山中用害（即チ黑地）致無貳之警固畢、

一同月晦日、夜就御敵沒落、伊勢國御發向之間、御共仕、二月十四日、同國雲津河合戰、致軍忠者也、

一二月十六日、同國於櫛田河合戰、馳向山手、同所抽合戰忠節也、此條山口三郎、若槻

賊徒黑地ヲ固ム
美濃山中用害ヲ固ム
雲津河合戰
櫛田河合戰

高師泰

今川範國顯家ノ後ヲ追フ
赤坂北山ヲ西繩手合戰

下津、赤坂、小貳頼尙

下總孫太郎、佐々布周防房令存知者也、次去年南都御發向之時、同御共仕、數箇月致警固畢、然早下賜御判、爲備龜鏡、恐々言上如件、（建武五年三月三日附高師泰證判）

〔靈簡集殘編〕（朝比奈永太郎藏土佐） △六、四、六六九

山城國御家人松井八郎助宗申軍忠事

右軍忠者、奥州前國司顯家卿攻上間、爲彼後追、御發向之間、奉屬御手、今年五月、正月廿八日、美濃國赤坂北山、并西繩手合戰、懸先致軍忠之間、則預御感畢、然早下賜御證判、爲備龜鏡、恐々言上如件、（建武五年二月六日附今川範國證判）

〔岡本文書〕（東京） △六、四、七〇二

陸奥前國司（顯家）已下凶徒、於下津（尾張中島郡）赤坂（美濃不破郡）誅伐事、今月三日御教書、今日十六日、到來、案文如此、早存其旨、彌可被致忠、仍執達如件、（建武五年二月十六日、少貳頼尙ヨリ土師上總入道宛）

〔茂本文書〕（昨年十二月二十三日ノ條ニ收ム） 〔大國魂神社文書〕（昨年十二月二十三日ノ條ニ收ム）

〔大友文書〕（立花伯爵所藏） △六、五、六二六

大友式部丞氏泰代宗運興喜重陳申、

美濃國仲村庄下方雜掌尊舜掠申、當庄建武四五兩年御年貢未進由事、（申略）且建武四年者云郷分、云籠名、令究濟之條返抄明白也、翌年者、奥州前國司（顯家）并當

延元三年（建武五年・曆應元年）

八五二

官軍引キ 返シテ後 攻軍ト對 ス 自貴渡ニ 洲侯河ノ

御方ノ勢、勞兵ノ弊ニ乗テ、國司ノ勢ヲ前後ヨリ攻ンニ、勝事ヲ立所ニ得ツヘシト、申合レケルヲ、土岐頼遠、默然トシテ耳ヲ傾ケ、ルカ、抑目ノ前ヲ打通ル敵ヲ、大勢ナレハトテ、矢ノ一ツヲモ射スシテ、徒ニ後日ノ弊ニ乗ン事ヲ待ン事ハ、只楚宋義カ、羸ヲ殺スニハ、其馬ヲ擊ズト云シニ似タルヘシ、天下ノ人口、只此一舉ニ有ヘシ、所詮自余ノ御事ハ知ス、頼遠ニ於テハ、命ヲ際ノ一合戦シテ、義ニサラセル尸ヲ、九原ノ苔ニ留ムヘシト、又餘儀モナク申サレケレハ、桃井播磨守、某モ如此存候、面々ハ如何ト申サレケレハ、諸大將皆理ニ服シテ、悉此議ニソ同シケル、去程ニ奥勢ノ先陣、既ニ垂井、赤坂邊ニ著タリケルカ、跡ヨリ上ル後攻ノ勢、近ツキヌト聞ヘケレハ、先其敵ヲ對治セヨトテ、又三里引返シテ、三里、金勝院、本作二里美濃尾張兩國ノ間ニ陣ヲ取スト云處ナシ、後攻ノ勢ハ、八萬餘騎ヲ五手ニ分、前後ヲ圍ニ取タリケレハ、先一番ニ、小笠原信濃守、芳賀清兵衛入道禪可、二千餘騎ニテ自貴渡ヘ馳向ヘハ、奥勢ノ伊達信夫ノ兵共、三千餘騎ニテ河ヲ渡リテカ、リケルニ、芳賀、小笠原、散々ニ懸立ラレテ、殘少ニ討レニケリ、二番ニ、高大和守三千餘騎ニテ、洲侯河ヲ渡ル所ニ、渡シモ立ス、相摸次郎時行五千餘騎ニテ、五千、天正本、作三千亂合、互ニ笠驗ヲシルヘニテ、組テ落落、重テ首ヲ取、半時許戦タルニ、大和守カ憑切タル兵三百餘人討レニケレハ、東西ニ

阿字賀ノ

新田義貞 上杉顯興 上野野原 勝ニトツ

桃井直常 土岐頼遠 齋家ノ爲ニ敗北ス

散靡テ、山ヲ便ニ引退、三番ニ今川五郎入道、三浦新介、天正本、作三浦新介、高繼、系譜既註阿字賀ニ打出テ、横逢ニ懸ル所ヲ、南部、下山、結城入道、一萬餘騎ニテ、一萬、天正本、作三千懸合、火出ル程ニ戦タリ、今川、三浦、元來小勢ナレハ、打負テ、河ヨリ東ヘ引退、四番ニ上杉民部大輔、同宮内少輔、同、天正本作舍弟、而云、名藤成、按系圖、藤成、頼成子、民部大輔、顯之從兄弟也武藏、上野ノ勢、一萬餘騎ヲ率シテ、青野原ニ打出タリ、爰ニハ新田德壽丸、宇都宮ノ紀清兩黨、三萬餘騎ニテ、三萬、天正本、作五千相向フ、兩陣ノ旗ノ紋、皆知リ知レタル兵共ナレハ、後ノ嘲ヲヤ恥タリケン、互ニ一足モ引ス、命ヲ涯ニ相戦フ、毗嵐斷テ、大地忽ニ無間獄ニ墮、水輪湧テ、世界悉有頂天ニ翻ランモ、角ヤト覺ル計ナリ、サレトモ大敵拉クニ難ケレハ、上杉遂ニ打負テ、右往左往ニ落テ行、五番ニ桃井播磨守直常、土岐彈正少弼、頼遠、態銳卒ヲスクリテ一千餘騎、渺々タル青野原ニ打出テ、敵ヲ西北ニ請テ控ヘタリ、是ニハ奥州國司鎮守府將軍顯家卿、副將軍春日少將顯信、顯家之弟出羽奥州ノ勢、六萬餘騎ヲ率シテ相向フ、敵ニ御方ヲ見合レハ、千騎ニ一騎ヲ合ストモ、猶當ルニ足スト見ヘケル處ニ、土岐ト桃井ト、少モ機ヲ吞レヌ、前ニ恐ヘキ敵ナク、後ニ退クヘキ心有トモ見ヘサリケリ、關ノ聲ヲ揚ル程コソ有ケレ、千餘騎只一手ニ成テ、大勢ノ中ニ颯ト懸入、半時許戦テ、ツト懸ヌケテ、其勢ヲ見レハ、三百餘騎ハ討レニケリ、相殘ル勢七百餘騎ヲ、又一手ニ東

ネテ、副將軍春日少將ノ控ヘタル、二萬餘騎カ中へ懸入テ、東へ追靡、南へ懸散シ、汗馬ノ足ヲ休メス、太刀ノ鐔音ヤム時ナク、ヤ聲ヲ出シテソ戰合タル、千騎カ一騎ニ成マテモ、引ナ引ナト互ニ氣ヲ勵シテ、コヽヲ先途ト戰ケレトモ、敵雲霞ノ如クナレハ、コヽニ圍レ、彼ニ取籠ラレテ、勢モ盡、氣モ屈シケレハ、七百餘騎ノ勢モ、纔二十三騎ニ今川家本無三字打成レ、土岐ハ左ノ目ノ下ヨリ、右ノ口脇鼻迄口脇、金勝院本作鋒ヲカニ切附ラレテ、長森城へ引籠ル、桃井モ三十餘箇度ノ懸合ニ三十、金勝院本作七十六騎ニ打成レ、馬ノ三頭平頸ニ太刀切レ、草摺ノハツレ三所ツカレテ、餘ニ戰疲ケレハ、此軍是ニ限ルマシ、イザヤ人々馬ノ足休ント、洲俣河ニ馬ヲ追濱シテ、太刀長刀ノ血ヲ洗テ、日モ暮レハ野ニ下リ居テ、終ニ河ヨリ東へハ、越給ハス、京都ニハ奥勢上洛ノ由、先立テ聞ヘケレトモ、土岐美濃國ニアレハ、天正本云、三河、遠江ニハ、吉良、今川ノ氏族在國ナリ、頼遠幸美濃國ニ在ハ、云々、下同、本文、サリトモ一支ハ支ヘンストラント、憑敷思ハレケル處ニ、頼遠既ニ青野原ノ合戰ニ打負テ、行方知ストモ聞ヘ、又ハ討レタリトモ披露アリケレハ、洛中ノ周章斜ナラズ、サラハ宇治勢多ノ橋ヲ引テヤ相待、然ラスハ先西國ノ方へ引退テ、四國九州ノ勢ヲ附テ、却テ敵ヲヤ攻ヘキト、異議區々ニ分レテ、評定イマタ落居セサリケルニ、越後守師泰、姑思按シテ申サレケルハ、古ヨリ今ニ至マテ、都へ敵寄來ル時、宇治勢多ノ橋

京都ノ周章

高師泰進擊ヲ主張ス

高師泰師
冬等黑地
河ニテ官
軍ヲ遣フ

ヲ曳テ戰フ事度々ナリ、然レ共此河ニテ敵ヲ支テ、都ヲ落サレスト云事ナシ、寄ル者ハ廣ク萬國ヲ御方ニシテ威ニ乗、防ク者ハ纔ニ洛中ヲ管領シテ氣ヲ失フ故ナリ、不吉ノ例ヲ逐テ、ヲホケナク宇治勢多ノ橋ヲ引、大勢ヲ帝都ノ邊ニテ相待ンヨリハ、兵勝ノ利ニ附テ、急キ近江美濃邊ニ馳向ヒ、戰ヲ王城ノ外ニ決センニハシカシト、勇ミ其氣ニ顯レ、謀其理ニ協ヒテ申サレケレハ、將軍モ師直モ、金勝院、西源院、天正本作、直義此議然ルヘシトソ、甘心セラレケル、サラハ時刻ヲ移サス向ヘトテ、大將軍ニハ、高越後守師泰、同播磨守師冬師直養子、實師行子、細川刑部大輔頼春、佐々木大夫判官氏頼、佐々木佐渡判官入道道譽、子息近江守秀綱、此外諸國ノ大名五十三人、都合其勢一萬餘騎、二月四日都ヲ立、同六日ノ早旦ニ、近江ト美濃トノ境ナル、黒地河ニ著ニケリ、奥勢モ、垂井赤坂ニ著ヌト聞ヘケレハ、コヽニテ相待ヘシトテ、前ニハ關ノ藤川ヲ隔、後ニハ黒地川ヲアテ、其際ニ陣ヲソ取タリケル、抑古ヨリ今ニ至マテ、勇士猛將ノ陣ヲ取テ敵ヲ待ニハ、後ハ山ニヨリ、前ハ水ヲ境フ事ニテコソアルニ、今大河ヲ後ニ當テ、陣ヲ取レケル事ハ、又一ノ兵法ナルヘシ、此下載、韓信漢沙背水故事、今除之、天正本云大河ヲ後ニ當テ、陣ヲ取レタル事、心得スト申者多カリケレハ、遺警聞モ敢ス、是マタ一ツノ兵法ナリ、其故ハ昔漢高祖、云々、而載韓信故事、詞同、本文、今師泰、師冬、頼春カ敵ヲ大勢ナリト聞テ、懸水澤ヲ後ニ成テ、關ノ藤川ニ陣ヲ取ケルモ、專士率ノ心ヲ一ニシテ、再ヒ韓信カ謀

延元三年(建武五年・曆應元年)

八五七

官軍垂井赤坂青野原ニ陣ヲ張ル
顯家、義貞ノ功ヲ稱ミ伊勢ニ廻ル

堀口貞満路案内ヲナス

ヲ示ス者ナルヘシ、天正本云、道譽、韓信カ謀ヲ語ケ 去程ニ國司ノ勢十萬騎十萬、毛利家、金藤院本、作三百萬、 本文諸異本、與前體、天正本、及難太平記、作三十萬、
々々ノ籌ヲ見渡セハ、一天ノ星斗落テ、欄干タルニ異ナラス、此時越前國ニ、新田義貞、義助、北陸道ヲ從ヘテ、天ヲ幹ラシ、地ヲ略スル勢專盛ナリ、奥勢若黒地ノ陣ヲ拂ハ
ン事難儀ナラハ、北近江ヨリ越前ヘ打越テ、義貞朝臣ト一ツニナリ、比叡山ニ攀上
リ、洛中ヲ脚下ニ見下シテ、南方ノ官軍ト牒シ合、東西ヨリ是ヲ攻ハ、將軍京都ニハ、
一日モ堪忍シ給ハシト覺シテ、顯家卿我大功、義貞ノ忠ニ成ンスル事ヲ猜テ、北國
ヘモ引合ス、黒地ヲモ破リ得ス、俄ニ士卒ヲ引テ、伊勢ヨリ吉野ヘソ廻ラレケル、サ
テコソ日來ハ、鬼神ノ如クニ聞ヘシ奥勢、黒地ヲタニモ破リ得ス、マシテ後攻ノ東
國勢京都ニ著ナハ、恐ル、ニ足サル敵ナリトソ、京勢ニハ思ヒ劣サレケレ、(下文、二一日ノ條ニ收ム)

〔信濃宮傳〕

同二年の冬、鎮守府將軍顯家、新田德壽丸など數萬の軍を以て鎌倉を攻破りし、左馬頭義詮逃亡せり 三年正月、顯家、宮を具し奉りて許多の兵を率ひ上洛せられ

ける、尾張國熱田社ヘ奉幣の御事有しに、大宮司昌能侍加りて軍兵を添まいらせける、美濃國の住人堀口美濃守貞満を御路しるへとして、黒血川まで上らせたま

ひける所に、高師泰、桃井直常等大軍を備へて支へ戦ひしかは、御方利を失ひて多
は散失ける、宮は伊勢國へわたらせまし、けるか、又安濃の雲出川に凶徒等待
請奉りて打留まいらせんとひしめきけれ共、御方の兵打破、伊賀路を経て芳野に
入せまし、ける、

二月中旬、義貞、杣山城ヨリ出デ、足利高經ノ軍ヲ鯖江ニ擊破シテ越前國府ヲ攻略ス。其ノ勢威大イニ振フ。

〔參考太平記〕

卷第九 義貞攻落越前府城事 (上文ハ去年九月十日ノ條ニ收ム)

去程ニアラ玉ノ年立歸テ、當元三年

年、二月中旬、毛利家本字、作下句、ニモ成ケレハ、餘塞モ漸退テ、士卒弓ヲ彎ニ手龜カウラス、殘雪半村消テ、匹馬地ヲ踏ニ勞セス、今ハ時分ヨク成ヌ、次第ニ府ノ邊ヘ近附寄テ、敵ノ往反スル道々ニ城ニ構テ、四方ヲ差塞テ攻戰フヘシ、何クカ要害ニヨカルヘキ所アルト、見試ン爲ニ、脇屋右衛門佐、僅百四五十騎ニテ、鯖江宿ヘ毛利家本作、並下條之 打出ラレケリ、名將小勢ニテ城ノ外ニ打出タルヲ、能隙ナリト敵ニヤ人ノ告タリケン、尾張守ノ副將軍細川出羽守、天正本作、草彦太郎 五百餘騎ニテ府ノ城ヨリ打出、鯖江宿ヘ推寄、三方ヨリ相近附テ、一人モ餘サシトソ取巻ケル、脇屋右衛門佐前後ノ敵ニ圍レテ、トラモ遁レヌ所ナリト、思ヒ切テケレハ、中中心ヲ一ニシテ、少モ機ヲ撓サス、後陣ニ高

脇屋、足利、細川、鯖江、關東、義助、方助、某トノ戦

二月中旬

兩軍ノ義經
兵集リ
貞・高
モ来ル

木社ヲアテ、社、金勝院、西源院本作社左右ニ瓜生畔ヲ取テ、矢種ヲ惜マズ散散ニ射サセテ、敵ニ少モ馬ノ足ヲ立サセス、七八度カ程合ツ開ツ、追立追立攻附タルニ、細川鹿草カ五百餘騎天正本無、纒ノ勢ニ懸立ラレテ、鯖江宿ノ後ナル、川ノ淺瀬ヲ打渡リ、向ノ岸ヘ颯ト引、結城上野介、河野七郎河野、毛利家本作河原、熊谷備中守第三十二卷云、熊谷備中守直鎮屬義詮、云々、按熊谷家譜、直鎮、元弘年中既屬章氏、不屬義貞、今所謂熊谷備中守、蓋非直鎮、別一人也、可合見、伊東大和次郎、足立新左衛門足立、金勝院本作足利、恐非也、小島越後守、中野藤内左衛門左、金勝院本作右、瓜生次郎左衛門尉次郎、金勝院本作新、八騎ノ兵トモ、川ノ瀬頭ニ打臨ミ、續テ渡サントシケルカ、大將右衛門、佐馬ヲ打寄テ制セラレケルハ、小勢ノ大敵ニ勝事ハ暫時ノ不思議ナリ、若シ難所ニ向テ敵ニカ、ラハ、水澤ニ利ヲ失テ、敵却テ機ニ乘ヘシ、今日ノ合戦ハ、不慮ニ出來ツル事ナレハ、遠所ノ御方はヲシラテ、左右ナク馳來ラシト覺ルソ、此邊ノ在家ニ火ヲ懸テ、合戦アリト知セヨト下知セラレケレハ、篠塚五郎左衛門篠塚、金勝院本作藤原、而云名滋元、南都本作藤原、馳廻テ、高木、瓜生、真柄金勝院本作真柄、北村ノ在家、二十餘箇所ニ火ヲ懸テ、狼煙天ヲ焦セリ、所々ノ宮方此煙ヲ見テ、スハヤ鯖江邊ニ軍ノ有ケルハ、馳合テ御方ニカヲ合ヨトテ、宇都宮美濃將監泰藤、天野民部大輔政貞、三百餘騎ニテ鯖並宿ヨリ馳來ル、鯖並、天正本一作鯖江一條少將行實朝臣第十七卷本文作行尹、詳註于其下、二百餘騎ニテ、二百、天正本作三百、飽和ヨリ打出ラル、瓜生越前守重按、兵車助、舍弟加賀守照按、彈

新田軍敵
前渡河シ
テ攻メ寄
ス

正左衛門、五百餘騎ニテ妙法寺城ヨリ馳下ル、山徒三百餘騎ハ、大鹽城ヨリヲリ合、河島左近藏人惟頼ハ、三百餘騎ニテ三峯城ヨリ馳來リ、總大將左中將義貞朝臣ハ、千餘騎ニテ山山ヨリソ出ラレケル、合戦ノ相圖アリト覺テ、所々ノ宮方鯖江宿ヘ馳集ル由開ヘケレハ、イマタ河ハタニ控ヘタル御方討スナトテ、尾張守高經、同伊豫守三千餘騎ヲ率シテ、國分寺ノ北ヘ打出ラル、兩陣相去事十餘町、中ニ一ノ河ヲ隔ツ、此河サシモノ大河ニテハナケレトモ、折節雪消ニ水増テ、漲ル浪岸ヲ浸シケレハ、互ニ淺瀬ヲ伺ヒ見テ、イツクヲカ渡サマシト、暫猶豫シケル處ニ、船田長門守カ若黨、葛新左衛門葛、西源院本作葛葉、下做之ト云者、川端ニ打寄テ、此河ハ水タニ増レハ洲俄ニ出來、案内知ヌ入ハ、イツモ過スル河ニテ候ソ、イテ其瀬フミ仕ラント云マ、ニ、自蘆毛ナル馬ニ、カシ鳥威ノ鎧著テ、三尺六寸ノカヒシノキノ太刀ヲ拔、兜ノ眞向ニ差カサシ、タキリテ落ル瀬枕ニ、只一騎馬ヲ打入テ、白浪ヲ立テソ游カセケル、我先ニ渡サント打臨ミタル兵三千餘騎、是ヲ見テ、一度ニ颯ト打入テ、弓ノ本管末管取テカヘ、馬ノ足ノ立所ヲハ、手綱ヲ差クツロケテ歩セ、足ノタ、ヌ所ヲハ、馬ノ頭ヲ敲キ上テ游カセ、眞一文字ニ流ヲ截テ、向ノ岸ヘ懸上タリ、葛新左衛門ハ、御方ノ勢ニ二町許先立テ渡シケレハ、敵ノ爲ニ馬ノモロ膝ナカレテ、歩立ニ成テ、敵六騎ニ取籠

官軍ノ迂回ニ府中ヲ脅カサレ、足利軍、新善光寺城ヲ塞ツ

高經足羽城ヘ退却ス

新田軍敵城ヲ七十餘

ラレテ、已ニ討レヌト見ヘケル處ニ、宇都宮カ郎等ニ、清新左衛門爲直金勝院、西源院本、無新字、馳合テ、敵二騎斬テ落シ、三騎ニ手負セ、葛新左衛門ヲハ助テケリ、寄ル勢モ三千餘騎、禦ク勢モ三千餘騎、大將ハ何レモ名ヲ惜ム源氏一流ノ棟梁ナリ、而モ馬ノ懸引タヤスキ在所ナレハ、敵御方六千餘騎、前後左右ニ追ツ返ツ入亂、半時許ソ戰フタル、カクテハ只命ヲ限ノ戰ニテ、イツ勝負有ヘシトモ見ヘサリケル處ニ、仙山河原ヨリ廻リケル袖山、金勝院、西源院、天正本、作帆山、三峯ノ勢ト、大鹽ヨリ下ル山法師ト差違テ、敵陣ノ後ヘ廻リ、府中ニ火ヲ懸タリケルニ、尾張守ノ兵三千餘騎今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二千餘騎、敵ヲ新善光寺ノ城ヘ入代ラセシト、府中ヲ指テ引返ス、義貞朝臣ノ兵三千餘騎、逃ル敵ヲ追スカフテ、透間モナク攻入ケル間、城ヘ籠ラント逃入勢共、己カ拵タル木戸逆過ル、伊豫守ノ勢千餘騎ハ、金勝院本作二千餘騎、若狹ヲサシテ引ケレハ、尾張守ノ兵二千餘騎金勝院本無、織田大蟲ヲ打過テ、足羽城ヘソ引レケル、都テ此日一時ノ戰ニ、府ノ城ステニ攻落サレヌト聞及テ、イマタ敵モ寄サル先ニ、國中ノ城ノ落ル事同時ニ七十三天正本作三十餘、箇所ナリ、

二月二十一日 新田義貞、顯家ト共ニ伊勢伊賀ヲ經テ、是日、南都ニ入

ル。尋テ足利軍ト戰フ。二十八日、官軍敗レテ、顯家、河内ニ走り、義良親王、吉野ニ逃レ給フ。義興、亦吉野ニ詣リ、天皇ノ御前ニテ元服ス。

〔合編白河石川文書〕（楓軒文書纂）七、十二所收） △、六、四、七、一、二、

石河小平七郎三郎光俊申軍忠事

右爲顯家卿後攻、自奥州馳上、當年建武五、二月十一日、勢州御發向之時、屬御手、同十六日、於伊勢國雲地河致軍忠訖、

奈良合戰

男山戰

一同廿八日、於奈良坂抽合戰忠節畢、

一同三月十三日、於男山洞嶺致軍忠畢、

一同十六日、於安部野致合戰之忠訖、

一同五月廿二日、於和泉國堺浦致軍忠畢、此等次第、同所合戰之間、須賀兵庫允、佐々木左衛門六郎、令見知訖、然早預御證判、欲備龜鏡之狀如件（建武五年閏七月、附高師直證判、）

〔吉川家中并寺社文書〕（九、六、五、補、九、） （建武五年八月日附、曾我左衛門尉執達高師直證判、）

小早河安藝五郎左衛門尉氏平申軍忠次第、

一、今年建武五、二月十六日、於伊勢國雲出川、御敵既令向遭之間、致合戰之上、宛賜役所、波多野因幡前司入道等、相共終夜令致警固事、

延元三年（建武五年・曆應元年）

伊勢國雲出河ノ戰

堺浦戰

奈良坂般若寺前ノ

一同月廿四日、南都御發向之時、於奈良坂般若寺之前、曾我左衛門尉島津四郎左衛門尉等、相共致忠戰事、

洞嶺合戰
天王寺阿部野合戰

一三月十三日、八幡洞嶺合戰、同十六日、天王寺安部野合戰、殊致忠節之條、曾我左衛門尉宇津木平三等、相互令見知事、

堺浦合戰

一五月廿二日、和泉國堺浦合戰之時者、懸破御敵多勢之中、抽拔忠之間、爲所見令執進彼人數扇訖、其時騎馬之御敵等、令切落之條、同曾我左衛門尉以下存知事、

一六月一日、八幡善法寺口合戰、竭忠事、

一同月十八日、七月二日、同九日、後攻兩三度合戰、每度抽愚忠之上、九日者、殊御敵數輩、令切落之條、是又同曾我左衛門尉等見知事、

七月十一日八幡城

右今年二月十二日、自勢州御發向之時、至于同七月十一日、八幡凶徒沒落之期、奉屬當御手、所々連々合戰、爲一揆衆抽軍忠訖、下略、

〔茂本文書〕〔大國魂神社文書〕(何レモ去年十二月二十三日條ニ收ム)〔岡本文書〕(三月十六日條ニ收ム)

〔壹箇集殘編〕松井利兵衛藏(土佐) 六、四、七一五

山城國御家人松井八郎助宗申軍忠事

右今年建武正月廿八日、於南都合戰懸先、打入東大寺天開門、追落凶徒等、抽忠節訖、

東大寺打ノ

此條御見知之上者、給御判、爲備後證、恐々言上如件、(建武五年正月廿九日附今川範國證判)

〔野上文書〕(硯田叢史) 六、四、七一五

豐後國野上彦太郎資賴軍忠事、

去二月廿四日、屬當御手、令發向南都、同廿八日、打出西路法華寺前、致軍忠之條、戶次太郎入道、同三郎、佐保又次郎入道見知畢、即時攻入手搦小路、抽合戰忠節之條、戶次左近藏入道、小田原四郎左衛門入道、古庄七郎以下數輩、令見知畢、然早預御判、爲備後證龜鏡、仍恐々言上如件、(建武五年三月日附上杉重能證判)

〔元弘日記裏書〕延元三年二月、於伊勢國所々有合戰、同廿八日、奈良合戰不利、親

王(義)入御吉野、顯家卿發向河內國、

〔參考太平記〕卷第九(上文ハ正月二十三日ノ條ニ收ム) 此下全段、今川家、毛利家、北條家、顯家卿南都ニ著テ、姑ク汗馬ノ足ヲ休テ、諸卒ニ向テ合戰ノ意見ヲ問給ヒケレハ、白河結城入道進テ申ケルハ、今度路次ニ於テ、度々ノ合戰ニ討勝、所々ノ強敵ヲ追散シ、上洛ノ道ヲ開ト

イヘトモ、青野原合戰ニ、聊利ヲ失フニ依テ、黑地橋ヲモ渡リ得ス、按、前段、顯家卿率大兵、勝、及至青野原、兵威益強大、其勢不可敵、於是尊氏使高師泰等率兵一萬、守黑地、而顯家不能破之、卒引兵指吉野、者、非無疑、據結城今云、青野原戰失利云々、及此下、直使松井擊顯家之語等、考之、則顯家陣、青野原之時、有爲桃井等、取敗、而太平記漏合戰、者乎、前後固可疑耳、此儘吉野殿へ參ラン事餘ニ云、甲斐ナク覺候、只此御勢ヲ

延元三年(建武五年・曆應元年)

法華寺前ノ

結城宗廣
京都攻摩
ヲ主張ス

顯家京都ヲ攻メシ

師直、桃井氏ニ常ヲ獎

桃井直常、奈良ヲ攻

以テ都へ攻上リ、朝敵ヲ一時ニ追落スカ、若然ラスハ、戸ヲ王城ノ土ニ埋ミ候ハン
 コソ本意ニテ候へト、誠ニ餘儀ナク申ケリ、顯家卿モ、此儀ケニモト甘心セラレシ
 カハ、頓テ京都へ攻上リ給ハントノ企ナリ、其聞へ京都ニ隱ナカリシカハ、將軍大
 ニ驚給ヒテ、急キ南都へ大勢ヲ差下シ、顯家卿ヲ遮リ留ムヘシトテ、討手ノ評定ア
 リシカトモ、我向ント云人無リケリ、角テハ如何ト、兩將其器ヲ擇ヒ給ヒケルニ、師
 直申サレケルハ、何トシテモ、此大敵ヲ拉カン事ハ、桃井兄弟ニマサル事アラシト
 存候、其故ハ、鎌倉ヨリ退テ長途ヲ經、所々ニシテ戰候シニ、毎度此兵トモニ、手痛ク
 當リテ、氣ヲ失ヒツケタル者共ナリ、其臆病神ノ醒ヌ先ニ、桃井馳向テ、南都ノ陣ヲ
 追落サン事、案ノ内ニ候ト申サレシカハ、サラハトテ、頓テ師直ヲ御使ニテ、桃井兄
 弟ニ此由ヲ仰ラレシカハ、直信按系圖、直信、或作直常兄弟直常仔細ヲ申ニ及ストテ、其日頓テ打
 立、南都へソ進發セラレケル、顯家卿是ヲ聞テ、般若坂ニ一陣ヲ張、都ヨリノ敵ニ相
 當ル、桃井直常兵ノ先ニ進テ、今度諸人ノ辭退スル討手ヲ、我等兄弟ナラテハ叶フ
 へカラストテ、其選ニ相當ル事、且ハ弓矢ノ眉目ナリ、此一戰ニ利ヲ失ハ、度々ノ
 高名、皆泥土ニマヒレヌヘシ、志ヲ一ツニ勵シテ、一陣ヲ先攻破レヤト下知セラレ
 シカハ、曾我左衛門尉ヲ始トシテ、究竟ノ兵七百餘騎、身命ヲ捨テ切テ入、顯家卿ノ

官軍敗北

行賞過當、桃井兄弟、天變ヲ望ム

兵モ、爰ヲ先途ト支戰シカトモ、長途ノ疲武者、何カハ叶フヘキ、一陣ニ陣アラケ破
 レテ、數萬騎ノ兵トモ、思々ニソ成ニケル、顯家卿モ、同ク在所ヲシラス成給ヒヌト
 聞ヘシカハ、直信直常兄弟ハ、大軍ヲ容易追散シ、其身ハ恙ナク、都へ歸上ラレケリ、
 サレハ戰功ハ萬人ノ上ニ立、抽賞ハ諸卒ノ望ヲ塞カント、獨笑シテ待居給ヒタリ
 シカトモ、更ニ其功其賞ニ當ラサリシカハ、桃井兄弟ハ、萬世間ヲ述懷シテ、天下ノ
 大變ヲ、憑ニカケテソ待レケル、(下文三月十三日ノ條ニ收ム)
 (參考太平記)卷第三(正平十三年十月十日ノ條ニ收ム)
 三月三日 官軍小早川相順、同景平等、安藝妻高山ニ據リテ兵ヲ舉グ。
 七日、岩松直國(頼有)之ガ討伐ニ向フ。尋デ、十日、相順等、石見福屋城ノ
 官軍ヲ誘ヒテ賊黨ト戰フ。

〔忽那文書〕

〔伊豫〕 六、四七二八

伊豫國忽那次郎、左衛門尉重清申、小早河民部大夫入道相順、同左近將監景平以下
 輩等、今月三日起謀叛、安藝國沼田莊(沼田郡)内楯籠妻高山之城之間、爲誅伐、同七日御
 發向之御共仕、致軍忠之條、御著到明鏡之上者、爲後證可賜御判候、恐惶謹言、

建武五年三月十一日

左衛門尉重清 狀

延元三年(建武五年・曆應元年)

八六七

承了(岩松直國)花押(47)

岩松直國ノ證判

(註) 建武三年六月九日、同十九日條參照。

〔吉川家什書〕十三親重御代 (建武五年三月廿七日) 〔吉川家什書〕十三賞經御代 (建武五年三月廿九日附藤原景成)

狀申

三月十三日 新田義興、北畠顯信ト共ニ男山ニ據ル。是日、高師直、之ヲ攻ム。是ヨリ男山ノ攻防戰續ク。

〔吉川家什書〕十三經久御代 (六、四、七五七)

吉河彦次郎經久申軍忠事、

右今年三月十三日、八幡御合戰之時、馳向保良之多和、致合戰追退御敵畢、且合戰之次第高橋孫五郎、長門四郎令見及者也、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、(建武五年四月廿五日附)

高師直ノ證判

〔石清水八幡宮記錄〕當宮錄事抄 (山城) (六、四、七六一)

石清水八幡宮臨時延引例

同(建武)五年、曆應 祭延引、依三月十一日男山合戰事也、

男山合戰

洞塔合戰

洞塔下合戰

北畠顯信八幡山ニ據ル

高師直之ヲ圍ム

石清水八幡宮四月三日神事延引例

同(建武)五年、曆應 神事延引、三月十一日依男山合戰也、

〔小早川什書〕六 (六、四、七五〇) (建武五年三月廿六日附武田信武證判)

邊見四郎有朝申軍忠事

一今月十三日、屬御手馳向八幡、於洞塔下致至極合戰、追散凶徒等畢、柏原與三同孫、四郎等、同所合戰之間所見及也、

一同十六日、於天王寺安部野懸先、致散々合戰、追散御敵等畢、南古彌九郎入野七郎等、致同所合戰畢、然早爲後證、可預御判之由相存候、下略

〔參考太平記〕卷第九 (上文、去月二十一日ノ條ニ收ム) 懸ル處ニ顯家卿、舍弟春日少將顯信朝臣、今

度南都ヲ落シ、敗軍ヲ集メ、和泉境ニ打出テ、近隣ヲ犯奪、頓テ八幡山ニ陣ヲ取テ、勢京洛ヲ吞、是ニ依テ京都又騒動シテ、急キ討手ノ大將ヲ差向ヘシトテ、嚴命ヲ下サレシカトモ、軍忠他ニ異ナリシ桃井兄弟ダニモ、抽賞ノ儀モナシ、増テ其已下ノ者ハ、サコソ有ンスラントテ、曾テ進ム兵更ニ無リケル間、角テハ叶フマシトテ、師直一家ヲ盡シテ、打立給ヒケル間、諸軍勢是ニ驚テ、我モ我モト馳下ル、サレハ其勢雲霞ノ如クニテ、八幡山下四方ニ、尺地モ殘ラス充満タリ、サレトモ要害ノ堀嚴シテ、

延元三年(建武五年・曆應元年)

桃井直常
八幡ヲ攻
師直天王
寺ニ發向
新田義興
顯信ト八
幡山ニ據

猛卒悉志ヲ同シテ、楯籠タル事ナレハ、寄手毎度戰ニ利ヲ失フト聞ヘシカハ、桃井兄弟ノ人々、我身ヲ省テ、今度ノ催促ニモ應セズ、都ニ殘留ラレタリケルカ、高家氏族ヲ盡シ、大家軍兵ヲ起スト云トモ、合戰利ヲ失フト聞テ、餘所ニテ如何見テ過ヘキ、述懷ハ私事、弓矢ノ道ハ公界ノ義、遁レヌ所ナリトテ、偷ニ都ヲ打立テ、手勢計ヲ引率シ、御方ノ大勢ニモ牒シ合ズ、自身山下ニ推寄セ、一日一夜攻戰フ、是ニソ官軍モ若干討レ、創ヲ被リケル、直信直常ノ兵トモ、殘少ニ手負討レテ、御方ノ軍ヘ引テ加ル、此比ノ京童部カ、桃井塚ト名ツケタルハ、兄弟合戰ノ在所ナリ、是ヲ始トシテ、厚東駿河守、大平孫太郎、和田近江守、自ラ戰テ創ヲ被リ、數輩ノ若黨ヲ討セ、日夜且暮相挑、カ、ル處ニ執事師直天正本作國司顯家、非也所々ノ軍兵ヲ招キ集メ、和泉境河内ハ、故敵國ナレハ、サラテタニ恐懼スル處ニ、強敵其中ニ起リヌレハ、和田楠カカヲ合スベシ、イマタ微ナルニ乘テ、早速ニ對治スヘシトテ、八幡ニハ大勢ヲ差向テ、敵ノ打出ヌ様ニ四方ヲ圍ミ、師直ハ天王寺ヘソ向ハレケル、(下文ハ五月二十一日ノ條ニ收ム)

〔參考太平記〕

卷第(上文ハ六月是月ノ條ニ收ム)

芳野殿ヨリ、勅使ヲ立ラレテ仰ラレケルハ、義興顯信敗軍ノ勞兵ヲ率シテ、八幡山ニ楯籠ル處ニ、洛中ノ逆徒數ヲ盡シテ、是ヲ圍ム、城中已ニ食乏シテ、兵皆勞ル、然リトイヘトモ、北國ノ上洛近ニアルヘシト聞テ、

天皇新田
義貞ニ上
洛ヲ促シ

士卒梅酸ノ渴ヲ忍フ者ナリ、進發若延引セシメハ、官軍ノ沒落疑有ヘカラス、天下ノ安危、只此一舉ニアリ、早其境ノ合戰ヲ閣テ、京都ノ征戰ヲ專ニスヘシト仰ラレテ、御宸筆ノ勅書ヲソ下サレケル、(下文ハ七月五日ノ條ニ收ム)

三月十六日 顯家、足利軍ト天王寺、安部野等ニ戰ヒテ敗北ス。時ニ、新田西野修理亮、官軍ノ將トシテ戰フ。

〔岡本文書〕

(羽後 六、四、七一七)

岡本觀勝房良圓軍忠事

- 一去二月廿八日、南都御共仕、於奈良坂本致軍忠畢、
- 一同三月十二日、男山御共仕、同十三日、合戰抽軍忠畢、
- 一同十四日、天王寺御共仕、同十六日、安部野合戰致軍忠、則攻入天王寺、致合戰之刻、新田西野修理亮之手者一人、生捕之條、於天王寺面之野、石河孫太郎入道、長田左近爲奉行、被遂實檢之上、高橋中務丞爲奉行、重被實檢畢、
- 一同五月廿二日、於泉州堺濱、合戰致忠節畢、
- 一同晦日、男山御共仕之處、被定黃笠注衆之間、良圓爲其人數、同六月十八日、攻登男山城之南屏際、致合戰、刻、被射左肩畢、同七月二日、於善法寺口致合戰之時、被射右

延元三年(建武五年、曆應元年)

安部野、
天王寺合
戰、
官軍中ニ
新田西野
修理亮ア
リ

六月十八
日、八幡山
城沒落

手訖此等次第、石河孫四郎、同彌次郎、同所合戰之間、令見知之、上野介大貳房被遂
實檢畢、凡御發向最初、自六月十八日凶徒沒落之期、至于七月十一日、云不退宿直、
云所々御發向、御共著到等分明也、然早賜御判、爲備龜鏡、恐々言上如件、

建武五年潤七月日

(高御直)
(花押)

四月十一日 新田大館氏明、和泉久米田寺ニ兵士ノ狼藉スルヲ停ム。

〔久米田寺文書〕(和泉)

△六四、七九一、

於久米多寺、軍勢并甲乙人等、不可致狼藉、尙以至違犯之輩者、可有罪科之狀如件、

延元三年四月十一日

(大館氏明)
源朝臣(花押)(48)

〔註〕大日本史料曰、本文ハ稍疑フベキモノアリト雖ドモ、姑ク之ヲ收録ス、ト、

併シ、木花押ハ、元弘三年五月十八日、鎌倉攻略ノ條ニ收メタル天野文書、及、延

元三年十一月十九日條ノ忽那文書ノ花押ト同一ナレバ、之ハ大館氏明ノ花

押ナル事明白ナリ。

四月十三日 皇太子恆良親王、薨去アラセラル。

〔參考太平記〕卷第九 東宮附將軍宮御隱事

大館氏明
ノ花押

尊氏直義
東宮ニ替
復セント
企ツ

鳩毒ヲ進

成良親王
ト共ニ押
籠メラレ
給フ

新田義貞、義助、柚山ヨリ打出テ、尾張守、伊豫守府中ヲ落、其外所々ノ城、落サレヌト
聞ヘケレハ、尊氏卿、直義朝臣大ニ忿テ、此事ハ、偏ニ春宮(恆良)彼等ヲ御助アラン爲
ニ、金崎ニテ此等ハ腹ヲ切タリト宣シヲ、誠ト心得テ、柚山ヘ遅ク討手ヲ差下シツ
ルニ依テナリ、此宮、是程當家ヲ失ハント思召ケルヲ知テ、若只置奉ラハ、何様不思
議ノ御企モ有ヌト覺レハ、潛ニ鳩毒ヲ進ラセテ失ヒ奉レト、粟飯原下總守氏光今
家、毛利家、金勝院、天正本、及第二十四卷、第二十七卷、本文諸異本、或作ニニソ下知セラレケル、春宮ハ、連枝
清胤、相繼、至三十二卷、有本文及異本、或作ニ下野守ニ者、亦相繼ノ御兄弟、將軍宮トテ、直義朝臣、先年鎌倉ヘ申下參セタリシ、先帝第七宮ト也、成良
二卷、天正本、及第十三卷本文、並作ニ八宮、非也、神皇正統紀云、第八宮義良、云々、又云、義良親王同母兄恆良、成良、云云、
據此、則恆良爲三六宮、成良爲三七宮、者、爲確當、又按歷代皇紀、建武三年十二月十四日、立爲光明帝太子、神皇正統紀
說、既出第十七卷、證幸一所ニ押籠ラレテ御座アリケル處ヘ、氏光藥ヲ一裏持テ參リ、イ
供奉人々被禁殺一段ソトナク加様ニ打籠テ御座候ヘハ、御病氣ナトノ崩ス御事モヤ候ハンスラント
テ、三條殿ヨリ調進セラレテ候、毎朝一七日開召候ヘトテ、御前ニソ指置ケル、氏光
罷歸テ後、將軍宮此藥ヲ御覽セラレテ宣ケルハ、病ノイマタ見ヘサルサキニ、兼テ
療治ヲ加ル程ニ我等ヲ思ハ、此一室ノ中ニ押籠テ、朝暮物ヲ思ハスヘシヤ、是ハ
定テ病ヲ治スル藥ニハアラシ、只命ヲ縮ル毒ナルヘシトテ、庭ヘ打捨ントセサセ
給ヒケルヲ、春宮御手ニ取セ給ヒテ、抑尊氏直義等、其程ニ情ナキ所存ヲ挾ム者ナ

延元三年(建武五年、曆應元年)

八七三

ラハ、縱此藥ヲ飲ズトモ、遁へキ命カハ、是元來所願成就ナリ、此毒ヲ飲、世ヲハヤフ
セハヤトコソ存候へ、

○天正本云、春宮宣ケルハ、尊氏直義等、其程ニ情ナキ所存ヲ挾マハ、縱此毒藥ヲ
服セストモ、失フマシキ命ニテモ候ハス、サレハ何シニ毒ヲ與ヘテ、我等ヲ失ヒ
候ヘキ、又オソロシキ藥ナリトモ、服シテ命ヲ終ン事、元ヨリ願フ所ノ幸ニテ候
物ヲ、其故ハ、先帝ヲ始進ラセテ、親戚悉外土ノ塵ニ塗レ、卿相雲客、同シク他郷ノ
雲ニ立浮レ、相從フ近臣一人モナク、禁錮ノ中ニ身ヲ縮メ、起居モ更ニ快カラス、
是程、浮世ノ中ニテ候ケルヲ、幼キ心ニ思ヒモ知ス、明シ暮シ候ケルコソ口惜ク
候へ、何ノ執心カ有テ、一日片時ノ命ヲモ、惜ク思ヒ候ヘキ、云々、下同、本文
夫人間ノ習、一日一夜ヲ經ル間ニ、八億四千ノ念アリ、一念惡ヲ發セハ、一生ノ惡身
ヲ得、十念惡ヲ發セハ、十生惡身ヲ受、乃至千億ノ念モ、又然ナリトイヘリ、如是一日
ノ惡念ノ報、受盡サン事猶難シ、況一生ノ間ノ惡業ヲヤ、悲哉未來無窮ノ生死出離
何レノ時ソ、富貴榮花ノ人ニ於テ、猶此苦ヲ遁レス、況我等籠鳥ノ雲ヲ戀、淵魚ノ水
ヲ求ムル如クニ成テ、聞ニ附見ルニ從フ悲ノ中ニ、待事モナキ月日ヲ送リテ、日ノ
ツモルヲモ知ス、惡念ニ犯サレンヨリモ、命ヲ鳩毒ノ爲ニ縮テ、後生善處ノ望ヲ達

東宮薨去

將軍宮薨
去

直義ノ行
末

センニハシカシト仰ラレテ、毎日法華經一部アソハサレ、念佛唱サセ給ヒテ、此鳩
毒ヲソ聞召ケル、將軍ノ宮是ヲ御覽シテ、誰トテモ懸ルウキ世ニ、心ヲ留ヘキニア
ラス、同クハ後生マテモ、御供申サンコソ本意ナレトテ、諸共ニ此毒藥ヲ、七日迄ソ
聞召ケル、懸テ春宮ハ、其翌日ヨリ御心地例ニ違ハセ給ヒケルカ、御終焉ノ儀閑ニ
シテ、四月十三日ノ暮程ニ、忽ニ隱サセ給ヒケリ、將軍宮ハ、二十日餘迄御座アリケ
ルカ、黃疸ト云御イタハリ出來テ、御遍身黃ニ成セ給ヒテ、是モ終ニハカナクナラ
セ給ヒニケリ、櫻雲記云、曆應二年七月十三日、恒良於北京遭害、同二十一日、成良薨、年十六歲、云云、按、曆應二
年、即南朝延元四年也、此說非、是、諸本此段首云、尊氏直義、聞、義貞陷、越前府城、因怒鳩、殺東宮、云
々、義貞陷、越前城、實延元三年二月也、且此下云、去年中務親王、於、金崎、自害、云々、哀ナルカナ、尸鳩、樹頭ノ
中書王自殺者、實延元二年也、由、此見、之、則、恒良、成良、之、遭、害、爲、延元三年、明矣、 哀ナルカナ尸鳩樹頭ノ
花、連枝早ク一朝ノ雨ニ從ヒ、悲ヒカナ鶴鶴原上ノ草、同根忽ニ三秋ノ霜ニ枯ヌル
事ヲ、去々年ハ、當作、先年、大塔宮遺書、建
武二年也、至此凡四年矣、 兵部卿親王、鎌倉ニテ失ハレサセ給ヒ、又去年ノ
春ハ、中務親王金崎ニテ御自害アリ、此等ヲコソタメシナク哀ナル事ニ、聞人心ヲ
傷シメツルニ、今又春宮、將軍宮、幾程ナクテ御隱アリケレハ、心アルモ心ナキモ、是
ヲ聞及フ人毎ニ、哀ヲ催サスト云事ナシ、カクツラクアタリ給ヘル直義朝臣ノ行
末、イカナラント思ハヌ人モ無リケルカ、果シテ毒害セラレ給フ事コソ、不思議ナ
レ、

延元三年（建武五年・曆應元年）

康永三年
後醍醐天皇
皇太子
東宮
薨去

〔師守記〕^四 正月六日丁卯天晴、後聞今日後醍醐院皇子先坊、御事、此間被預申近衛前殿（基）也。

〔宮下過去帳〕^{上野} 五日、後醍醐第四王子成良親王、曆應元戊寅正月五日、於獄中薨、京都二面。

〔註〕 太平記ノ日附、必ズシモ信據シ難ク、又、右ノ師守記ノ記載、太平記ト齟齬シ、或ハ成良親王ヲ指セルモノナラムカ、暫ク是日ニ收ム。

四月十四日 斯波家兼、若狹明通寺ヲシテ越前ナル新田軍對治ヲ祈ラシム。

〔明通寺文書〕^{著書} △六、四、七九一、

越前國凶徒對治祈禱事、可被致精誠之狀如件、

建武五年四月十四日

（新田家藏）
伊豫守（花押）

明通寺院主御房（明通寺ハ若狹遠敷郡門前村ニ在リ）

四月二十八日 是ヨリ先、懷良親王、伊豫ニ着セラル。是日、四條隆資親王ニ扈從セル五條賴元ニ之ヲ祝シ、且、諸方官軍ノ優勢トナレルヲ報ズ。

〔忽那一族軍忠次第〕^{伊豫} 他國合戰 △六、五、補、四、

懷良親王
忽那一族
爲ニ
渡御

一 征西將軍宮、當島（伊豫忽那一族）、渡御供御、并御手人々兵糧事、

一同宮御服調進事、

一同宮鎮西御下向御出立、并路次供御以下事、

一同御手人十二人、衣裳兵糧沙汰事、三ヶ年、

〔五條文書〕^{（筑後）} △六、五、補、五、

無爲御下著返々目出候、此御使不所持注進之間無正躰候、其堺事重可令注進給候、諸方得利之由其聞候、其堺事相構急速一途可令致沙汰給候謹言、

四月廿八日

（四條）
隆資（花押）

（五條圖記）
勘解由次官殿

〔註〕 大日本史料曰、右ノ文書ハ其年ヲ詳カニセズト雖ドモ、親王ガ伊豫御著ノ時ノモノニ似タルヲ以テ、姑ク此ニ合敘ス、ト。

五月二日 義貞ノ軍、大イニ振ヒ、足利高經ヲ越前足羽ノ黒丸城ニ追籠メ、全軍ヲ以テ足羽諸城ヲ攻圍ス。

〔參考太平記〕^{卷第} 二十 黒丸足羽度々軍事

新田左中將義貞朝臣、去二月始按、延元三年二月也、今川家、毛利家、金勝院、西源院、南都、天正本、作正月、非也、第十九卷義貞攻落越前府城一段、諸本皆作二月、越前

延元三年（建武五年・曆應元年）

諸方得利

敵城七十餘城ヲ暫ク攻落ス

足利高經
黒丸城ニ
アリ

足羽城攻
一條行實
江守

船田政經
桃井親述
安居渡

細谷秀國
勝虎城

新田義貞公篇

府中合戦ニ打勝給ヒシ刻國中ノ敵城七十餘箇所ヲ第十九卷、天正本、作三十餘箇所、今同、本文、共相細細暫時ニ攻落シテ、勢又強大ニナリヌ、此時山門大衆、皆舊好ヲ以テ、内々心ヲ通セシカハ、先彼比叡山ニ取上リテ、南方ノ官軍ニカヲ合、京都ヲ攻ラレン事ハ、無下ニ輒カルヘカリシヲ、足利尾張守高經、猶越前黒丸城ニ天正本云、黒丸入道覺性カ構タル要害ナリ、云々、按、朝入道覺性、是朝倉氏住、越前之始也、落殘テオハシケルヲ、攻落サテ上洛セン事ハ、無念ナルヘシト、詮ナキ小事ニ目ヲ懸テ、大義ヲ次ニ成レケルコソウタテケレ、五月二日義貞朝臣自ラ六千餘騎ノ勢ヲ率シテ、國府ヘ打出ラレ、波羅密、安居、河合、春近、江守、五箇所ヘ、五千餘騎ノ兵ヲ差向ラレ、足羽城ヲ攻サセラル、先一番ニ義貞朝臣ノ小舅一條少將行實朝臣按、系圖、行實者、義貞妻勾當内侍之姪也、而本文以、内侍、爲、行房女、故云、爾耳、未知孰是、五百餘騎ニテ江守ヨリ推寄テ、黒龍明神ノ前ニテ相戦、行實ノ軍利アラヌシテ、又本陣ヘ引返サル、金勝院本云、行實江守ヨリ推寄、河越ヘ、引返、ナクシテ、又引返、云々、二番ニ船田長門守政經第十五卷本文作、經政、今作、政經、者、七百餘騎ニテ、金勝院本云、名孝基、而義貞、天正本、作、五百、安居渡ヨリ押寄テ、兵半河ヲ渡ル時、細川出羽守金勝院本云、名孝基、而義貞、天正本、作、五百、二百餘騎ニテ、天正本、作、二百、河向ニ馳合セ、高岸ノ上ニ相支テ散々ニ射サセケル間、漲ル浪ニ溺レテ、馬人若干討レニケレハ、是モ又差タル合戦モ無シテ引返ス、三番ニ細屋右馬助右、金勝院、天正本、作、左、非也、金勝院本云、名秀國、千餘騎ニテ河合庄ヨリ推寄、北ノ端ナル勝

斯波家兼

五月十一日(1) 明通寺、義貞軍對治祈禱ノ卷數ヲ斯波家兼、石橋和義、掃部助俊氏ニ贈ル。之ニ依テ、右二名、是日、感謝狀ヲ明通寺ニ送ル。
〔明通寺文書〕(著狹) △、六、四、七九一、
卷數一技給候了、祈禱事目出度候、恐々、
五月十一日
明通寺衆徒中

家兼(花押)

尾張左衛門佐殿御請取
卷數一技悦給候了、恐々謹言、
延元三年(建武五年・曆應元年)

新田義貞公篇

石橋和義

建武五
五月十一日

明通寺衆徒御返事

和義(花押)

八八〇

掃部助俊

御卷數一技給候了、祈禱事被懸御意候、喜入候、恐々謹言、

建武五
五月十一日

明通寺衆徒御中

掃部助俊氏(花押)

(註) 斯波家兼祈禱ヲ明通寺ニ求ムル事前月十四日條ニ收ム、

五月十一日(2) 尊氏、土岐賴貞ニ令シテ、義貞ヲ討伐セシム、

〔萩藩閥閱錄〕廿七ノ二 △六、四、九〇三、
熊谷帶刀

越前國凶徒誅伐事、所被仰于土岐伯耆入道(頼)也、使共事可令勤仕狀如件、

建武五年五月十一日

熊谷小四郎殿

(尊氏ナルベシ)
御判

五月二十二日 北畠顯家、高師直卜和泉堺浦、及ビ石津ニ戰ヒテ、之ニ死ス。時ニ、官軍ノ將新田綿打ナル人、亦、之ニ死ス。

〔田代文書〕三
筑後 △六、四、八〇九、

堺浦ノ戰
細川顯氏
堺浦ニ逗
留ス、
津源顯
取ルニ陣
ヲ

田代豐前三郎顯綱申、去五月於堺浦、奥州前國司顯家卿以下御敵等連々寄來之間、每度御共仕、致合戰之忠節候畢、就中、堺浦御逗留間、於石津取陣(陣下同シ)同廿二日、於合戰之場、家人高岡兵衛三郎爲綱致拔群之軍忠之條、無其隱候、且岸九郎左衛門尉、莊十郎等見知之上者、不可有御不審候、然者早賜御判、可備後證之由相存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(建武五年七月十日)
(附細川顯氏證判)

〔大友文書〕二
立花伯爵所藏 △六、四、七四八、

大友一族狹間大炊四郎入道正供申軍忠事
今年三月十三日、屬于當御手、於男山洞當下、致至極軍忠之刻、若黨兵衛五郎直光左股被射、同十六日、於天王寺安部野原致合戰軍忠之處、遠江(國カ)因井介手者生捕(紀カ)糺藤五入道令切鎖(頭カ)訖、於當寺致不退警固、同五月十六日、令發向和泉國堺津、同廿二日、堺濱合戰之時、馳向新田綿內致太刀打之條、詮磨大炊助政秀令見知訖、同廿五日、令歸洛、同廿九日、經宇治、六月一日、致男山合戰、自同日所陣洞當下、致不退警固、同十八日、自葛和路押寄一城戶、正供致軍忠之刻、乍被射左及太刀打、御敵於城內追籠訖、隨而取陣城戶口、致日々夜々合戰、抽拔群軍忠者也、將又自六月一日、迄于七月十二日、凶徒沒落之期、不去陣內、致合戰軍忠者也、此等次第、惣領大友式部丞氏泰代出羽三郎藏人師

建武五年(曆應元年)

八八一

七月十二日
男山合戰
男山合戰
官軍新田
綿内ナル
人ト戰フ

宗證判狀分明之上者、預御一見狀、爲備後代龜鏡、仍言上如件

建武五年八月日

執事(高御直)判

裏書云

大友藏人一見狀

校合畢

△六四、八二四

〔深堀系圖證文記錄〕二

(佐賀文書集所收)

一建武五年七月三日一色道猷下知狀一通

去五月廿二日(辰刻)於攝津國堺浦、奥州先國司顯家卿、新田綿打、伯耆判官(名和義高)已下

凶徒數輩被討取事、同廿四日御教書如此、任被仰下之旨、所殘之與類若令沒落者、致用意可加誅伐也、仍執達如件

建武五年七月三日

沙彌判

深堀孫太郎(侍)入道殿

一建武五年七月三日少輔道剩下知狀一通

顯家卿已下凶徒等、於和泉國石津悉被討取由事、去五月廿五日御教書如此、早可被

堺浦ニ於テ顯家卿、新田綿打等戰死ス

石津ニ於テ顯家卿以下ヲ打取ル

存其旨候、仍執達如件

建武五年七月三日

沙彌判

深堀彌五郎(政卿)殿

〔參考太平記〕

卷十(上文ハ三月十三日ノ條ニ收ム)

顯家卿ノ官軍共、疲レテ而モ小勢ナレハ、身命ヲ棄テ支戰フトイヘトモ、軍利ナクシテ、諸卒散々ニ成シカハ、顯家卿立足モナク成給ヒテ、吉野ヘ參ラント志シ、僅ニ二十餘騎ニテ、大敵ノ圍ヲ出ント、自ラ利ヲ破リ、堅ヲ碎給フトイヘトモ、其戰功徒ニシテ、五月二十二日、和泉境、安部野ニテ討死シ給ヒケレハ、按第二十一卷、天下時勢壯段、顯家中、流矢ニ而死、公卿補任云、顯家時年二十一相從フ兵、悉腹切創ヲ被リ、一人モ殘ラス失ニケリ、

安部野ニ於テ顯家卿戰死ス

顯家卿ヲハ、武藏國越生四郎左衛門尉討奉リシカハ、首ヲハ丹後國住人武藤右京進政清是ヲ取テ、兜太刀マテ、進覽シタリケレハ、師直是ヲ實檢シテ、疑フ所無リシカハ、抽賞御威ノ御教書ヲ、兩人ニソ下サレケル、哀ナルカナ顯家卿ハ、武略智謀其家ニアラストイヘトモ、無雙ノ勇將ニシテ、鎮守府將軍ニ任シ、奥州ノ大軍ヲ、兩度マテ起シテ、尊氏卿ヲ九州ノ遠境ニ追下シ、君ノ宸襟ヲ快ク休メ奉ラレシ其譽、天下ノ官軍ニ先タツテ、爭フ輩無リシニ、聖運天ニ叶ハス、武德時至リヌル其謂ニヤ、

延元三年(建武五年・曆應元年)

八八三

南朝方ノ
落膽

新田義貞公篇

八八四

股肱ノ重臣アヘナク、戰場ノ草ノ露ト消給ヒシカハ、南朝ノ朝、本文誤作シ、今依三興本改正之侍臣官軍モ、聞テカヲソ失ヒケル、

五月二十四日 是ヨリ先、新田金谷經氏ノ據レリト思ハル、攝津丹生寺城及ビ香下寺城ノ官軍、赤松仁木等ノ足利軍ニ對シ攻勢ニ出デ、三月二十六日、湊河ニ、四月二日、鎬射ニ、同月、福田莊三草山ニ戰フ。是日、瓦林ノ城墾ヲ攻ム。尋デ、六月二日、又湊河ニ攻メ寄セテ戰フ。爾後、攝播ノ間ニ戰ヒ數月ニ渉ル。

〔島津文書色川〕三 △六、四、七七五、

目安

島津周防五郎三郎忠兼軍忠條々

一去四月、丹生寺凶徒等、擬令當國福田庄亂入間、則馳向三草山致合戰、若黨荒木又五郎被射右足畢、

一同六月、兵庫島御發向之間、於生田前致合戰、舍弟十郎被射害乘馬訖、條々御見知之上者、賜御證判、欲備後日支證、仍目安如件〔建武五年六月日〕〔附赤松則村證判〕

〔余田文書〕〔攝津〕 △六、四、七七五、

丹生寺凶徒
福田庄三草山合戰
生田合戰

湊河合戰
鎬射合戰
瓦林城合戰
香下寺城
丹生寺城
ノ凶徒

攝津國貴志五郎四郎義氏申軍忠事

一去三月廿六日、湊河美作權守〔赤松〕要害合戰之時、爲後措馳向、致忠節事、

一同三月廿九日、引籠有馬郡鎬射要害〔山田〕四月二日合戰致忠節事、

一同四月十三日、楯籠瓦林城〔武庫〕役所警固等、致忠節之處、同五月廿四日、五日、香下寺〔有馬〕丹生寺〔八部〕兩城凶徒等、率多勢寄來之間、打出城中、於大手致散々合戰、

抽忠節畢、

右軍忠次第、大概如此、然早賜御證判、爲備龜鏡、注進如件〔建武五年六月日〕〔附某證判〕

〔薩藩舊記〕前集十五 入來本田氏文書 △六、四、七七六、

本田次郎左衛門尉久兼謹言上

欲早任度々軍忠旨賜御一見狀問事

右自四月十七日、兵庫警固御共仕、同六月二日、御敵湊河城寄來間、屬御手致合戰畢、

同三日、押寄前城追散御敵訖、此等次第、加藤式部丞令見知畢、然早下賜御一見狀、恐々言上如件〔建武五年六月日〕〔附石塔某力證判〕

〔註〕 去年九月六日、本年七月二十七日條參照。

六月是月 越後ノ新田大井田氏經等、兵ヲ率テ越前ニ來リ、義貞ノ軍

延元三年〔建武五年・曆應元年〕

八八五

二會ス。

〔參考太平記〕卷第二十 越後勢赴越前事

サレハ越後國ハ其境上野ニ隣テ新田一族充滿タル上元弘以後義貞朝臣勅恩ノ國トシテ拜任已ニ多年タリシカハ一國ノ地頭御家人其烹鮮ニ從フ事日久シ義貞已ニ北國ヲ平ケテ京都へ攻上ラントシ給フ由ヲ聞テ大井田彈正少弼同式部大輔按系圖大井田氏經乃彈正少弼式部大輔也今作二人者中條入道中條金勝院本作鳥山左京可疑第十七卷金勝院本有彈正少弼義景亦未知何人亮風間信濃守彌津掃部助彌津今川家毛利家金勝院西源院本作彌知餘皆倣之助金勝院本作頭而載一井宮内大輔丹生大炊助トシテ其勢都合二萬餘騎ニテ二萬金勝院本作三萬七月三日越後府ヲ立テ越中國へ打越ケルニ其國ノ守護普門藏人俊清國ノ境ニ出合テ是ヲ支ヘントセシカ共俊清無勢ナリケレハ大半討レテ松倉城へ引籠ル越後勢ハ爰ヲ打捨テ聽テ加賀ノ國へ打通ル富樫介金勝院本云名家按是ヲ聞テ五百餘騎ノ勢ヲ以テ安宅篠原ノ邊ニ出合フ然共敵ニ對揚スヘキ程ノ勢ナラネハ富樫カ兵二百餘騎討レテ那多那多或作三城へ引籠ル金勝院本云高家ハ在京シタリケレトモ一族ニ類齊藤四郎用家高松濱ニテ懸合散々ニ戰ヒケレトモ叶ハス那谷城へ引籠ル云々越後勢兩國二箇度ノ合戦ニ打勝テ北國所々ノ敵恐ルニ足ラスト思ヘリ此マニテ聽テ越前へ打越ヘカリシカ是ヨリ京マテノ道ハ多年ノ兵亂ニ國ツイヘ民疲レテ兵糧有ヘカラ

越後ニ於ケル新田氏ノ勢力

越後ノ大井田氏經等越前ニ發向ス

普門俊清ヲ破ル

富樫介ヲ破ル

今湊宿ニ逗留

越後勢越前河合ニ著ス

高經尙黒丸城ニ在リ

整溝ノ埋草ヲ用意ム

ズ加賀國ニ暫逗留シテ行末ノ兵糧ヲ用意スヘシトテ今湊宿ニ金勝院本載安宅十餘日マテ逗留ス其間ニ軍勢劔白山以下所々ノ神社佛閣ニ打入テ佛物神物ヲ侵シ取民屋ヲ追捕シ資財ヲ奪取事法ニ過タリ嗚呼靈神怒ヲ爲トキハ災害岐ニ滿トイヘリ此軍勢ノ惡行ヲ見ルニ其罪若一人ニ歸セハ大將義貞朝臣此度ノ大功ヲ立ン事如何アルヘカラント兆前ニ機ヲ見ル人ハ潛ニ是ヲ怪シメリ

宸筆勅書賜義貞事

日ヲ經テ越後勢已ニ越前河合ニ著ケレハ義貞ノ勢彌強大ニ成テ足羽城ヲ拉カシ事雙手ノ中ニアリト人皆掌ヲ指思ヒヲナセリケニモ尾張守高經ノ義ヲ守ル心ハ奪カタシトイヘトモ纒ナル平城ニ三百餘騎ニテ楯籠リ敵三萬餘騎ヲ四方ニ受テ籠鳥ノ雲ヲ繼涸魚ノ水ヲ求ル如クナレハ何マテノ命ヲカ此世ノ中ニ殘スラント敵ハ是ヲ欺テ勇ミ御方ハ是ニ弱テ悲メリ既ニ來二十一日ニハ黒丸城ヲ攻ラルヘシトテ整溝ヲ埋ン爲ニ埋草三萬餘荷ヲ國中ノ人夫ニ持寄サセ持楯三千餘帖ヲハキ立テ様々ノ攻支度ヲセラレケル處ニ下文ハ三月十三日及七月五日ノ條ニ收ム

〔註〕本條ノ事太平記ニ七月三日越後ヲ發ストスレドモ前後ノ關係ヨリ見テ其ノ日附信據シ難キニヨリ暫ク之ヲ六月是月ニ收ム

延元三年(建武五年・曆應元年)

七月五日 是頃、尙、新田義興等ノ據レル男山八幡ノ攻防戰續ク。六月十八日ヨリ、高師直、師泰、兵ヲ合セテ攻撃スル事愈々急ナリ。天皇、義貞ニ勅シテ、上洛シ之ヲ救援セシメ給フ。義貞、依テ、延曆寺ト牒シ合セ、義助ヲシテ、之ガ救援ニ發向セシム。是日、夜、足利軍、火ヲ男山八幡ニ放チテ其ノ社壇ヲ焚ク。義助等ノ救援軍、之ヲ男山陷落ト誤リテ軍ヲ返ス。十一日、男山、陷ル。

〔壺筒集殘編〕

野見園右衛門所藏土佐

△六、四、八一四

目賀田五郎兵衛入道玄向謹申合戰間條々事

一今年建武五月八日馳下天王寺、同廿二日和泉國酒井浦御合戰時、致軍忠後、御上洛間、御共仕候了、中林次郎太郎、倉栖左衛門尉所見也、

一同年五月廿九日、御共仕京都罷立、自赤井河原古木橋波多取陣候了、

一同六月一日、八幡山麓於放生河、終日致合戰、其夜洞嶺取陣、候了脱力

一同十八日、押寄放生河麓、在家等燒拂候了、

一十九日、越後守殿高師御手無勢間、可發向由被仰出間、即馳參、後又被召間馳參後、洞嶺北端取陣候、了脱力

十一日男
山没落ス

黄檢之衆

一七月九日、細河刑部大輔殿頼春後攻御合戰間、馳向凶徒陣致合戰、頸壹同生捕壹人沼田三郎左衛門尉中間云々召進間、同十日、於參河守殿高師御陣御實檢之、仍爲倉栖左衛門尉奉行御注進分明也、

一同十一日夜、八幡山御敵没落間、同十二日御共仕、上洛仕候也、

右此外不遑注進、此等次第、細河刑部大輔殿御手多賀掃部助、并高宮四郎所見也、然早賜御證判、爲備龜鏡、恐々言上如件、

建武五年八月日

沙彌玄向

高師花押

〔岡本文書〕

羽後 △六、四、八三四

著到

岡本觀勝房良圓

右去五月晦日、八幡御發向之間、御共仕、爲黄檢高師之衆、自同六月十八日、至于七月十一日、於八幡山南尾、晝夜令警固訖、仍著到如件、

建武五年七月日

高師花押

建武五年七月日

八八九

〔北文書〕(豐前) △六、四、八三六、(建武五年七月十日附平某證判)

八幡宇佐宮神官兼豐後國田染一分領主孫三郎宣基申山城國八幡合戰軍忠事、右去月十八日、屬于當御手、令發向於葛和路坂口、抽忠節、今月三日致彼坂口城戶之警固、同月六日於同一城戶之際、勵軍功之條、下野次郎左衛門尉并豐(前九)彦六入道令見知之上者、(下略)

〔三刀屋文書〕(諸家文書) △六、四、八三七、(建武五年七月十日附平某證判)

目安

諏方部三郎入道信惠(扶重)申軍忠間事

去五月晦日、屬于當御手、罷向大渡、同六月一日、自宇治馳向洞嶺、攻入八幡山城戶口致軍忠、同日大渡御發向之間、御共仕、於橋瓜抽合戰之忠、追返御敵畢、同月十八日、打渡放生會河(綴喜)終日致軍忠畢、次七月二日、重押寄放生會河致合戰、同月十一日夜、攻落御敵畢、同十二日馳向禁野片野(交野)燒拂在家等畢、然者去自五月晦日、至于七月十二日、云度々合戰、云晝夜警固、致隨分忠勤畢、此等次第、山口七郎三郎入道、高井左近允令存知上者、(下略)

〔白川文書〕(陸前) △六、四、八三八、

乘船渡河

石河五郎太郎兼光軍忠事

右去五月廿九日、爲御手馳向山崎、六月十八日、一族等並安積新兵衛尉相共乘船渡河、所凶徒楯籠燒拂橋本(久世)在家等、追散御敵等、即押寄八幡北搦手、至于今月十二日、居住彼所、連々合戰、抽忠節之條、無其隱之上、就中、同廿四日合戰、押寄矢藏下、盡忠節之條、安積新兵衛尉以下所存知也、加之、今月二日(今月ハ七月ナルベシ)自大渡手押寄之處、凶徒等出合、散々戰之間、兼光自上山下降懸入合戰之場、捨身命度々入替戰、追籠御敵等於城內、抽群次第、大藏兵衛尉、小早河備後守(貞平)等所存知也、將又同五日炎上社頭之刻、致合戰忠之條、山口小太郎所存知也、隨而此等次第、大草三郎兵衛尉悉見知畢、兼光又一族相共屬仁木右馬助殿(義長)馳向尼崎、自去七月十二日、至于八月三日致忠畢、然者爲賜御證判、恐惶謹言(建武五年八月日附上杉重能證判)

〔中院一品記〕建武五年戊寅七月五日丑刻許、當男山邊、數刻有燒亡、予自去春居住

仁和寺、面々傾危、爲八幡寶前歟、怖畏多端也、自去五月廿五日(元弘日記裏書二、十八日ニ作ル)承先朝之勅、官軍等構城塙(八幡)立籠云々、源持中將定朝臣、同家房朝臣、同顯國以下、奥州軍勢不知其數、附風聞說注之、難足信用哉、陸奥國司權中納言顯家卿源大納言親房卿息也率數多人勢、雖責上、去春(夏)於軍陣落命了、相從彼卿之輩、爲達餘執、棄身命面々致合戰云々、

延元三年(建武五年・曆應元年)

五日、社頭炎上ス

七月五日燒亡アリ

寄手ヲ官
軍手ヲ火
寄手ヲ放
城中ノ勢
尙去ラズ

六日天晴、去夜男山燒亡、雖有種々說、所詮八幡宮御寶殿以下悉成灰燼云々、天下之
重事、民間之愁緒、更非筆端之所及者也、當社者貞觀草創之後、保延六年正月廿三日
始回祿、其以後曾無先規、末代之至極、歎息無他、而城中軍兵更不及退散、尙令合戰云
々、寄手官軍等竊入人放火之由有其說、不可思議也、猶不審多端、然而城中軍勢不退
散之上者、誠非城中之所爲哉、驚歎無極者也、
七日、家君被遣御狀於久我前右府許、八幡宮事等被仰之處、執行注進被進之、仍續加
之、希代之重事、猶不知手足之所措者也、
八幡宮回祿事、凡無申限候、天下老若有情輩、誰不愁歎哉、心中可有賢察候、委細事、社
務通清法印只今注送候之間、一紙令書寫進候也、其後久不申承候之處、御札殊爲悅
千万、併期面謁候、恐々謹言、

建武五年庚寅
七月七日

判

石清水八幡宮回祿次第六日辰

七月五日、丑自馬場殿火出現、即寶殿之巽角燒付畢、此時當番御殿司重延參中御前、
奉抱御體於舞殿、交替同番幸兼、中庭其外小神殿經藏二字、無所殘炎上畢、寶前炎上
之間、三ヶ度御鳴動、又若宮、若宮殿燒失之時、赤色之光明三ヶ度分雲細長上給畢、寶

十一日男
山沒落

前燒給後、於御殿之燒跡辻風六七ヶ度也、諸人皆驚耳目畢矣、

十一日、八幡城沒落了、寄手軍勢不存知云々、其後有燒亡、後聞軍勢令怖畏之餘、山上
諸坊等ニ放火云々、比興進退也、

- 〔和本文書〕ニ〔岡本文書〕(三月十六日)〔大友文書〕(五月二十二日)〔天野文書〕(三月十六日)
- 〔南狩遺文〕ニ〔吉川家什書〕十六〔小早川什書〕六〔田代文書〕三〔前田家所藏文書〕〔薩藩舊記〕〔深堀家系圖證文記錄〕ニ〔詫磨文書〕二〔後愚昧記〕應安四年記〔田中文書〕一モ山門一

〔參考太平記〕卷第二十(上文ハ、六月是)芳野殿ヨリ、勅使ヲ立ラレテ仰ラレケルハ、義

興顯信敗軍ノ勞兵ヲ率シテ、八幡山ニ楯籠ル處ニ、洛中ノ逆徒數ヲ盡シテ是ヲ圍ム、城中已ニ食乏シテ、兵皆疲ル、然リトイヘトモ、北國ノ上洛近ニアルヘシト聞テ、士卒梅酸ノ渴ヲ忍フ者ナリ、進發若延引セシメハ、官軍ノ沒落疑有ヘカラス、天下ノ安危、只此一舉ニアリ、早其境ノ合戰ヲ閣テ、京都ノ征戰ヲ專ニスヘシト仰ラレテ、御宸筆ノ勅書ヲソ下サレケル、義貞朝臣勅書ヲ拜見シテ、源平兩家ノ武臣、代々大功アリト云共、直ニ宸筆ノ勅書ヲ下サレタル例、イマタ聞サル所ナリ、是當家超涯ノ面目ナリ、此時命ヲ輕セスハ、正ニ何レノ時ヲカ期スヘキト、足羽ノ合戰ヲサ

義貞ノ感
激深シ

天皇、義貞ニ命ヲ授ケテ、賜フ

建武五年(應元元年)

京都進發
ヲ急グ

兒島高德
ノ謀略

兵糧

山門トノ
聯合策
牒狀ヲ山
門ニ送ル

新田義貞公篇

八九四

シ置レテ、先京都ノ進發ヲソイソカレケル、

義貞牒山門附山門返牒事

兒島備後守高德、義貞朝臣ニ向テ申ケルハ、先年京都ノ合戰ノ時、官軍山門ヲ落サ
 レテ候シ事、全ク軍ノ雌雄ニアラス、只北國ノ敵ニ道ヲ塞カレテ、兵糧ニツマリシ
 故ナリ、向後モ其時ノ如クニ候ハ、縦山上ニ御陣ヲ召レ候トモ、又先年ノ様ナル
 事決定タルヘク候、然レハ越前加賀ノ宗徒ノ城々ニハ、皆御勢ヲ殘シ置レテ、兵糧
 ヲ運送セサセ、大將一兩人ニ、御勢ヲ六千騎モ差副ラレ、山門ニ御陣ヲ召レ、京都ヲ
 日々夜々攻ラレハ、根ヲ深シ帶ヲ固スル謀ト成テ、八幡ノ官軍ニカヲ附、九重ノ凶
 徒ヲ亡スヘキ道タルヘク候、但小勢ニテ山門ヘ御上候ハ、衆徒按ニ相違シテ、御
 方ヲ背ク者ヤ候ハ、انسラン、先山門ヘ牒狀ヲ送ラレテ、衆徒ノ心ヲ伺ヒ御覽セラ
 レ候ヘカシト申ケレハ、義貞誠ニ此議、謀濃ニシテ慮遠シ、サラハ牒狀ヲ山門ヘ送
 ルヘシト宣ヘハ、高德兼テ心ニ草案ヲヤシタリケン、即筆ヲ取テ是ヲ書其詞云、
 正四位上行左近衛中將兼播磨守源朝臣義貞牒延曆寺衙
 請早得山門最負一諾、誅逆臣尊氏直義以下黨類、致佛法王法光榮狀
 式竊觀素昔、渺開玄風、桓武皇帝下詔、一基叡山者、以聖化期昌、顯密兩宗於億載、傳教

大師上表、九鎮王城者、以法威爲護、國家太平於無疆而已也、然則開山門衰微、悼之、見
 朝廷傾廢、悲之、非九五之聖位、三千之衆徒、而爲執乎、去元弘之始、一天革命、四海歸風
 之後、有源家餘裔、尊氏直義、無忠貪大祿、不材登高官、自誇超涯之皇澤、不顧缺盈之天
 眞、忽棄君臣之義、猥懷豺狼之心、事害流于蒸民、禍溢于八極、公議不獲止、將行天誅之
 日、煙塵暗侵、九重之月、翠花再掃、四明之雲、此時貴寺忽將輔危、庸臣謀欲退暴、雖然、守
 死於善道者寡、求黨於利門者多、因茲官軍戰破、而聖主忝遭麥里之囚、甞城食竭、而書
 王書王、本文誤作君王、今依與本改之、按書王即中書王尊良也、於金時自殺、自臥戰場之及、自爾以降、逆徒彌恣、意嬌刑濫、罰凶戾
 殘賊、無惡而不極、且疑天維云絕、日月無所照、地軸既摧、山川不得載、側耳奪目、苟不忍
 待時、吞炭含刃、徑欲計近敵之處、歛聽鸞輿、幸南山、衆星拱北極、於是蘇思發思、發憤啓
 憤、起自嶮隘之中、纔得郡縣之衆、然則驅金牛而開路、飛火雞而切城、其戰未半、決勝於
 一舉、退敵於四方、訖疇昔范蠡開黃池、破吳三萬之旅、周郎挑赤壁、虜魏十萬之軍、將來
 何足比、如今舉國謀誅朝敵、天慮以臣爲爪牙之任、肆不遑卜否泰、振臂將發於京師、貴
 山儻若不捐故舊、拉大敵於隻手中、必矣、傳聞當山之護持、亘古亘今、卓犖于乾坤、承和
 修大威德之法、嗣君西源院本乃坐玉皇、承平安四天王之像、將門遂傷鐵身、是以賴佳運
 於七社之冥應、復舊規於一山之懇祈、熟思量之、凡惡在彼、與義在我、孰與天下之治亂、

延元三年(建武五年・曆應元年)

八九五

山上之安危、早聞一諾之群議、以遠合虎符、速麾三軍之卒伍、而爲搖龍旗、牒送如件、勳之以狀、

延元二年七月日 二年、天正本作三年、爲得、按、延元三年閏七月、義貞死、節、山門、即此年也、與、下可合見、

トソ書タリケル、山門ノ大衆ハ、先年春夏兩度山上へ臨幸成タリシ時、粉骨ノ忠功ヲ致スニ依テ、若干ノ所領ヲ得タリシカ、官軍北國ニ落行、主上京都ニ還幸成シカハ、大望一々ニ相違シテ、哀如何ナル不思議モ有テ、先帝ノ御代ニ成カシト祈念スル處ニ、此牒狀到來シタリケレハ、一山舉テ悦ヒ合ル事限ナシ、同七月二十三日ニ一所住ノ大衆、大講堂ノ庭ニ會合シテ、返牒ヲ送ル、其詞云、

延曆寺牒新田左近衛中將家術

來牒一紙被載朝敵追伐事

右鎮四夷之擾亂、而致國家之太平者、武將所不失節、祈百王之寶祚、而銷天地之妖孽者、吾山所不讓也、途殊歸同、豈其際措一線縷乎、夫尊氏直義等暴惡、千古未聞、其類是匪、嘗佛法王法之怨敵、兼又爲害國害民之殘賊、孟軻有言曰、出於己者歸己矣、渠若今不亡、何以待之、雖然、逆臣益振威義、士恒有困何乎、取類看之、夫差并越之威、遂爲勾踐所摧、項羽拔山之力、却爲沛公見獲、是則所以吳無義而猛、漢有仁而正也、安危所由、無

山門ノ返牒

若天命矣、是以山門內重武侯之忠烈、期佳運、外忝聖主之尊崇、祈皇猷、上下庶幾貪聽之處、儻投青鳥、見竭丹心、一山之欣悅、底事如之、七社之靈鑒、此時露顯、熟把往昔量吉凶、當山如棄則舉、世起而不立、治承之亂、高倉宮聿沒、外都之塵、吾寺專與則合、衆禦而不得、元曆之初、源義仲忽攀中夏之月、是人情起神慮、捨彼取此之故也、滿山群議、今如斯、凶徒誅戮、何有疑、時節既到、暫勿遲擬、仍牒送如件、竭信以狀、

延元二年七月日 二年、天正本作三年、爲得、說見上、

トソ書タリケル、山門ノ返牒、越前ニ到來シケレハ、義貞斜ナラス悦テ、聽テ上洛セントシ給ヒケルカ、ヒタスラニ北國ヲ打捨ナハ、高經如何様跡ヨリ起リテ、北陸道ヲ差塞キヌト覺レハ、二手ニ分テ國ヲモ支ヘ、又京ヲモ攻ヘシトテ、義貞ハ三千餘騎ニテ、越前ニ留リ、義助ハ二萬餘騎ヲ率シテ、七月二十九日越前府ヲ立、翌日ニハ敦賀津ニ著ニケリ、

○按、金勝院西源院本作六月三日義助發越前府、五日至敦賀、蓋非也、下段本文、諸異本竝云、義助在敦賀、聞八幡火、以爲八幡城陷、猶豫不進、延滯數日、而聞八幡陷、引兵歸府、於是義貞欲攻高經、漸設其備、高經聞之、自慮兵寡、不可以敵衆、贈書平泉寺、請戮力衆徒應之、乃七月廿七日也、而閏月二日、義貞出兵合戰、不利、遂死之、然則義

延元三年(建武五年・曆應元年)

義助進發

助發越前府者、亦非廿九日也明矣、凡逐段前後、尙可疑者多、上段所謂越後將士至、越前、七月中旬也、於是義貞兵威益振、將攻高經、豫備攻具、刻日以二十一日爲期、時吉野勅書至、命義貞急攻京援八幡也、高德勸義貞先贈書山門求援助、二十三日、山門會議、作答書而應義貞、及見答書、乃使義助赴京、云々、考元弘日記裏書、院家雜々跡文、以八幡陷爲七月二十一日、則在未與山門往復之前、且下段本文以八幡陷爲八月廿七日、異本或作七月二十七日或二十九日、亦是前後矛盾、理義不通、編次錯亂、大槩如此、未敢枚舉、熟讀自得耳、今無由考定、因姑并書諸說、未知適從、

八幡炎上事

將軍此事ヲ聞召レテ、八幡城イマタ攻落サテ、兵攻戰ニ疲ヌル處ニ、脇屋右衛門佐義助、山門ト成合テ、北國ヨリ上洛スルナルコソ、由々敷珍事ナリケレ、期ニ臨テ引ハ、南方ノ敵勝ニ乘ヘシ、イマタ事ノ急ニナラヌ先ニ、急キ八幡ノ合戰ヲサシヨキ、京都ヘ歸テ、北國ノ敵ヲ相待ヘシト、高武藏守ノ方ヘソ下知シ給ヒケル、師直此由ヲ聞テ、此城ヲ攻カ、リナカラ、落サテ引返シナハ、南方ノ敵ニ利ヲ得ラレツヘシ、サテ又京都ヲサシヨカハ、北國ノ敵ニ隙ヲ伺ハレツヘシ、彼此如何セント、進退谷テ、覺ヘケレハ、或夜ノ雨風ノ紛ニ、逸物ノ忍ヲ八幡山ヘ入テ、神殿ニ火ヲソ懸タリ

北條氏、南
受ニ敵ヲ
窮ス

足利軍社
放火

ケル、此八幡大菩薩ト申奉ルハ、忝モ王城鎮護ノ宗廟ニテ、殊更源家崇敬ノ靈神ニテオハシマセハ、寄手ヨモ社壇ヲ燒程ノ惡行ハアラシト、官軍油斷シケルニヤ、城中周章騷動シテ、煙ノ下ニ迷倒ス、是ヲ見テ、四方ノ寄手十萬餘騎、谷々ヨリ攻上テ、既ニ一二ノ木戸口マテソ攻入ケル、此城三方ハ嶮岨ニシテ登カタケレハ、防クニ其便アリ、西ヘナタレタル尾崎ハ、平地ニツ、キタレハ、僅ニ堀切タルカラ堀一重ヲ憑テ、春日少將顯信朝臣ノ手ノ者共、五百餘騎ニテ支タリケルカ、敵ノ火ヲ見テ攻上リケル勢ニ心ヲ迷ハシテ、皆引色ニソ成ニケル、爰ニ城中ノ官軍、多田入道カ多田、天正本作船田、非也、金勝院本云、號源了、手ノ者ニ、高木十郎、金勝院本云、名政述、松山九郎トテ、金勝院本云、名安里、名ヲ知ラレタル兵二人アリ、高木ハ其心剛ニシテ力足ラス、松山ハ力世ニ勝レテ心臆病ナリ、二人トモニ同木戸ヲ固メテ有ケルカ、一ノ木戸ヲ敵ニ攻破ラレテ、二ノ木戸ニ猶支テソ居タリケル、敵已ニ逆茂木ヲ引破テ、木戸ヲ切テ落サントシケレトモ、例ノ松山ガ癖ナレハ手足慄戰テ、戰ントモセサリケリ、高木十郎是ヲ見テ、眼ヲ瞋カシ、腰ノ刀ニ手ヲカケテ云ケルハ、敵四方ヲ圍テ一人モアマサシト攻戰フ合戰ナリ、コ、ヲ破ラレテハ、宗徒ノ大將達、乃至我々ニ至マテモ、落テ殘ル者ヤアルヘキ、サレハ爰ヲ專途ト戰フヘキ處ナルヲ、御邊以ノ外ニ臆シテ見ヘ給フコソ淺マシケ

公私ノ大

男山尙落

北國勢八幡山ノ炎上ヲ陥落

八幡山陥落

レ、平生百人二百人カカアリト、自稱セラレシハ、何ノ爲ノカソヤ、所詮御邊爰ニテ手ヲ摧キタル合戦ヲシ給ハスハ、我敵人ノ手ニ懸ランヨリハ、御邊ト刺違ヘテ死ヘシト忿テ、誠ニ思切タル體ニソ見ヘタリケル、松山其色ヲ見テ、觀面ノ勝負、敵ヨリモ猶怖シクヤ思ヒケン、姑クシツマリ給ヘ、公私ノ大事此時ナレハ、我命惜ムヘキニアラス、イテ一戦シテ、敵ニ見セント云儘ニ、ワナ、クワナ、ク走り立テ、傍ニアリケル大石ノ、五六人シテ持アクル程ナルヲ、輕々ト提ケテ、敵ノ群テ立タル其中へ、十四五程大山ノ崩ル、カ如クニ投タリケル、寄手數萬ノ兵共、此大石ニ打レテ、將碁[◎]倒ヲスルカ如ク、一同ニ谷底ヘコロヒ落ケレハ、己カ太刀長刀ニツキ貫レテ、命ヲ殞シ創ヲ被ル者、幾千萬ト云數ヲ知ラス、今夜既ニ攻落サレヌト見ヘツル八幡城、思ノ外ニコラヘテコソ、松山カ力ハ、只高木カ身ニ在ケリト、笑ハヌ人モナカリケリ、去程ニ敦賀マテ著タリケル越前勢共、遙ニ八幡山ノ炎上ヲ聞テ、イカ様攻落サレタリト心得テ、實否ヲ聞定ン爲ニ、數日逗留シテ、徒ニ日數ヲ送ル、八幡ノ官軍ハ、兵糧ヲ社頭ニ積テ、悉燒失ヒシカハ、北國勢ヲ待迄ノ、コラヘ場モナカリケレハ、^{金勝院、西源院本云、八幡ノ官軍ハ兵糧ヲ社頭ニ積テ燒失ハレシカハ、一粒ノ割置モナクシテ、一日モ延引シケレハ、云、}六月二十七日、^{今川家、毛利家、南都本、作三七月二十七}夜半ニ、^{日、天正本作七月二十九日、説見前、}八幡山ヲ退落

義助、軍ヲ返ス

上野門通ハ土御門五任代ヨリ重任ノ相續ナリシ中興ニ於テ止メテ今ナレシモノヲ復活ス

テ、又河内國ヘソ歸リケル、^(按文)

此時若八幡城、今四五日モコラヘ、北國勢逗留モナク上リタラマシカハ、京都ハ只一戦ノ内ニ攻落スヘカリシヲ、聖運時イマタ至ラサリケルニヤ、兩陣ノ相圖相違シテ、敦賀ト八幡トノ官軍共、互ニ引テ歸リケル、薄運ノ程コソアラハレタレ、

七月二十日 光嚴院、中院通冬ニ、義貞ノ郷國ニシテ受領タリシ上野國ノ知行ヲ復セシメ給フ。

〔中院一品記〕

△六、四、八九七

七月廿日、天晴、此間武家知行國衙等、如舊可爲公家

御汰沙之旨、奏聞之由、自或武邊、内々告示之間、付菊亭前右府、按察中納言等、上野國

事、家君^(通顯)被申之處、入夜院宣到來、當國自土御門大納言通^(方)殿、五代相續重任之國也、而先御代國家草創之後、不可有相傳之由、及其沙汰之間、連々雖被歎申、替地事、

如形被進之、終不被返付之處、今度及此御沙汰自愛無極者也、

上野國可令知行給之由、院御氣色所候也、經顯恐惶謹言、

建武五年七月廿日

按察使判

進上 三條坊門殿

家君御所望以前、及其沙汰云々、就其爲按察中納言可召進使者之由被仰下、被遣之

延元三年(建武五年・曆應元年)

當國代々
關東吹舉
ノ地ナリ
當家ノ重
任他ニ異
ル代

處通一昇進事可有其沙汰、就其大理事、正慶令拜任了、近日曾無其人、必可申領狀之由、被仰下之間、於昇進者畏入候、於顯職者不諧、旁難儀非一之由申入了、當國代々關東吹舉之地也、當家重任異他者也、眼代被仰秀治了、秀長法師多年令知行、而依有不法事等、先年蒙御勘氣、被召放、被宛行秀貞了、其後種々歎申之間、孫秀治致奉公之間、悔先非致奉公之間、被宛行歎、父秀賢法師當時隱居、如法畏申入也、

廿四日、家君入夜御參仙洞、如法内々儀也、國事故可被畏申也、

廿五日、及晩御歸家、今日當國上分所之人給等、郷々有御沙汰、予祇候御前、下噫

七月二十七日 新田金谷經氏ノ率キルト思ハル、丹生寺城ノ官軍、播

磨明石城ニ攻メ寄セ、加爾坂ニ戰フ。直義、仁木義長、義基等ヲ尼崎ニ遣

ハシテ之ヲ防ガシム。〔白川文書〕一 (前陸) (七月五日ノ) (天野文書) (前田侯爵所藏)

〔島津文書〕色川三、六、四、七七七 (建武五年閏七月廿九日附、惟宗忠兼軍忠狀、赤松則村殿判)

島津周防五郎三郎忠兼申軍忠事

去月廿六日、丹生寺凶徒等寄來當國明石城之間、則馳向之處、同廿七日、於加爾坂北

致合戰、及至極打物、被突害乘馬、若黨山田左衛門次郎令討死了、凡自最初不去御陣

頭、致日夜警固、於所々毎度致軍忠次第、御見知之上者、可賜御證判候哉、恐惶謹言、

丹生寺城
ノ凶徒明
石城ニ攻
メ寄ス

〔北河原氏家藏文書〕

△、六、四、七七八、

攝津國凶徒等對治事、早屬仁木太郎三郎(義基)可致軍忠之狀如件

建武五年七月十九日

花押

伊丹野四郎殿

(註) 五月二十四日、九月二十四日條參照。

閏七月二日 義貞、越前足羽黑丸城ニ足利高經ヲ攻圍セシガ、藤島庄燈

明寺嘍ニ於テ不慮ノ戰死ヲ遂グ。

〔神皇正統記〕六 又の年戊寅の春二月、鎮守の大將軍顯家卿、又親王をさきだて

申し、重ねて打上る、海道の國々ことごとく平らぎぬ、伊勢伊賀を経て大倭に入り、

奈良の京になん著きにける、それより所々の合戦あまた度、互に勝負侍りしに、同

五月和泉の國にての戦ひに、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極り侍りにき、

苦の下にもうづもれぬものとは、たゞいたづらに名をのみぞ留めてし、心うき

世にも侍るかな、官軍なほ心をはげまして、男山に陣をとりてしばらく合戦あり

しかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事ならずして引しりぞく、北國にありし

義貞も、たび／＼めされしかど上りあへず、させる事なくして空しくさへなりぬ

顯家戰死

義貞戰死

延元三年(建武五年・曆應元年)

と聞えしかば、いふばかりなし、(下文、閏七月二十、六日ノ條ニ收ム)

〔皇代記〕 建武尙一年、潤七月二日、源高經、討源左中將義貞、

〔武家年代記〕中 曆應元三 閏七二、源高經討義貞、

〔元弘日記裏書〕 今月(七)越前大將義貞朝臣死節、(本書七月ニ係、クルハ非ナリ)

〔保曆間記〕第五 義貞は先帝山門より出させ給ひし時、越前の國へ落行けるが、(イ、邊リ)是もいひがひなくほろびにけり、義貞も尊氏の一ぞくなれば、かのめいをうけてそむかずば、しかるべかりけるを、是もおごれる心つよふして、かうるかうわんにして、かくのごとくなるこそふしぎなれ、子息越後守も同首をかけられけり、(下ハ閏七月二十六日ノ條ニ收ム)

〔参考太平記〕卷第二十 義貞重黒丸合戦附平泉寺修調伏法事

義貞京都ノ進發ヲ急レツル事ハ、八幡ノ官軍ニカヲツケ、洛中ノ隙ヲ伺ン爲ナリキ、而ルニ今其相圖相違シヌル上ハ、心閑ニ越前ノ敵ヲ悉對治シテ、重テ南方ニ牒シ合テコソ、京都ノ合戦ヲハ致サメトテ、義貞モ義助モ、河合庄へ打越テ、先足羽城ヲ攻ラルヘキ企ナリ、尾張守高經此事ヲ聞給ヒテ、御方僅三百騎ニ足サル勢ヲ以テ、義貞カ三萬餘騎ノ兵ニ圍マレナハ、千一ツモ勝事ヲ得カラス、然トイヘ共、敵

ハヤ諸方ノ道ヲ差塞キヌト聞ユレハ、落共何クマテカ落延ヘキ、只偏ニ打死ト心サシテ、城ヲ堅クスルヨリ外ノ道ヤアルヘキトテ、天正本云、高經打死ト志テ、城ニ籠ルヨリ外ハ及ヘキ、但合戦ノ道ハ、只謀ニテコソ、深田ニ水ヲ懸入テ、馬ノ足モ立ヌ様ニコシラヘ、路ヲ堀候物ヲトテ、深田ニ水ヲカケ入、云々、深田ニ水ヲ懸入テ、馬ノ足モ立ヌ様ニコシラヘ、路ヲ堀切テ、狭ヲカマヘ、橋ヲハツシ溝ヲ深クシテ、其内ニ七ノ城ヲ拵ヘ、敵攻ハ互ニ力ヲ合テ、後へ廻リアフ様ニソ構ラレタリケル、此足羽城ト申ハ、藤島庄ニ相雙テ、城郭半ハ彼庄ヲコメタリ、是ニ依テ平泉寺ノ衆徒ノ中ヨリ申ケルハ、藤島庄ハ、當時多年山門ト相論スル下地ニテ候、若當庄ヲ平泉寺ニ附ラルヘク候ハ、若輩ヲハ城々ニコメヲキテ合戦致サセ、宿老ハ總持ノ扉ヲ閉テ、御祈禱ヲ致スヘキニテ候トソ云ケル、尾張守大ニ悦テ、

今度合戦之雌雄、併借衆徒合力憑靈神之擁護之上者、先以藤島莊所附平泉寺也、若得勝軍之利者、重可申行恩賞、仍執達如件、

建武四年七月二十七日 四、當作レ五、蓋轉寫之訛

尾張守

平泉寺衆徒御中

ト嚴密ノ御教書ヲソ成レケル、衆徒是ニ勇テ、若輩五百餘人ハ、藤島へ下テ城ニ楯
延元三年(建武五年・曆應元年)

義貞夢想事

其七日ニ當リケル夜、金勝院、西源院本云、平泉寺調伏法ヲ行フ最中、云々、按、上段云、自七月二十七日、平泉寺乘徒行、調伏法、今云、當其第七日、則聞七月四日也、然下段云、義貞聞七月二日死、節、由、此見之、所謂第七日者、恐非也、金勝院、西源院本說、爲得、義貞朝臣不思議ノ夢ヲソ見給ヒケル、所ハ今ノ足羽邊ト覺タル河ノ邊ニテ、義貞ト高經ト相對シテ陣ヲ張、イマタ戰ハスシテ數日ヲ經ル處ニ、義貞俄ニ長三十丈計ナル大蛇ニ成テ、地上ニ臥給ヘリ、高經是ヲ見テ、兵ヲ引楯ヲ捨テ、逃ル事數十里ニシテ止ト見給ヒテ、夢ハ則覺ニケリ、義貞夙ニ起テ、此夢ヲ語リ給フニ、龍ハ是雲雨ノ氣ニ乘テ、天地ヲ動ス物ナリ、高經雷霆ノ響ニ驚テ、葉公カ心ヲ失ヒシカ如クニテ、サル事候ヘシ、目出タキ御夢ナリトソ合ケル、爰ニ齋藤七郎入道道獻道獻、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、並作、道獻、下皆假、之按、系圖、左衛門大夫基任子有、七郎基傳者、伊豫房支基姪也、道獻蓋此人耶、今川家、毛利家、天正異本、作、兒島高德、下假、之、垣ヲ阻テ聞ケルカ、眉ヲヒソメテ潛ニ云ケルハ、是全ク目出タキ御夢ニアラス、則天ノ凶ヲ告ルニ有ヘシ、其故ハ昔異朝ニ吳孫權、蜀劉備、魏曹操ト云シ人三人、支那四百州ヲ三分テ是ヲ保ツ、其志皆ニヲ亡シテ一ニ合ント思ヘリ、此下引、孔明臥龍故事、占、義貞夢、文、且事理失、此故事ヲ以テ、今ノ御夢ヲ料簡スルニ、事ノ様魏吳蜀三國ノ爭ニ似タリ、就實、今略、之、中龍ハ陽氣ニ向テハ威ヲ震ヒ、陰ノ時ニ至テハ蟄居ヲ閉、時今陰ノ初ナリ、シカモ

夢判斷

義貞夢想

龍ノ姿ニテ水邊ニ臥タリト見給ヘルモ、孔明ヲ臥龍ト云シニ異ナラス、サレハ面而ハ皆目出タキ御夢ナリト合ラレツレ共、道獻ハ強ニ甘心セスト、眉ヲ擡テ云ケレハ、諸人ケニモト思ヘル氣色ナレトモ、心ニ忌言ニ憚テ、凶トスル人ナカリケリ、

義貞馬屬強事

閏按、長曆、延元三年、以八月爲閏、然長曆自今推古、作、之者也、本文爲七月閏、者、實當時曆也、不可疑、七月二日足羽ノ合戰ト觸ラレタリケレハ、國中ノ官軍、義貞ノ陣河合庄ヘ馳集リケリ、其勢宛モ雲霞ノ如シ、大將新田左中將義貞朝臣ハ、赤地錦直垂ニ、脇立ハカリシテ、遠侍ノ座上ニ座シ給ヘハ、脇屋右衛門佐ハ、紺地錦直垂ニ、小具足計ニテ、左ノ一ノ座ニ著給フ、此外山名、大館、里見、鳥山、一井、細屋、中條、大井田、桃井毛利家、金勝院、西源院、天正本、無、大館、以下ノ一族三十餘人ハ、思々ノ鎧兜ニ、色色ノ太刀刀、奇麗ヲ盡シテ、東西二行ニ座ヲ列ス、外様ノ人々ニハ、宇都宮、美濃將監ヲ始トシテ、福津、風間、敷地、上木、山岸、瓜生、河島、太田、金子、伊自良、江戸金勝院本載、紀清武會、深町、兩黨以下、著到ノ軍勢三萬餘人、旗竿引ソハメ引ソハメ、膝ヲ屈シ手ヲ束ネテ、堂上庭前ニ充滿タレハ、由良、船田ニ大幕ヲ褰ゲサセテ、大將遙ニ目禮シテ、一勢一勢座敷ヲタツ、巍々タルヨソホヒ、堂々タル禮、誠ニ尊氏卿ノ天下ヲ奪ハンスル人ハ、必義貞朝臣ナルヘシト、思ハヌ者ハナカリケリ、其日ノ軍奉行上木平九郎、人夫六千

足羽城攻
擊開始
義貞河合
庄ニ勢揃
ヲナス

一族ノ人

外様ノ人

尊氏ノ天
下ヲ奪フ
ハ義貞

延元三年(建武五年・曆應元年)

九〇七

新田義貞公篇

餘人ニ幕金勝院、西源院搔楯埋草塀柱櫓ノ具足共ヲ持ハコハセテ參リケレハ、大將中
門ニテ鎧ノ上帶シメサセ、水練栗毛トテ、水練、金勝院五尺三寸有ケル大馬ニ、手繩手
金勝院、西源院、打懸テ、門前ニテ乗ントシ給ヒケルニ、此馬俄ニ屬強ツクマヒヲシテ、騰跳狂
ヒケルニ、左右ニ附タル舍人二人蹈レテ、半死半生ニ成ニケリ、是ヲユソ不思議ト
見ル處ニ、旗サシ進テ足羽河ヲ渡スニ、乗タル馬俄ニ河伏ヲシテ、旗サシ水ニ漬ニ
ケリ、加様ノ怪共未然ニ凶ヲ示シケレ共、已ニ打臨メル戰場ヲ、引返スヘキニアラ
スト思ヒテ、人ナミ人ナミニ向ヒケル勢共、心中ニ危マヌハナカリケリ、

義貞自害事

燈明寺ノ異本或作東郷寺或前ニテ、三萬餘騎ヲ七手ニ分テ、七ノ城ヲ押阻テ、先對城ヲ
ソ取ラレケル、兼テノ配立ニハ、前ナル兵ハ、城ニ向ヒアフテ合戰ヲ致シ、後ナル足
輕ハ、櫓ヲカキ崩ヲ塗テ、對城ヲ取スマシタラシムル後、漸々ニ攻落スヘシト、議定
セラレタリケルカ、平泉寺ノ衆徒ノコモリタル藤島城金勝院本島下有照以外ニ色メ
キ渡テ、廳テ落ツヘク見ヘケル間、數萬ノ寄手是ニ機ヲ得テ、先對城ノ沙汰ヲ差置、
塀ニ附、堀ニツカリテ、喚叫テ攻戰フ、衆徒モ初ハ落色ニ見ヘケルカ、トテモ遁ルヘ
キ方ノナキ程ヲ思ヒ知ケルニヤ、身命ヲ捨テ是ヲ防キ、官軍櫓ヲ覆テ入ントスレ

ハ、毛利家、金勝院、西源院、天正本云、木戸ノ前ナ
ル細橋ヲ、官軍渡テ櫓ノ下ヘカツキ入、云々、衆徒走木ヲ出シテ撞落ス、衆徒橋ヲ渡テ打テ出
レハ、寄手官軍、鋒ヲ揃テ切テ落ス、追ツ返ツ入替ル戰ヒニ、時刻推移テ、日巳ニ西山
ニ沈マントス、大將義貞ハ、燈明寺ノ前ニヒカヘテ、手負ノ實檢シテオハシケルカ、
藤島ノ戰強クシテ、官軍ヤ、モスレハ追立ラル、體ニ見ヘケル間、安カラヌ事ニ
思ハレケルニヤ、馬ニ乗替、鎧ヲ著カヘテ、

○金勝院本云、義貞鎧ヲ著替ヘ給フ、其時ノ裝束ニハ、白帷ニ精好ノ大口、葛地ノ
直垂ニ、蒨黃ニ中一通リ紫ニテ威シタル鎧ニ、大中黒ノ征矢三十六指タルヲ、管
高ニ負ナシ、塗籠藤ノ弓持テ、鬼切鬼丸佩テ、瓦毛馬ニ乗替、云々、

纒ニ五十餘騎ノ勢ヲ相從ヘ、路ヲカヘ畔ヲ傳ヒ、藤島城ヘソ向ハレケル、其時分黒
丸城ヨリ、細川出羽守金勝院本云、名義貞、與前組鹿草彦太郎金勝院本作鹿兩大將ニテ、藤
島城ヲ攻ケル、寄手共ヲ追拂ハントテ、三百餘騎ノ勢ニテ、天正本云、三百餘騎横曠ヲ廻
ケルニ、義貞觀面ニ行合給フ、細川カ方ニハ、歩立ニテ櫓ヲ築タル射手共多カリケ
レハ、深田ニ走リ下リ、前ニ持楯ヲツキ並テ、鎌ヲ支テ散々ニ射ル、義貞ノ方ニハ、射
手ノ一人モナク、楯ノ一帖ヲモ持セサレハ、前ナル兵、義貞ノ矢面ニ立塞テ、只的ニ
成テソ射ラレケル、中野藤内左衛門西源院本無内字、第十九卷義貞攻、落越前府城一段、金勝院本左作
右、西源院本同、本文、並置、金勝院本、此段兩所異、名、或作、宗昌

士ヲ失テ
獨免ル、
ハ我意ニ
アラズ

義貞最期

氏家重國
義貞ノ首
ヲ取ル

從者戰死

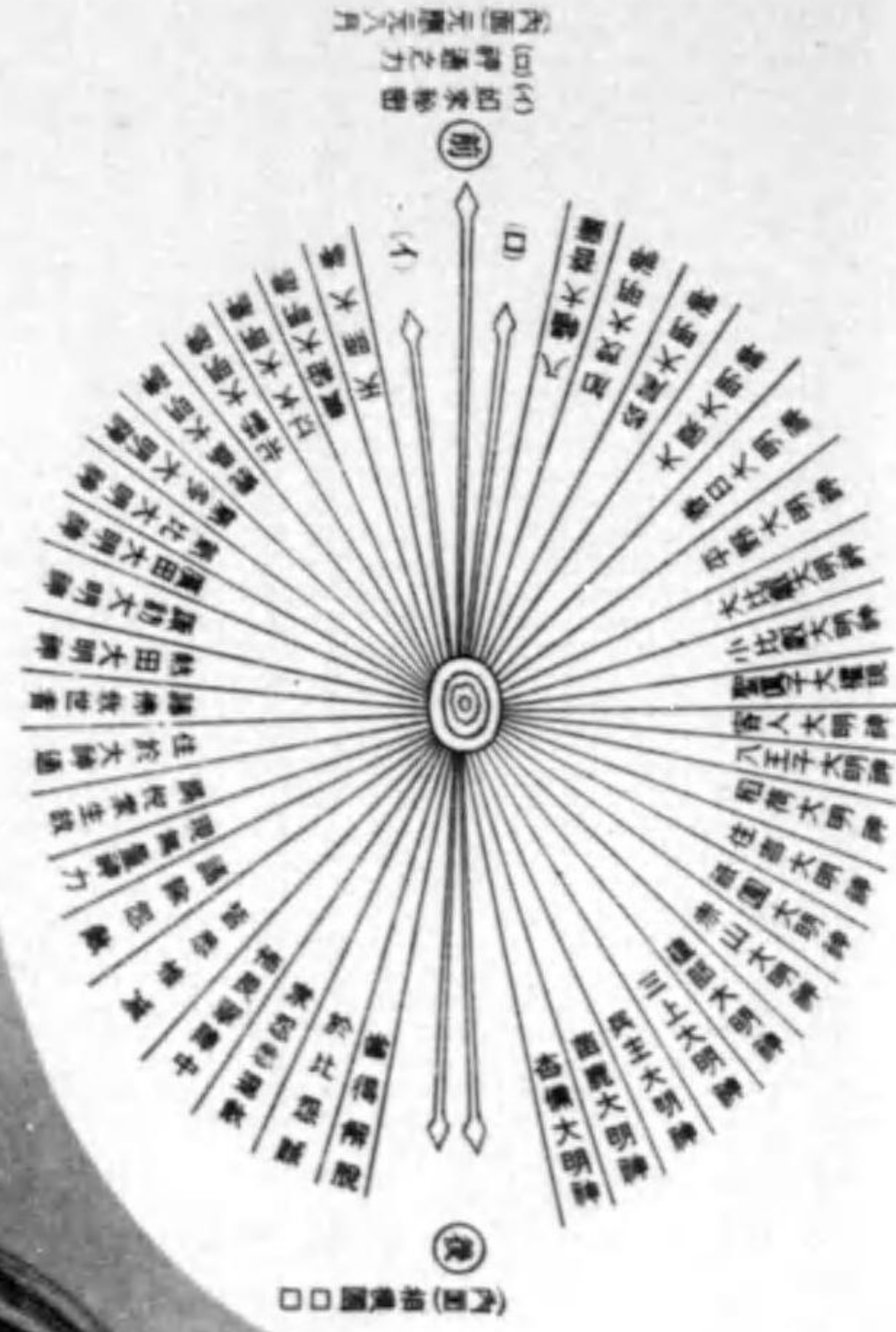
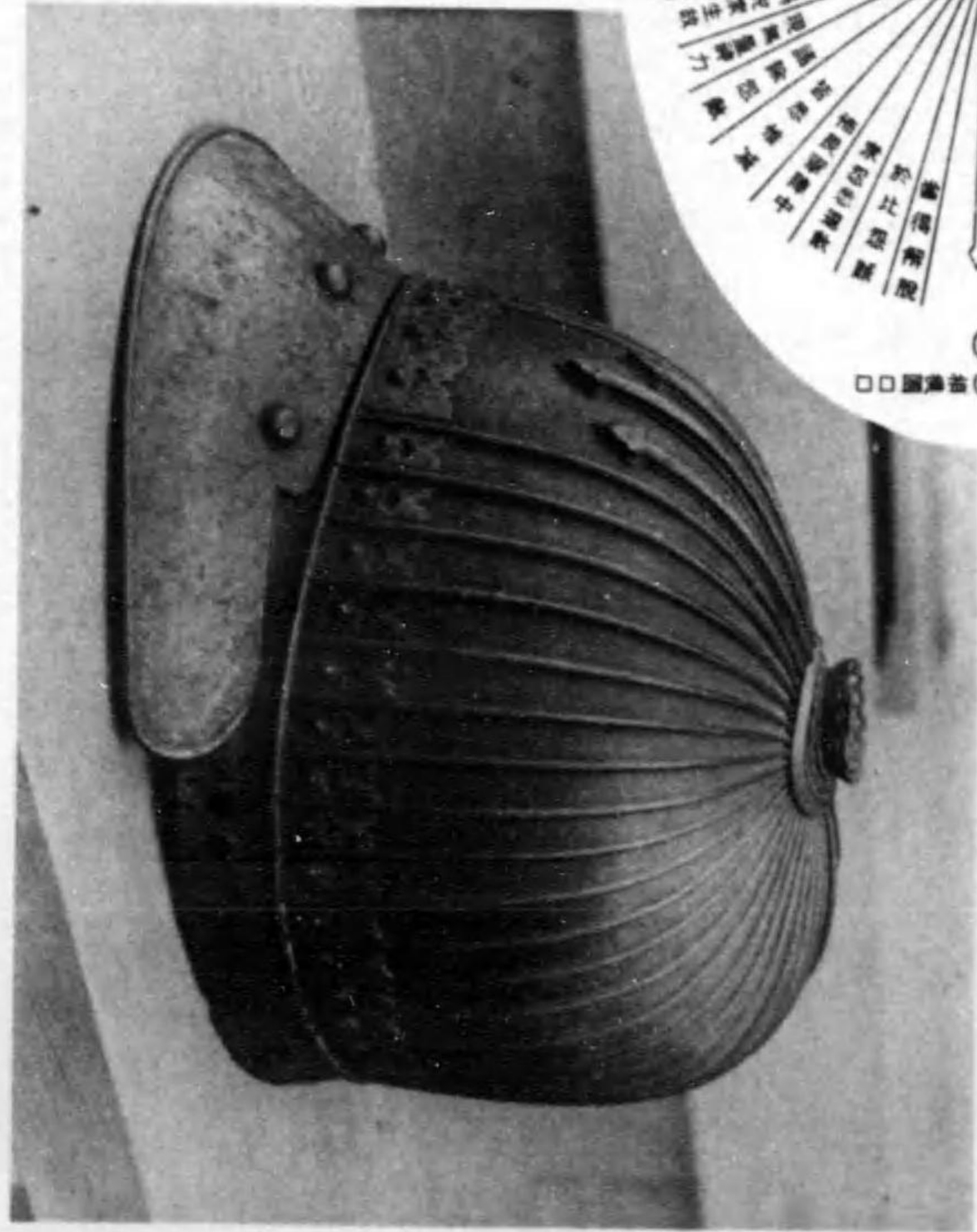
犬死ト評

或定證、義貞ニ胸シテ、千鈞之弩、不爲驥鼠發機トコソト申ケルヲ、義貞聞モ敢ス、士ヲ失テ獨免ル、ハ、我意ニ非スト云テ、尙敵ノ中へ懸入ント、駿馬ニ一鞭ヲス、メラル、此馬名譽ノ駿足ナリケレハ、一二丈ノ堀ヲモ、前々輒ク越ケルカ、五筋マテ射立ラレタル矢ニヤ弱リケン、小溝一ヲ越カネテ、屏風ヲタヲスカ如ク、岸ノ下ニソ轉ヒケル、義貞弓手ノ足ヲシカレテ、起アカラントシ給フ處ニ、白羽ノ矢一筋、眞向ノハツレ、眉間ノ眞中ニソ立タリケル、天正本云、白羽ノ矢、腋ノ口ニ立、云々、急所ノ痛手ナレハ、一矢ニ目昏心迷ヒケレハ、義貞今ハ叶ハシトヤ思ヒケン、拔タル太刀ヲ、左ノ手ニ取渡シ、自ラ首ヲカキ切テ、深泥ノ中ニ藏シテ、其上ニ横テソ伏給ヒケル、毛利家本、及神明鏡云、腰刀ヲ拔テ、喉ヲエツカキ切テ、深泥ニ伏、云々、天正本云、腹切テ、喉ヲ除ニ伏、云々、北條家、金勝院、南都本並云、腰刀ヲ拔テ、ミツカラ首ヲカキ落シ、云々、下同、三本文、西源院本云、腰刀ヲ拔、首ヲカキ落シ、深泥ニ伏、云々、按、元弘日記裏書云、七月十一日、義貞死、節、云々、蓋非也、前以三八幡陷、爲七月十一日、則一書自矛盾、不可據也、且太平記諸本及系圖、越中國住人氏家中務丞重國等、並爲三延元三年閏七月二日一系圖云、義貞時年三十八、櫻雲記作三十七、越中國住人氏家中務丞重國中務丞、天正本作、彌五郎重國、金勝院、西源院、天正本、作、光範、下皆倣之、昨ヲ傳テ走リヨリ、其首ヲ取テ鋒ニ貫キ、鎧太刀刀同ク取持テ、黒丸城へ馳歸、天正本云、光範カ中間、昨ヲ傳ヒ走寄、其、城上野介、城家譜、並無所見、未知孰是、中野藤内左衛門尉金持太郎左衛門尉金勝院本云、名重興、此等馬ヨリ飛テヲリ、義貞ノ死骸ノ前ニ跪テ、腹カキ切テ重リ伏、此外四十餘騎ノ兵、金勝院本云、伊澤五郎、春日部入、道ヲ始トシテ四十餘騎、云々、皆堀溝ノ中ニ射落サレテ、敵ノ一人ヲモ取得ス、犬死シ

六〇 義貞公着用具

相模國、相模國、「元應元八月、同後方ニモ字畫腐蝕シテ不明ナレド、四十二箇ノ筋宛ニシテ、三十番神ノ名ヲ刻シ、又、鉢内面ノ、後元年光通此ノ處ニ碑ヲ建ツ、(次圖)、因テ万治三年越前、明曆三年、燈明寺殿ノ田圃中ヨリ發掘ス、、

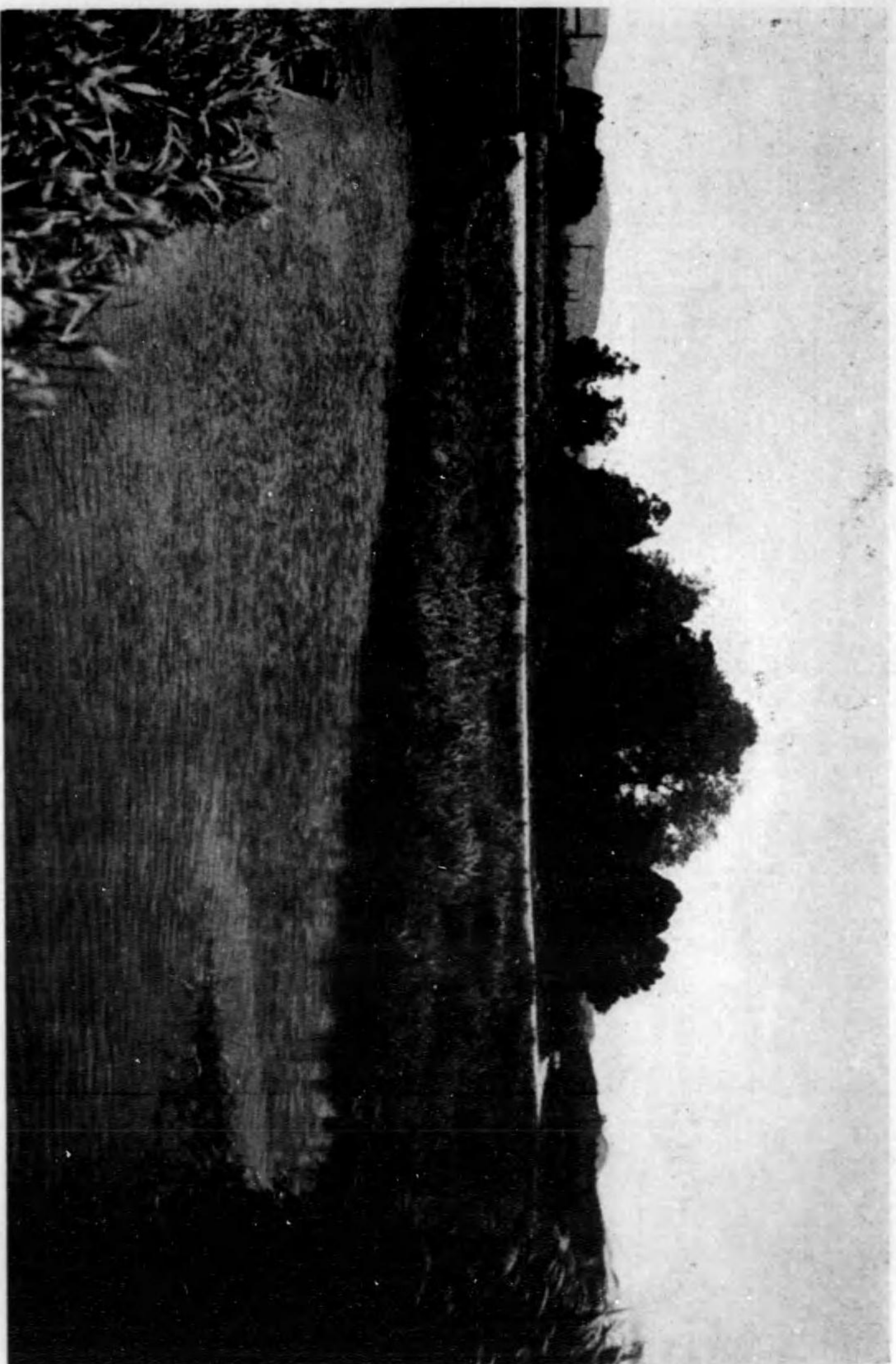
藤島神社藏



「辨別圖□□」イテリ。

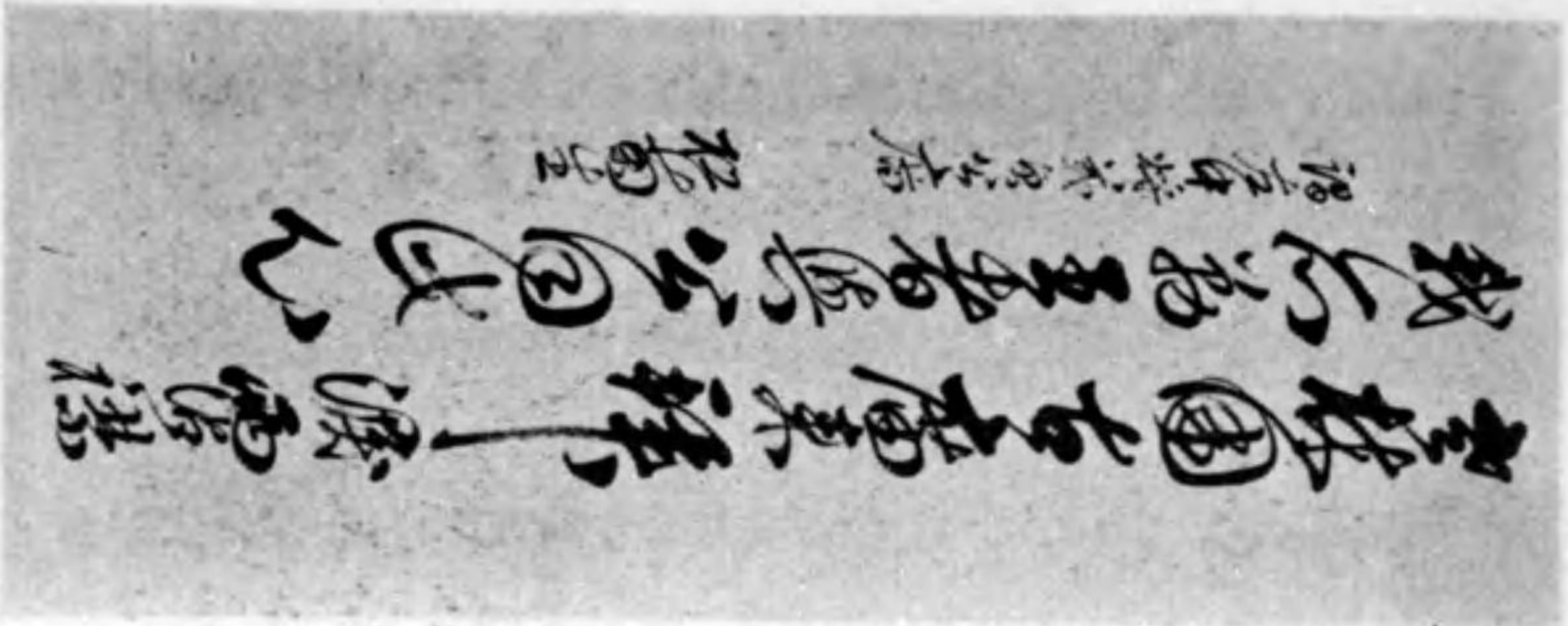
前式ニ「天動天八目」同類式ニテ宇蓋御前々不谷附セツト
 四十二箇ノ款頭ニツキ、三十番轉ノ合ニ候々。又、棧内面ノ
 刻悉平女盛共ノ刻ニ轉ビ候々。(大圖)
 附釋三辛、動脚幸郷ノ田圃中ニリ發跡ス。因テ式當三辛刻附

六〇 龜家義貞公普田兜 龜 佩 輪 切 龜

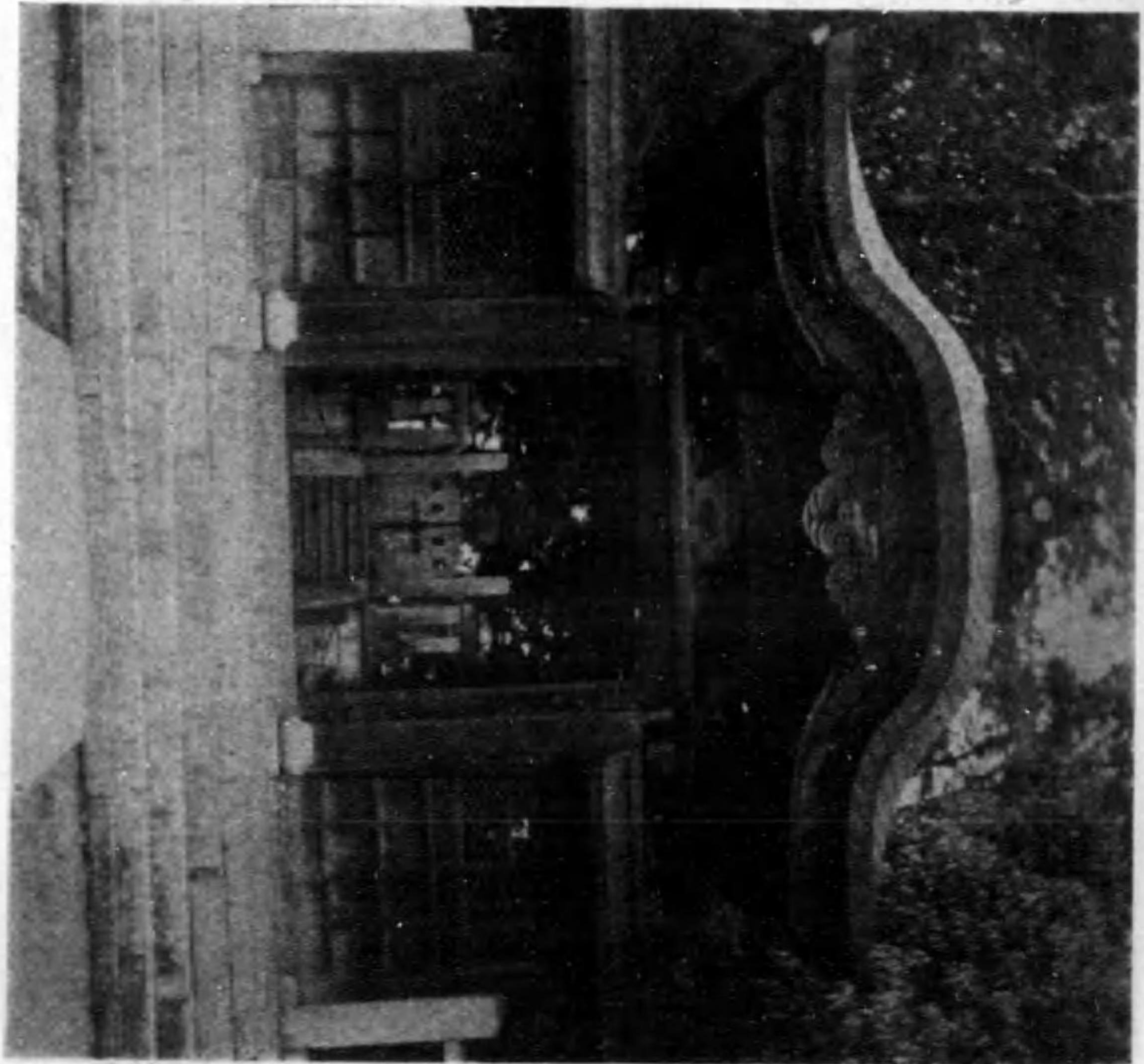


六一 燈明寺 叢 中央ノ森ハ所謂新田塚ニシテ中ニ石碑立テリ(次圖)
森ノ右端遠方ニ見ユル丘陵ニ藤島神社鎮座ス

六二 燈明寺暇ノ石碑 裏面ニハ「萬治三歲在庚子春三月建之 自歿後至于今三百二十五歲」トアリ



六四 木戶孝允謁義貞公廟詠詩及書



六三 往生院ノ義貞公墳墓 越前坂井郡高板村長崎 釋念寺

義貞ノ首
ト知ラズ

金欄ノ守

左ノ眉上
ニ創アリ

鬼切丸

テコソ伏タリケレ、此時左中將ノ兵三萬餘騎、皆猛ク勇メル者共ナレハ、身ニ替リ命ニ代ラント、思ハヌ者ハ無リケレ共、小雨マシリノ夕霧ニ、誰ヲ誰トモ見分ネハ、大將ノ自ラ戦ヒ打死シ給フヲモ知サリケルコソ悲シケレ、只ヨソニアル郎等カ、主ノ馬ニ乗替テ、河合ヲ指テ引ケルヲ、數萬ノ官軍遙ニ見テ、大將ノ跡ニ從ハント見定メタル事モナク、心々ニソ落行ケル、此下引漢高祖齊宣王等、神田本、されは較能保漢書之中、若直漢書有、御約者之、懸トイヘリ、此人若ノ腹、トシ、武將ノ位ニ備リシハ、命ヲ領ミ、命ヲ全ク大儀ノ功ヲコソ、いたるハ、かりシニ自ラさし、もなき、戦ニ備ヒテ、匹夫ノ矢ヲ尾張守ノ前ニ參テ、重國コソ新田殿ノ御一族カト覺シキ敵討テ、首ヲ取候ヘ、誰トハ名乗候ハ、ネハ、名字ヲハ知候ハ、ネトモ、馬物具ノ様、相從ヒシ兵共ノ尸骸ヲ見テ腹ヲキリ、討死ヲ仕候ツル體、何様尋常ノ葉武者ニハアラシト覺テ候、是ソ其死人ノ膚ニ懸テ候ツル守リニテ候トテ、血ヲモイマタ洗ハヌ首ニ、土ノツキタル金欄ノ守ヲ、添テソ出シタリケル、尾張守、此首ヲ能々見給ヒテ、アナ不思議ヤ、ヨニ新田左中將ノ顔ツキニ似タル所有ソヤ、若ソレナラハ、左ノ眉ノ上ニ矢ノ創有ヘシトテ、自ラ鬢櫛ヲ以テ、髮ヲ搔アゲ血ヲ洗キ、土ヲ浣ヒ落シテ、是ヲ見給フニ、果シテ左ノ眉上ニ創ノ痕アリ、金勝院本云、首ニ金欄ノ守ヲ添テソ出シケル、高經見知給ハ、ハ、諸人ニ見セラレケルニ、更ニ分明ニ見知タル者ナカリケレハ、羽林ヲ見知タル時、衆ヲ呼テ見セテコソ、義貞ノ首ニ定リケレ、云々、是ニ彌心附テ、帯レタル二振ノ太刀ヲ、取寄テ見給フニ、金銀ヲノヘテ作リタルニ、一振ニハ、銀ヲ以テ金ハキノ上ニ、鬼切ト云文字ヲ沈メタリ、按、鬼切者義貞、赴、越前之時、既

延元三年(建武五年・曆應元年)

御宸筆

藏三日吉社、而一振ニハ、金ヲ以テ銀ハ、キノ上ニ、鬼丸ト云文字ヲ入ラル、是ハ共ニ今復出、可レ疑、源氏重代重寶ニテ、金勝院本及第三十二卷作源平重寶、義貞ノ方ニ傳タリト聞ユレハ、末爲レ得、既註レ前、說詳ニ子第三十二卷、々ノ一族共ノ帶ヘキ太刀ニハ非ト見ルニ、彌怪シケレハ、膚ノ守ヲ開テ見給フニ、吉野帝ノ御宸筆ニテ、

朝敵征伐事、叡慮所向、偏在義貞武功、選未求他、殊可運早速之計略者也、
○金勝院本載勅書云、朝敵征伐之事、叡慮之攸向、偏在義貞武功、選未覓他、殊爲天下之武將、忽可運早速之計略、于爰勇猛之勵、溥退奸侶於倭朝之疆域、賢哲之譽、厚輝治世於源家之門業者也、

尸骸ヲ往
生院ニ送
リ、首ヲ
京都ニ送
ル

ト遊ハサレタリ、サテハ義貞ノ首相違ナカリケリトテ、尸骸ヲ輿ニ乗セ、時衆八人ニ昇セテ、葬禮ノ爲ニ往生院へ送ラレ、首ヲハ朱ノ唐櫃ニ入、氏家中務ヲソヘテ、中務、金勝院本作八代八郎重邦、西源院本作氏家八郎重國、潛ニ京都へ上セラレケリ、

義助重集敗軍事

脇屋右衛門佐義助ハ、河合石丸城へ打歸テ、義貞ノ行末ヲ尋給フニ、始ノ程ハ分明ニ知人モナカリケルカ、事ノ様次第ニ顯レテ、討レ給ヒケリト申合ケレハ、日ヲ替ス黒丸へ推寄テ、大將ノ討レ給ヒツラン所ニテ、同シク討死セント宣ケレ共、イツ

義助、義
貞ノ戦死
ヲ知ル

軍兵離散

往生院長
崎ノ道場

義助越前
國府ニ歸
ル

前朝ノ寵
臣天下ノ
倚頼

シカ兵皆アキレ迷テ、只茫然タル外ハ、指タル儀勢モナカリケリ、剩人ノ心モ變テ變リケルニヤ、野心ノ者内ニアリト覺テ、石丸城ニ火ヲ懸ントスル事、一夜ノ内ニ三箇度ナリ、是ヲ見テ齋藤五郎兵衛尉季基五郎兵衛、毛利家本作五郎右衛門、金勝院本、季基作三季、非也、按系圖、季基、伊豫房玄基子也、同七郎入道道獻二人ハ、道獻、毛利家本作道獻、他ニ異ナル左中將ノ近習ニテ有シカハ、門前ノ左右ノ脇ニ、役所ヲ並ヘテ居タリケルカ、暮ヲ捨テ、夜ノ間ニ何地トモナク落ニケリ、天正本云、道獻ヲ始トシテ、宗徒ノ兵二十餘人落ニケリ、云々、是ヲ始トシテ、或ハ心モ發ラヌ出家シテ、往生院長崎ノ道場ニ入、或ハ縁ニ屬シ罪ヲ謝シテ、黒丸城へ降參ス、昨日マテ三萬騎ニ三萬、天正本作二千、今川家、毛利家本作二千、金勝院本作三千、天正本作五百、アマリタリシ兵共、一夜ノ程ニ落失テ、今日ハ僅ニ二千騎ニ二千、今川家、毛利家本作二千、金勝院本作三千、天正本作五百、タニモ足サリケリ、カクテハ北國ヲ蹈ヘン事叶フマシトテ、三峯城ニ河島ヲ籠メ、金勝院本、柚山城ニ瓜生ヲ置、湊城ニ畑六郎左衛門尉時能ヲ殘サレテ、閏七月十一日ニ金勝院、西源院、天正本作義助義治父子トモニ、彌津、風間、江戸、宇都宮ノ勢七百餘騎ヲ率シテ、七百、今川家、毛利家本、當國ノ府へ歸給フ、

義貞首懸獄門附勾當内侍事

新田左中將ノ首、京都ニ著ケレハ、是朝敵ノ最、武敵ノ雄ナリトテ、大路ヲ渡シテ獄門ニ懸ラル、此人前朝ノ寵臣ニテ、武功世ニ被シメシカハ、天下ノ倚頼トシテ、其芳

延元三年(建武五年・曆應元年)

泣悲ノ聲
助々タリ
勾當内侍
頭大夫行
房ノ女

義貞内裏
ヲ警固ス
内侍彈琴

情ヲ悦ヒ、其恩顧ヲマツ人、幾千萬ト云數ヲ知ス、京中ニ相交リタレハ、車馬道ニ横
 リ、男女岐ニ立テ是ヲ見ルニ堪ス、泣悲シム聲助々タリ、中ニモ彼北臺勾當内侍局
 ノ悲ヲ傳聞コソ哀ナレ、此女房ハ頭大夫行房女ニテ、按、系圖作「行房妹」詳註ニ「金屋ノ内
 第十六卷西園蜂起段」ニ粧ヲ閉、鵝障ノ下ニ媚ヲ深クシテ、二八ノ春ノ比ヨリ、内侍ニ召レテ、君王ノ側ニ
 侍リ、羅綺ニタモ堪サル貌ハ、春ノ風、一片ノ花ヲ吹殘スカト疑ハレ、紅粉ヲ事トセ
 ル顔ハ、秋ノ雲、半江ノ月ヲ吐出スニ似タリ、サレハ椒房ノ三十六宮、五雲ノ漸ニ遠
 ル事ヲ聞、禁漏ノ二十五聲、一夜ノ正ニ長キ事ヲ恨ム、去建武始天下又亂レントセ
 シ時、新田左中將、常ニ召レテ、内裏ノ御警固ニツ候ハレケル、或夜月冷シク風秋ナ
 ルニ、此勾當内侍、半簾ヲ捲テ、琴ヲ彈シ給ヒケリ、中將其怨聲ニ心引レテ、覺ヘス禁
 庭ノ月ニ立サマヨヒ、アヤナク心ソ、ロニアコカレテケレハ、唐垣金勝院、西源院、
 天正本作「御簾」ノ傍ニ立紛レテ伺ケルヲ、内侍見ル人アリト物佗シケニテ、琴ヲハ引ズナリヌ、夜痛
 ク深テ、在明ノ月ノクマナク差入タルニ、類マテヤハツラカラメト打詠シテ、シホ
 レ臥タル氣色ノ折ハヲチヌヘキ萩ノ露拾ハ、消ナン玉篠ノアラレヨリ、尙アタ
 ナレハ、中將行未モ知ヌ道ニ迷ヒヌル心地シテ、歸ル方モサタカナラス、淑景舎ノ
 傍ニヤスラヒ兼テ立明ス、朝ヨリ風ニ歸リテモ、幽ナリシ面影ノ、ナヲ爰許ニアル

心迷ニ、世態人ノ云カハス事モ心ノ外ナレハ、イツトナク、起モセス寢モセテ、夜ヲ
 明シ日ヲ暮シテ、若シルヘスル海人タニアラハ、忘草ノオフト云浦ノアタリニモ、
 尋行ナマシト、坐ニ思ヒ沈ミ給フ、アマリニ爲方ナキ儘ニ、媒スヘキ人ヲ尋出シテ、
 ソヨトハカリヲ知スヘキ、風ノ便ノ下萩ノ、穗ニ出ルマテハナクトモトテ、
 我袖ノ涙ニ宿ル影トタニ、北條家、南都、天正本云、誰ユヘ
 ニヤトル袂ノ涙トモ、云々、

シラテ雲井ノ月ヤスムラン

○金勝院、西源院本云、内侍、在明ノ月ノクマナク差入タルニ、タクヒヤハ侍ルヘ
 キトテ、

我袖ノナミタニヤトル影トタニ

シラテ雲井ノ月ヤスムラン

金勝院本不
レ載、此歌、

ト打詠シテ、シホレフシタルケシキ、イフ計ナクアテヤカナレハ、行エモシラヌ
 道ニマヨヒヌル心地シ給フ、朝ヨリ風ニ歸、云々、此間同、
 本文、又云、義貞、度度消息アリ
 ツルニ、君ノ聞シ召レン事ヲ憚テ、内侍手ニタニトラスト云ケレハ、中將イトイ
 タフ打ワヒテ哀ナリ、サソ思フラントハカリノ言葉ヲタニ、セメテ聞ハヤト恨
 ワヒテ、中々イハスナリニケリ、何人カ奏シケン、君聞召、云々、按、西源院本以、本文所謂義
 貞歌、爲「内侍所」詠吟、金

延元三年(建武五年・曆應元年)

内侍ヲ義貞ニ賜フ

筆勢ノ餘過リノ語ニ

勝院本前後不載
二詠歌之事也 ○天正本云、義貞ハ、媒スヘキ人ヲ尋出シテ、度々消息セラレケレトモ、君ノ聞召レン事ヲ、ヤコトナシト思ヒテ、内侍手ニタニモトラスト、使ノ人申ケレハ、中將打ワヒテ、誰ユヘニヤトル袂ノ、云云、

ト讀テ遣サレタリケレハ、君ノ聞召レン事モ憚アリトテ、ヨニアハレケナル氣色ニ見ヘナカラ、手ニタニ取スト、使歸リテ語リケレハ、中將イト、思ヒシホレテ、云ヘキ方ナク、アルヲ憑ノ命トモ覺ズ成ヌヘキヲ、何人カ奏シケン、君等閑ナラスト聞召テ、夷心ノワク方ナサニ、思ヒ初ケルモ理ナリト、哀ナル事ニ思召レケレハ、御遊ノ御次ニ、左中將ヲ召レ御酒タハセ給ヒケルニ、勾當内侍ヲハ、此盃ニ附テトソ、仰出サレケル、左中將限ナク忝シト悦テ、翌夜、驪ヲ牛車爽ニ仕立テ、角ト案内セサセタルニ、内侍モ、ハヤ此年月ノ志ニ、サソフ水アラハト思ヒケルニヤ、天正本云、内侍ハ、玉樓金殿ヲ捨テ、雲ノ上ノ月ヲ外ニ見シ事ノ悲キノミナラス、女ノ身ノ有マシキ舉動ナレハ、痛ク根ミ沈ミ泣伏テ、物モ覺給ハサリケレトモ、勅命ナレハ力ナシ、云々、下同ニ本文ニ、サノミ深過ヌ程ニ、車ノキシル音シテ、中門ニ轅ヲ指廻セハ、侍兒一人二人、妻戸ヲサシカクシテ、ソヨメキアヘリ、中將ハ、此幾年ヲ戀忍テ、相逢今ノ心ノ中、優曇花ノ春マチ得タル心地シテ、珊瑚ノ枕ノ上ニ、陽臺ノ夢長クサメ、連理ノ枝ノ頭リニ、驪山ノ花自濃ナリ、アヤナク迷フ心ノ道、諫ル人モナカリシカハ、去建武末ニ、朝敵西海波ニ漂シ時モ、中將、此内

内侍ヲ堅田ニ留メテ北國ニ落ツ

内侍ノ父行房金崎スニテ戰死

侍ニ暫ノ別ヲ悲テ、征路ニ滞リ、後ニ山門臨幸ノ時、寄手大嶽ヨリ追落サレテ、其ママ寄セハ、京ヲモ落サントセシカトモ、中將此内侍ニ迷テ、勝ニ乘疲ヲ攻ル戰ヲ事トセス、其弊果シテ敵ノ爲ニ國ヲ奪ハレタリ、誠ニ一タヒ笑テ能國ヲ傾クト、古人ノ是ヲイマシメシモ、理ナリトソ覺タル、中將坂本ヨリ北國へ落給ヒシ時ハ、路次ノ難儀ヲ顧テ、此内侍ヲハ、今堅田ト云所ニソ留メ置レタリケルカ、ラヌ時ノ別レタニ、行ニハ跡ヲ顧テ、頭ヲ家山ノ雲ニ回ラシ、留マルハ末ヲ思ヒヤリテ、涙ヲ天涯ノ雨ニ添フ、況中將ハ、行末トテモ憑ナキ、北狄ノ國ニ赴給ヘハ、生テ再ヒ廻リアハン、後ノ契モイサ知ラス、又内侍ハ、都近キ海人ノ磯屋ニ、身ヲ匿シ給ヒケレハ、今モヤ搜出サレテ、愛名ヲ人ニ聞レンスラント、一方ナラス歎給フ、翌年春、父行房朝臣、金崎ニテ討レ給ヒヌト聞ヘシカハ、思ヒノ上ニ悲ヲ添テ、明日マテノ命モヨシヤ何カセント、歎キ沈ミ給ヒシカ共、サスカニ消ヌ露ノ身ナレハ、起居ニ袖ヲホシ陀テ、二年アマリニ成ニケリ、中將モ越前ニ下リ著シ日ヨリ、驪ヲ迎フモ上セハヤト思ヒ給ヒケレ共、道ノ程モ輒カラス、又人ノ云思ハンスル所憚アレハ、只時々ノ音信ハカリヲ、互ニ殘ル命ニテ、年月ヲ送り給ヒケルカ、其秋ノ始ニ、今ハ道ノ程モ、姑ク靜ニ成ヌレハトテ、迎ノ人ヲ上セラレタリケレハ、内侍ハ此三年カ間、暗キ夜

内侍袖山
ニ著ク

新田義貞公篇

九一八

夫ノ戦死
ヲ聞ク

夫ノ形見

京ニ歸ル

ノヤミニ迷ヘルカ、俄ニ夜ノ明タル心地シテ、聽テ先袖山マテ下著給ヒヌ、折節中將ハ、足羽ト云所へ向ヒ給ヒタリトテ、今川家、毛利家本云、四、五日以前向ニ足羽ニ云々、此ニハ人モ無リケレハ、袖山ヨリ輿ノ轅ヲ廻シテ、淺津橋ヲ渡リ給フ處ニ、淺津橋、金勝院本、作三麻生津橋、西源院本、作淺生津橋、瓜生彈正左衛門尉、百騎許ニテ行逢奉リタルカ、馬ヨリ飛テ下リ、輿ノ前ニヒレ伏テ、是ハ何クヘトテ御渡リ候ラン、新田殿ハ、昨日ノ暮ニ、足羽ト申所ニテ、討レサセ給ヒテ候ト申モハテス、涙ヲハラハラトコホセハ、内侍局、コハ如何ナル夢ノ幻ソヤト、胸塞リ瞻消テ、中々涙モ落ヤラス、輿ノ中ニ伏沈ミテ、セメテハ哀其人ノ討レ給ヒツラン、野原ノ草ノ露ノ底ニモ、身ヲ捨置テ歸レカシ、サノミハ後レ先タ、シ、共ニ消モハテナント、泣悲給ヘトモ、早其輿カキ返セトテ、急テ又袖山ヘソ返シ入進ラセケル、是ソ此程、中將殿ノ住給ヒシ所ナリトテ、色紙押散シタル障子ノ内ヲ見給ヘハ、何トナキ手スサヒノ筆ノ跡マテモ、只都へイツカト、アラマサレタル言ノ葉ヲノミ、書ヲキ讀ステラレタリ、カ、ル空シキ形見ヲ見ルニツケテモ、イト、悲ノミ深クナリ行ハ、心少モ慰ヘキ方ナラネ共、中將ノ住棄給ヒシ跡ナレハ、爰ニテ中陰ノ程ヲモ過シテ、ナキ跡ヲモ弔ハヤト覺シケルニ、聽テ其邊モ騒シク成テ、敵ノ近附ナト聞ヘシカハ、城ノ麓ハアシカルヘシトテ、頓テ又京へ上セ奉リ、仁和寺ノアタリ、幽

義貞ノ首
ヲ獄門ニ
見ル

刺髮ス

顯家・義貞等ノ死
後宮方振ハズ

ナル宿ノ、主タニ住スナリヌル蓬生ノ宿ニ、送り置奉ル、都モ今ハ却テ旅ナレハ、住所モ定マラス、心ウカレ袖シホレテ、何クニカ身ヲ浮舟ノヨルヘモ有ヘキト、昔見シ人ノ行末ヲ尋テ、陽明ノ傍リへ行給ヒケル路ニ、人アマタ立アヒテ、アナアハレナト云音スルヲ、何事ニカト立留テ見給ヘハ、越路ハルカニ尋行テ、アハデ歸リシ新田左中將義貞首ヲ、獄門ノ木ニ懸ラレテ、眼塞リ色變セリ、内侍局是ヲ二目トモ見給ハスシテ、傍ナル築地ノ陰ニ、泣倒レ給ヒケリ、知モ知ラヌモ是ヲ見テ、共ニ涙ヲ流サヌハナカリケリ、日已ニ暮ケレトモ、立歸ルヘキ心地モナケレハ、蓬カ木ノ露ノ下ニ、泣シホレテオハシケルヲ、其邊ナル道場ノ聖、餘リニ御痛ハシク見ヘサセ給ヒ候ニトテ、内へイサナヒ入奉レハ、其夜ヤカテ翠ノ髮ヲ剃下シ、紅顔ヲ黒染ニヤツシ給フ、暫シカ程ハ、ナキ面影ヲ身ニ添テ、泣悲ミ給ヒシカ、會者定離ノ理ニ、愛別離苦ノ夢ヲ覺シテ、厭離穢土ノ心ハ日々進ミ、欣求淨土ノ念、時々ニ増リケレハ、嗟哦ノ奥往生院ノアタリナル、柴ノ扉ニ明暮ヲ、行ヒスマシテソオハシケル、

〔参考太平記〕

卷第二

正行討死事

(前略)

先年奥州國司顯家卿安部野ニテ討レ、武將新田左中將義貞朝臣越前ニテ亡ヒシ後ハ、遠國ニ宮方ノ城郭少々有トイヘトモ、勢イマタ振ハサレハ、今更驚ニ足ス、

延元三年(建武五年・曆應元年)

九一九

〔參考太平記〕卷第三 直冬上洛附鬼丸鬼切事 (前略)

高經、鬼切丸ヲ私ス末々ノ源氏ノ持ツベキモノニアラズ長崎道場
鬼切丸ノ由來ノ由來北條氏ニ傳來スト

尾張修理大夫高經ハ、忠戰自余ノ一門ニ越シニ依テ、將軍モ抽賞他ニ異ニシテ、世其任ヲ重クセシカハ、何事ニ恨アルヘシトモ覺ヌニ、俄ニ今敵ニ成テ、將軍ノ世ヲ傾ケントシ給フ事、何ノ遺恨ソト事ノ起リヲ尋ヌレハ、先年越前足羽合戰ノ時、此高經朝敵大將新田左中將義貞ヲ討テ、不當稱義貞爲朝敵、作太平記者、不知文理乎、源平累代ノ重寶ニ、鬼丸鬼切ト云二振ノ太刀ヲ取給ヒタリシヲ、將軍使者ヲ以テ、是ハ末々ノ源氏ナト持ベキ物ニ非ス、急キ是ヲ渡サレ候ヘ、當家ノ重寶トシテ嫡流相傳スヘシト、度々仰ラレケルヲ、高經固ク惜ミテ、此二振ノ太刀ヲハ、長崎ノ道場ニ預置テ候シヲ、彼道場炎上ノ時、燒テ候トテ、同寸ノ太刀ヲ二振取替ヘテ、燒損シテソ出サレケル、此事有ノ儘ニ京都ヘ聞ヘケレハ、將軍大ニ忿リテ、朝敵ノ大將ヲ討タリツル忠功、拔群ナリトイヘトモ、サマテノ恩賞ヲモ行ハレス、事ニ觸、面目ナキ事トモ多カリケル間、高經是ヲ憤テ、故高倉禪門ノ謀叛ノ時モ是ニ與シ、今直冬ノ上洛ニモ力ヲ合テ、攻上リ給ヒタリトソ聞ヘケル、抑此鬼丸ト申太刀ハ、北條四郎時政天下ヲ執テ、四海ヲ鎮メシ後、長一尺許ナル小鬼、夜々時政カアト枕ニ來テ、夢トモナク現トモナク、侵サシトスル事度々ナリ、修驗行者加持スレトモ休ズ、陰陽寮封スレトモ立

去ス、利是故ニ時政病ヲ受テ、身心苦シム事隙ナシ、或夜ノ夢ニ、此太刀一人ノ老翁ニ變シテ告テ云、我常ニ汝ヲ擁護スル故ニ、彼妖怪ノ者ヲ退ケントスレハ、汚レタル人ノ手ヲ以テ、劔ヲ探リタリシニ依テ、鏽身ヨリ出テ、拔ントスレトモ叶ハス、早ク彼妖怪ノ者ヲ退ケントナラハ、清淨ナラン人ヲシテ、我身ノ鏽ヲ拭フヘシト委ク教ヘテ、老翁ハ亦元ノ太刀ニ成ヌトソ見タリケル、時政夙ニ起テ、老翁ノ夢ニ示シツル如ク、或侍ニ水ヲ浴セテ、此太刀ノ鏽ヲ拭ハセ、西源院本云、清淨ノ聖人ヲ呼テ暫ク加持シテ、太刀ノ鏽ヲ拭ハセ給フ、云々、イマタ鞘ニハサ、テ、臥タル傍ノ柱ニソ立掛タリケル、冬ノ事ナレハ、暖氣ヲ内ニ籠ントテ、火鉢ヲ近ク取寄タルニ、居タル臺ヲ見レハ、銀ヲ以テ長一尺許ナル小鬼ヲ鑄テ、眼ニハ水精ヲ入、齒ニハ金ヲソ沈メタル、時政是ヲ見ルニ、此間夜々夢ニ來テ、我ヲ惱シツル鬼形ノ者、サモ是ニ似タリツル者カナト、面影アル心地シテ守居タル處ニ、拔テ立タリツル太刀、俄ニ倒レ懸リテ、此火鉢ノ臺ナル小鬼ノ頭ヲ、カケス切テソ落シタル、誠ニ此鬼ヤ化シテ人ヲ惱シケン、時政忽ニ心直リテ、其後ヨリハ鬼形ノ者、夢ニモ會テ見ヘサリケリ、サテコソ此太刀ヲ鬼丸ト名附テ、按、劍卷鍛冶來、住於筑前國三笠郡土山、源滿仲召之令作鑿切、鑿丸二個、鑿切後鑿、鬼丸二而與、此下所謂鬼切、專相類、蓋一而已、然則時政所珍鬼丸者、非鑿卷所謂鬼丸、第九卷亦有二名、越高家所傳鬼丸、無所考定、可并見、高時世ニ至迄、身ヲ放タヌ守ト成テ、平氏ノ嫡家ニ傳リケル、此下所謂鬼丸事、相摸入道錄合勝院本不レ出、

延元三年(建武五年・曆應元年)

奥州宮城
郡ノ三眞
國ノ鍛造

細川清氏
ノ戦死ト
似タリ

倉東勝寺ニテ自害ニ及ケル時、此太刀ヲ相摸入道次男小名龜壽ニ、家ノ重寶ナレハトテ取セテ、信濃國へ祝部ヲ憑テ落行、建武二年八月ニ、鎌倉ノ合戦ニ打負テ、諏訪三河守ヲ始トシテ、宗徒ノ大名四十餘人、大御堂ノ内ニ走入、顔ノ皮ヲ剝、自害シタリシ中ニ、此太刀有ケレハ、定テ相摸次郎時行モ、此中ニ腹切テソ在ラント、人皆哀ニ思合ヘリ、其時此太刀ヲ取テ、新田殿ニ奉ル、第十一卷云、時行舉兵時、尊氏往擊之、時行敗走、親族於大御堂自殺、云云、今云、取三鬼丸而傳義貞、可レ疑也、若尊氏軍士、義貞斜ナラス悦テ、是ソ聞ユル平氏ノ家ニ傳ヘタル鬼丸ト取レ之、傳送義貞手、恐無此理、義貞斜ナラス悦テ、是ソ聞ユル平氏ノ家ニ傳ヘタル鬼丸ト云重寶ナリト、秘藏シテ持レケル劔ナリ、是ハ奥州宮城郡ノ府ニ、三眞國伯州大原安守子、初名安房、後住奥州、ト云鍛冶、三年精進潔齋シテ、七重ニ注連ヲ引キタフタル劔ナリ、(見切ノ傳改名眞國)

〔参考太平記〕卷第三 細川清氏討死附西長尾城没落事 (前略)

(源氏) 其身ハ深田ノ泥土ニ塗レテ、首ハ敵ノ鋒ニアリ、只元曆ノ古、木曾義仲カ粟津原ニテ討レ、曆應二年當作曆應元年、秋ノ初、新田左中將義貞ノ足羽ノ繩手ニテ討レタリシ、二人ノ體ニ異ナラス、

〔長樂寺源氏系圖〕〔外長樂寺系圖〕〔新田兩家系圖〕〔佐田新田系圖〕〔由良系圖〕(系圖部参照)

(參考)

〔宮下過去帳〕(上野新田郡武藏島) 二日

覺阿彌陀佛 宮分大將軍播磨守義貞、 延元三年閏七月二日 實者里見大炊介義忠五男、

〔宮下過去帳〕(朔旦) 上野國勢田郡田島鄉武藏島村花見塚吉野山儀源院柘堂者、

本寺相模國藤澤宿清淨光寺末寺、建武戊寅年尼成、儀源比丘尼、貞治四年乙巳二月一日逝去、實ハ勾當内侍、惟康親王娘、

二祖ハ覺心比丘尼 元中八年辛未年七月七日逝去、新田義宗娘、實ハ儀源比丘尼娘、 (中略)

七旦良弼房覺心尼 元中八年辛未七月七日、國良親王御母、内侍娘、

〔武衛系圖〕(後鑑) 高經、尾張又三郎宗氏子、母備前守時秀女、孫三郎、尾張守、修理大夫、正四位下、昇殿、歌人、號玉堂、又七條、越前國守、并北陸道七ヶ國歷任、延元三、誅進新田義貞、拜賜忠賞之綸旨、靈源院法名道朝、別稱日峯、貞治六、七十三卒、六十三歲、始號東光寺、依靈夢之告、後改靈源院、

〔村上家傳〕 信州村上源氏正統 賴義—賴清—(中略)—義國—義氏—(從四位正三位左中將)—賴國—(從四位正三位)—賴清—(從四位正三位)—義實

〔從四位正三位左中將〕(以下略)

氏清—政義—清政—賴清—義政—政國—顯國—(正三位左中將)—義清—(正四位左少將)

延元三年(建武五年・曆應元年)

義貞ハ里見義忠ノ五男トノ説、上野内侍ルトノ來ルトノ説

義貞ノ娘

高經ノ事

義貞ノ娘

第三 新田氏遺族篇

延元三年(建武五年・曆應元年) (八月二十) 戊寅(一九九八)

閏七月十七日 尊氏黨横瀬孫五郎、鳥生貞實等ヲ率テ、官軍ト伊豫新居關ニ戰ヒ、尋デ、十月十四日、郷得重兩城ヲ陷イレ、十一月廿五日、府中ノ官軍ト高市郷ニ戰ヒテ克チ、府中ニ攻メ入ル。

〔小松邑志〕下篇 六、四、九四四

鳥生貞實
横瀬孫五郎
府中ノ官軍
伊豫國御家人鳥生又三郎貞實申、自備後國奉屬御手、去建武三年後七月十七日、新居關(新居郡)合戰以後、於庄司山要害(新居郡ニ生)致警固、同九月廿日御發向西條庄(新居郡)追籠凶徒於郷得重兩城(並ニ越智郡)取陣於福武山(新居郡)致軍忠之條、侍大將横瀬孫五郎被見知之、終以彼兩城(十月廿日)令没落畢、同十五日、侍大將相共、打出西條庄、發向所々、晦日打入朝倉高市(並ニ越智郡)構要害於宮崎山(越智郡)之處、十一月廿五日、自府中(越智郡古國)凶徒等寄來之間、馳向彼致合戰、自高市郷竹林寺(並ニ越智郡)追越佐禮山(越智郡)追籠龍岡城(越智郡)自鴨部中村(並ニ越智郡)燒拂所々、攻入府中、追登凶徒於八幡山(越智郡)之條、庄林又七郎所見也、同廿七日御發向府中之時、致合戰之忠、追籠凶徒於佐波龍岡之

條、三鳥孫五郎所見也、然者早爲後證欲下預御判候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應元年十二月日

越智貞實

進上 御奉行所

〔註〕 横瀬孫五郎トハ後ノ横瀬由良氏ニ所縁ナキカ。又此ノ時ノ官軍ハ大館新田

氏明ノ軍ニ關スルナキカ。

閏七月二十六日 北畠顯信、陸奥介鎮守府將軍ニ任ゼラレ、父親房ト共ニ、義良親王ヲ奉ジテ東國ニ下向セントシテ、吉野ヨリ伊勢ニ下ル。新田義興、亦、之ニ伴フ。

〔神皇正統記〕六 (上文ハ閏七月二) (日ノ條ニ收ム) さてしもやむべきならずとて、陸奥の御子又

東へむかはしめ給ふべき定あり、左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍し、陸奥の介鎮守將軍を兼ねてつかはさる、東國の官軍悉く彼節度にしたがふべきよし仰せらる、親王は儲君にたたせ給ふべきむね申し聞かせ給ふ、道の程もかたじけなかるべし、國にてはあらはさせ給へとなん申されし、異母の御兄もあまたましましき、同母の御兄も、前東宮恒良親王、成良親王まし、しに、かくさだまり給ひぬるも、天命なればかたじけなし、七月の末つかた、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に

義良親王
御東下ニ
決ス、北
畠顯信之
ヲ奉ズ

皇太子ト
定メ給フ

延元三年(建武五年・曆應元年)

九二五

事のよしを啓して、御船のよそひし。(下文ハ九月十日ノ條ニ收ム)

〔結城文書〕(伊勢)

△六、四、九五五

天下靜謐事、奉扶持宮、重舉義兵、急速可令追討、尊氏直義以下黨類、給坂東諸國軍勢、賞罰等事、宜令計成、敗給者、天氣如此、仍執啓如件。

延元三年後七月廿六日

右中辨光守奉

謹上 陸奥三位中將殿

〔元弘日記裏書〕 後七月廿五日、義良親王并入道一品以下顯信卿、率東軍下向勢

州

〔保曆間記〕(上文ハ開七月二日ノ條ニ收ム) そののち吉野にて、あきのぶ朝臣を出羽むつのかみ

征夷將軍になして、今度は親父宗玄ともに、よしのの諸勢を相催し、宮をぐし奉り、奥州へ下られけるが、(下文ハ九月十日ノ條ニ收ム)

〔參考太平記〕卷第二 奥州下向勢遭難風、附義良親王歸御吉野事

吉野ニハ、奥州國司安部野ニテ討レ、春日少將西源院本作新田兵衛佐義興、櫻雲記云、春日少將顯信、新田義興能ハ八幡城ニ云々、八幡城

ヲ落サレテ、諸卒皆力ヲ失フトイヘトモ、新田殿北國ヨリ攻上ル由、奏聞シタリケルヲ御憑アリテ、今ヤ今ヤト待給ヒケル處ニ、此人サヘ足羽ニテ討レヌト聞ヘケ

顯信ニ給旨下ル

親房モ伴フ

新田義興

義貞戰死ニ到ル

結城宗廣ノ獻策

義良親王御東下ト決定

顯信宗廣

新田義興北條時興ヲ東國ニ下サル

レハ、蜀後主ノ孔明ヲ失ヒ、唐太宗ノ魏徵ニ哭セシカ如ク、叙襟更ニ穩ナラス、諸卒モ皆色ヲ失ヘリ、爰ニ奥州住人結城上野入道道忠ト申ケル者、參内シテ奏シ申ケルハ、國司顯家卿、三年ノ内ニ兩度マテ、大軍ヲ動シテ上洛セラレ候シ事ハ、出羽奥州兩國、皆國司ニ從テ、凶徒其隙ヲ得サル故ナリ、國人ノ心イマタ變セサル先ニ、宮ヲ一人下シ進ラセテ、忠功ノ輩ニハ、直ニ賞ヲ行ハレ、不忠不烈ノ族ヲハ、根ヲ切葉ヲ枯シテ、御沙汰候ハンニハ、ナトカ攻從ヘテハ、候ヘキ、國ノ差圖ヲ見候ニ、奥州五十四郡、恰日本半國ニオヨヘリ、若兵數ヲ盡シテ一方ニ屬セハ、四五十萬騎モ毛利家本作四五百萬騎、非也、金勝院、天正本、作三三三萬騎、候ヘシ、道忠宮ヲ挾奉テ、老年ノ首ニ兜ヲ載ク程ナラハ、重テ京都ニ攻上リ、會稽ノ恥ヲ雪メン事、一年ノ内ヲハ過シ候マシト申ケレハ、君ヲ始奉リテ、左右ノ老臣、悉此議ケニモ然ヘシトソ同セラレケル、是ニ依テ第八宮金勝院、天文第二十一卷、作七宮、非也、按神皇正統紀、作第八宮、諱義良、即後村上帝也、今年七歳ニナラセ給フヲ鳩嶺雜事記云、應安元年三月十一日、住吉御所崩御、御年四十一、奉號後村上院、云云、據此、則子延元三年、則年當三十一歲、初冠メサセテ、按神皇正統紀、建武三年、義良親王元服、今爲三延元三年之事、蓋非也、詳出第十六卷、可合見、春日少將顯信ヲ輔弼トシ、結城入道道忠ヲ衛尉トシテ、奥州ヘソ下シ進ラセラレケル、按、義良親王者、元弘三年也、今本文文義、似始赴者、詳出第十五卷、奥州勢者、坂本一段、可合見、是ノミナラス、新田左兵衛佐義興左、西源院本作右、相摸次郎時行次郎、金勝院本、二人ヲハ、金勝院、西源院本、載字都宮加賀壽丸、爲三人、按、加賀壽丸者、芳賀禪可、挾之屬、章氏、不當出此、蓋字都宮公綱乎、東八箇國ヲ

延元三年(建武五年、曆應元年)

伊勢大湊
ヨリ出帆

討平ケテ、宮ニカヲ添奉レトテ、武藏相摸ノ間ヘソ下サレケル、相摸、金勝院、西源院、天正本、作上野、天正本文又
野、載下陸地ハ皆敵強クシテ、通りカタシトテ、此勢皆伊勢大湊ニ集テ、大湊、金勝院、西源院本、作鳥羽津、
船ヲソロヘ風ヲ待ケルニ、(下文ハ、九月十日ノ條ニ收ム)

八月二日 新田軍、越前金崎城ニ據ル。桃井直信、之ヲ攻メ、敦賀津ニ戰フ。

〔茂本文書〕(羽後) △六五、一

□木越中彌三郎知政申軍忠事、

□(右屬カ)當御手令發向敦賀金崎城郷□(之邊)御敵者率數百騎勢出城中、取□(取)賀津陣之畢、

爰知政懸入敵陣□(合カ)追籠城郷中之條、御見知上者、□(早)給御判爲備後證、言上如件、

建武五年八月二日

桃井直信(直信)御名事
一見了(花押)

(註) 大日本史料曰、本條ノ戰月日ヲ詳カニセズト雖ドモ本文ニヨリテ是日ニ

揭ク、是ヨリ先キ脇屋義助越前府中ニアリテ、敦賀足羽等ニ往來セルコト、閏

七月二日義貞戰死ノ條ニ收メタル太平記ニ見エタリ、コノ後、石橋和義又、金

崎城ヲ攻ムルコト、明年五月三日ノ條ニ見ユ、竝ニ參看スベシト。

八月十一日 京廷、尊氏ヲ正二位ニ叙シ、征夷大將軍ニ補ス。又、義貞追討ノ賞トシテ、直義ヲ從四位上ニ叙シ、左兵衛督ニ任ズ。

〔公卿補任〕(三十一) 權大納言從二位源尊氏、(卅四)八月十一日敘正二位、同日遷補征

夷大將軍、(元夷東)

〔公卿補任〕(三十一) 非參議從三位源直義、(足)曆應元八十一左兵衛督、同日從四上、

權大納言源朝臣尊氏義貞追討賞讓

〔中院一品記〕(△六五、二〇) 八月十二日、去夜、除□□□□征夷將軍源尊氏、左兵衛

督源直義正二位源尊氏、(源顯家)從四位上源直義、(權大納言源朝臣、源義貞追討賞讓)上卿日野中納言資

明、參議重資、(綾小)卿、後聞將軍載奏任別紙云々、上古有其沙汰事也、

八月二十五日 足利幕府、足利高經ヲ促シテ、園城寺造營料所越前宮

成保・小磯邊保・角原等ノ地頭職ヲ同寺雜掌ニ交付セシム。〔園城寺文書〕

九月六日 尊氏、上野長樂寺ニ、新田氏ノ舊領新田庄内平塚郷ノ地頭職

ヲ寄附ス。尋デ十六日、上杉憲顯ニ命ジテ之ヲ交付セシム。

〔長樂寺文書〕(△六五、五七)

奉寄 上野國長樂寺

延元三年(建武五年・曆應元年)

義貞追討ノ賞
顯家追討ノ賞

尊氏ノ寄進狀

當國新田庄内平塚郷地頭職事

右奉寄之狀如件

建武五年九月六日

源朝臣(花押)

上野國新田庄内平塚郷地頭職事任御寄進狀可被沙汰付長樂寺雜掌之狀依仰執達如件

曆應元年九月十六日

武藏守(花押)

上相民部大輔殿

〔長樂寺文書〕(貞治四年七月五日ノ條ニ收ム)

〔註〕世良田行義平塚村ノ地ヲ長樂寺ニ寄進スル事元弘三年七月二十日ノ條ニ掲ゲタリ

九月十日 新田義興、北畠顯信父子・結城宗廣等ト共ニ、義良親王・宗良親王ヲ奉ジテ、九月初メ、伊勢大湊ヲ解纜ス。十日頃ヨリ風波荒レ、義良親王ハ顯信・宗廣ト共ニ伊勢ニ、宗良親王ハ遠江ニ、親房ハ常陸ニ、義興ハ武藏石濱ニ着ス。官軍ノ勢衰フ。

〔神皇正統記〕六(前文ハ同七月二十)九月のはじめ、ともづなをとかれしに、十日比

の事にや、上總の地ちかくより空のけしきおどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとゞ波風おびたゞしくなりて、あまたの船行方しらす侍りけるに、御子の御船は、さはりなく、伊勢の海につかせ給ふ、顯信朝臣は、本より御船にさぶらひけり、同じ風のまぎれに、東國をさして、常陸の國なる内の海につきたる船侍りき、方々にただよひし中に、此二の船、同じ風にて東西に吹きわけらる、末の世には、珍らかなるためしにぞ侍るべき。

〔結城文書〕(伊勢) △六四、九五五

早令靜謐東國、重可被擧義兵之由、所被下綸旨也、相催坂東諸國軍勢、急速可令追討、尊氏直義以下黨類給者、依宮令旨上啓如件

延元三年九月三日

右中辨光守奉

謹上 陸奥三位中將殿

〔李花集〕

雜歌

延元四年の秋の比にや、伊勢より船にのりて遠江へ心さし侍しに、天龍のなたとかやにて、浪風なへてならずあらく成て、二三日までおきにたゞよひ侍しに、

延元三年(建武五年・曆應元年)

九三一

宗良親王
遠江白羽
湊ニ著キ
給フ

友なる船ともみなこ、かしこにてしつみ侍しに、からうしてしろわの湊(遠江、豊田、並ニ白羽村アリ)といふ所へ浪にうちあけられて、われにもあらず船さしよせ侍しに夜もすから波にしほれていとたへかたかりしかへ、

いかてほす物ともしらすとまやかたかたしく袖のよるの浦浪

井伊城ニ
御座ス

延元三年のはるにや遠江よりはるくのほりて、都へと心さし侍しも、御方のいくさやふれにしかは、吉野の行宮にまいりて、しはらく侍しかとも、猶東のかたに、さたすへき事ありて、まかり下へきよし仰られしかは、その秋の比かへりて、井伊城にてよみける、

なれにけり二たひきても旅衣おなしあつまの嶺の嵐に

かくてしはしすみ侍ける所の柱に書付侍し、

あつまやのあさ木の柱かりそめに思ひなからや住なれにけん

〔鶴岡社務記録〕坤 九月九日、御敵船二艘、著安房國之間、安房國軍勢馳向畢、

同十二日、又船六艘著安房國了、

官軍ノ
破船著岸
シテ討タ
シル、者多

十三日、船二艘被放風、而被吹寄江島之間、御敵多被生取之内、關八部左衛門尉其中大將云々、被誅了、

各々ノ行
方

尊良親王
ノ一宮
花園宮
牧宮

十四日、船三艘被吹寄、吹神奈河候間、數輩生取之切懸了、(中略)

十七日、於稻瀬川御敵廿一人被誅畢、此内冷泉侍從關八郎宗之者云々、

於神奈河廿人、其外猶濟々被誅候由有其聞、

十九日、廿四人被誅、

廿日、於同所廿六人被誅、此内宗者、阿曾沼、桃將監一族五人、今日又自相模一宮生

取五人、又自武州生取二人、御敵滅亡者更非人力、偏爲佛神加護之條無疑處、及末代、

人不信之間、無信仰思之條、不便之次第也□□□

〔元弘日記裏書〕 八月十七日解纜、九月十一日、於伊豆崎遇大風、數船漂沒親王顯

信卿等船、歸著勢州、上野入道々忠、儀此御船、入道一品船、著常陸國訖、尊澄法親王、尊

良親王第一宮著御遠江國井伊城、花園宮著御四國、牧宮同著御四國、可有御下向鎮

西云々、

〔參考太平記〕卷第(上文ハ閏七月二十) 九月十二日今川家、毛利家、西源院本、作八月十五日、金

異、而過風之日、時未詳、唯元弘日記裏書并、載發船及過風之日、則出子下、宵ヨリ風止雲收リテ、海上殊ニ靜リタリケレハ、舟人

纜ヲ解テ、萬里ノ雲ニ帆ヲ飛ス、兵船五百餘艘金勝院本作三十八艘、西源院本作三、宮ノ御座五十餘艘天正本作三百餘艘、船ヲ中ニ立テ、遠江天龍灘ヲ過ケル時ニ、海風俄ニ吹アレテ、逆浪忽ニ天ヲ卷翻ス、

延元三年(建武五年・曆應元年)

海波荒ル

或ハ橋ヲ吹折レテ、彌帆ニテ馳ル船モアリ、或ハ梶ヲカキ折テ、廻流ニ漂フ船モアリ、暮レハ彌風アラク成テ、一方ニ吹モ定ラサリケレハ、伊豆ノ大島、女良湊女良、今川家、モ、利家本、作由良、カメ河、今川家本作神奈川、而金、三浦由比濱、津々浦々ノ泊ニ、船ノ吹寄セラレヌハナカリケリ、宮ノ召レタル御船一艘、漫々タル大洋ニ放タレテ、已ニ覆ラントシケル處ニ、光明赫奕タル日輪、御船ノ舳前ニ現シテ見ヘケルカ、風俄ニ取テ返シ、伊勢國神風濱ヘ、毛利家、西源院本作、伊勢國時、金勝院本、吹モトシ奉ル、若干ノ船トモ行方モシラス成ヌルニ、此御船計、日輪ノ擁護ニ依テ、伊勢國ヘ吹モトサレ給ヒヌル事、タタ事ニアラス、何様此宮繼體ノ君トシテ、九五ノ天位ヲ踐セ給フヘキ所ヲ、忝モ天照大神ノ示サレケルモノナリトテ、急ニ奥州ノ御下向ヲ止ラレ、即又吉野ヘ返シ入進ラセラレケルニ、果シテ先帝崩御ノ後、南方ノ天子ノ御位ヲ繼セ給ヒシ、吉野ノ新帝ト申奉リシハ、即此宮ノ御事ナリ、

○金勝院本云、北畠大納言入道宗徒ノ船ハ、常陸國東條浦ヘ吹寄タリシカハ、當國伊佐大室ノ邊ニ、城郭ヲ構ヘ楯籠ルト聞ユ、又妙法院宮、五辻宮、相摸左馬權頭時行以下ノ船十三艘ハ、難風以前ニ、遠江疋馬宿ヨリ上リケルヲ、今川五郎入道心省ノ手者、馳出テ戰フトイヘトモ、俄ノ事ナレハ、今川方小勢ナレハ、打負テ引退、妙

親王ノ船
伊勢ニ著

親王吉野
フニ歸リ給

親房ハ常
陸東條浦
ニ著ク

妙法院宮
五辻宮北
條時行ハ
伊井城ニ
籠ラシム

義興ハ武
藏石濱ヨ
リ上陸

大湊出帆

官軍ノ勢
成衰フ

法院宮、時行以下ハ、伊井介高顯カ城ニ籠ラレケリ、其外ノ船トモ、行末モ知ラス成ニケリ、義興ハ石濱ヨリ上ラレケルカ、行方ナク失ニケリ、驍ヲ遁世シ給ヒケルトソ聞ヘシ、云々、

〔保曆間記〕第五(上文ハ七月二十
六日ノ條ニ收ム) 陸地は敵つよふしてかなひがたしとて、舟にのりてなんかいどうを下らんと、伊勢の大みなどにて、ふねと、のへして出られしが、とをたうみのおきにして、大風俄に吹て、舟のこりなくさんくになりぬ、きしによする舟の人々、あるひはうたれ、或とられうしなはれける、かくて世の中しづまりつべふぞみえにける、

〔参考太平記〕卷第二
十一 天下時勢糺事

曆應元年ノ末ニ、按、南朝延元三年也、是歲五月顯家死、于安部野、閏七月義貞死、于越前、由、此見之、所謂末者訛也。 四夷八蠻悉王化ヲ助テ、大軍同時ニ起リシカハ、今ハ、ヤ聖運啓ヌト見ヘケルニ、北畠顯家卿、新田義貞、共ニ流矢ノ爲ニ命ヲ隕シ、利奥州下向ノ諸卒、渡海ノ難風ニ放サレテ、行方知スト聞ヘシカハ、世間サテトヤ思ヒケン、結城上野入道カ子息、大藏少輔モ親父カ遺言ヲ背テ降人ニ出ヌ、按、結城家譜、親朝南朝興國元年十一月、轉修理權大夫、從源顯信命、同平、國中、戮力官軍、顯信深倚之、然以宗族多降、源氏、親朝不、得、遂志、云々、 芳賀兵衛入道禪可モ、金勝院本、禪作源、而前後同、本文、相、顯、 主ノ宇都宮入道カ子息、加賀壽丸ヲ取籠テ、將軍方ニ屬シ、主延元三年(建武五年・曆應元年)

從ノ禮儀ヲ亂リ、己カ威勢ヲ恣ニス、此時新田ノ氏族尙殘テ、城々ニ楯籠リ、竹園ノ連枝時ヲ待テ、國々ニ御座有トイヘトモ、猛虎檻ニ籠リ、窮鳥ノ翅ヲ鍛レタルカ如クニ成ヌレハ、涙眼空シク百歩ノ威ヲ闔、悲心遠ク九霄ノ雲ヲ望テ、當時ノ變有ン事ヲ待計ナリ、

九月二十四日 新田金谷經氏ノ率キルト思ハル、丹生寺城ノ官軍、香下寺城ノ官軍ト共ニ、赤村則祐ノ別宮山城ヲ攻撃シ、激戰アリ。爾後、播攝ノ間ニ、唐崎城(官軍)、一田瀨城(賊軍)、香下寺城(官軍)等ノ攻防戰續ク。尋テ、十月十九日、丹生寺城、香下寺城ノ官軍、復、別宮山城ヲ攻撃シ、激戰アリ。

〔余田文書〕(攝津 六六、四七七九)

貴志五郎四郎義氏申軍忠事

一 去年八月上旬比、自尼崎御座之時、奉屬當御手以來、令兵庫島御共、或令警固御陣、或夜廻以下重役、及數十箇日勤仕訖、
一 同九月上旬、可發向有馬郡之旨、就被仰下、即罷向取陣于小屋宿、相待方々御勢之處、曾以不與力之間、依爲無勢、雖失爲方、捨身命同廿一日、令發向當郡取上別宮山之

時、不廻時刻、香下寺御敵等、率多勢寄來之間、散々防戰、而於彼山構城、楯籠之刻、同廿四日、丹生寺御敵等相副之、以數千騎勢取卷彼城間、驚合戰、耳目畢、雖然於御敵等者追返訖、

- 一 同十月五日、平崎麓合戰之時、終日及散々之合戰、追籠唐崎城、致忠節訖、
- 一 同十月十日、一田瀨合戰之時、追返數多御敵等、隨分致忠訖、
- 一 同十一月一日、押寄唐崎城合戰之時、麓役所廿餘宇燒拂、于時致忠訖、
- 一 同十七日、於同城麓致合戰畢、
- 一 同十七日夜、押寄香下麓大谷、燒拂御敵役所五十餘宇之時、致忠勤畢、
- 一 同十九日、丹生寺香下寺兩寺御敵等、引率數千騎軍兵等、寄來件別宮城、堀之間、討出城中、於田太越致合戰之忠刻、引上宅原根部谷、東岡取陣之間、同日重押寄彼陣、致散々合戰、即追散御敵等、致隨分忠節訖、
- 一 同十九日夜、押寄唐崎城、御敵陣大原村在家、燒拂四十餘宇之時、致忠訖、
- 一 同十一月廿日、押寄唐崎城、相尾城麓大藏河原合戰之時、致忠訖、
- 一 同廿日夜、押寄香下寺中多和城、夜討之時、及數刻合戰、捨身命責破當城、討取湯山左衛門三郎等、悉燒拂役所等訖、

唐崎城陷
相尾城陷

一同廿八日、押寄唐崎城、致終日合戰、同刻西悉令對治御敵等之時、家子藤野右衛門次郎俊村頭被疵畢、同夜押寄相尾城、追落御敵等、燒拂城塙致忠訖、右義氏軍忠次第如斯、此等子細、御内祇候人佐原孫五郎所被見知也、然早給御證判、欲備後證之候、仍恐々言上如件(曆應二年六月日附、赤松則祐ノ證判)

(註) 七月二十七日、十月十九日、十一月二十日、明年八月二十日條參照。

十一月十九日 左京權大夫大館氏明、忽那義範ヲシテ伊豫忽那島ニ城キテ足利軍ヲ伐タシム。

〔忽那文書〕乾 (伊豫) △六、五、一四五、

於忽那島構城塙、令退治凶徒、可致軍忠狀如件、

延元三年十一月十九日

(附箋) 左京權大夫正雄ハ、大館氏明ナリ、左京權大夫(花押)(49)

(忽那義範)下野房

大館氏明
ノ花押

(註) 左京權大夫が大館氏明ナル事、長樂寺所藏源氏系圖及ビ安藝田所家ノ石井三宅系譜(延元元年三月三、十日條ニ收ム)本年四月十一日條ノ文書及註ヲ合セ考フル事ニヨリテ知ラル。而シテ當時、藤原正雄ハ左京權大夫ニアラザル事、阿蘇文書正平三年二月六日附左少辨正雄奉中院中納言宛繪旨其他ニヨリテ知ラ

ル(藤田氏新田氏研究參照)

十一月二十日 新田金谷經氏等ニ味方セル攝津官軍ノ香下寺中塔城、陷ル。尋デ、二十八日、官軍ノ唐崎城、相尾城等、陷ル。

〔余田文書〕(九月二十四日條ニ收ム)〔南部晉所藏文書〕(近延元二年七月二日、江十六日條ニ收ム)

〔淺野文書〕(津) △六、四、七八〇、

今月廿日、中塔城夜討之時、凶徒左衛門次郎入道圓忍討捕之條、殊以神妙也、急速此旨可令注進之狀如件(曆應元年十一月廿二日附、赤松則祐ヨリ貴志五郎四郎ニ宛ツ)

是歲末頃 結城宗廣、伊勢ニ卒ス。

延元四年(曆應二年)己卯 (二九九九)

二月二日 幕府、足利高經ヲ若狹守護ト爲ス。

〔若狹國今富名領主次第〕△六、五、四一、〔若狹國守護職次第〕

三月十八日 足利黨某、但馬進美寺攻圍ノ將士ニ兵糧料所ヲ與フ。

〔進美寺文書〕(但馬) △六、五、四四〇、

進美寺(但馬、美父、郡赤崎村)迫衆等申、預所事、爲兵糧料足宛行之上者、京都御計之間、更不可有相違者也、今度抽軍忠者、可申宛恩賞之由、可令下知之條如件(曆應二年三月十八日、附某ヨリ守護代宛)

延元四年(曆應二年)

九三九

中塔城

進美寺

預所事、御教書如此、早任被仰下之旨、可被抽軍忠之狀如件(三月十八日附某ヨリ阿曾沼孫四郎宛)
(註) 延元二年七月二十六日條參照。六月二十九日條參照。

三月二十八日 越前ノ新田軍、同國經峯ニ足利軍ヲ攻ム。尋デ、足利軍、新田方ノ鳥羽城、西方寺城ヲ攻ム。四月十七日、新田軍、足利軍ヲ伊部岡ニ攻ム。二十六日、足利軍、新田軍ヲ西方寺城中島城ニ攻ム。

(得江文書) △六五、四四八。

得江九郎頼員申軍忠事、

得江頼員
ノ奮戰
經峯

一爲對治越前國凶徒、今年曆應三月廿一日、馳參當國、同廿八九兩日、凶徒等寄來經

峯(大野郡)之間、馳向一陣、致合戰、追歸御敵訖、

一同四月一日、押寄鳥羽城(今立郡ニ鳥羽村アリ)、大手、致軍忠訖、

一同六日、押寄西方寺城(坂井郡ニ西方寺村アリ)、抽合戰忠節畢、

一同十七日、凶徒等寄來伊部岡(モト丹生郡ニ伊部郷アリ)之間、爲後攻馳向彼陣、致戰功、追歸御

敵訖、

一同廿六日、押寄西方寺城、致合戰之處、東郷(足羽郡ニ東郷村アリ)、內中島城凶徒等、爲後攻懸

中島城

伊部岡

西方寺城

鳥羽城

木田城

出之間、頼員懸先一陣、追歸御敵、押寄中島城、矢倉下、越堀付、不惜身命、致合戰之刻、若黨吉原兵衛五郎光俊被疵、被射右股

一同五月六日、西方寺并中島城凶徒等、寄來木田城(足羽郡ニ木田村アリ)之間、馳向春日宮前、致散々合戰、追歸御敵訖、

一同廿七日、押寄中島城、捨身命、致戰功、追落彼城訖、

一同六月十五日、凶徒等寄來伊部岡城、致合戰之處、御方數十人討死訖、仍御敵責入彼城之時、馳向彼陣、致軍功、追落凶徒、如元入替御方於城中訖、

一同廿九日、凶徒等寄來經峯城之間、爲後攻頼員馳向一陣、抽軍忠之刻、中間左近次郎信忠被疵、被切左腕

一同九月十五日、押寄淺字津(足羽郡ニ淺水村アリ)之處、落野寺城竝二岡城凶徒等懸出之間、致合戰、燒拂落野寺城、籠訖、

一同十二月十日、凶徒等寄來南江守城(足羽郡ニ南江守村アリ)之間、爲後攻馳向一陣、致合戰、追歸御敵訖、

一同廿日、押寄二岡城、抽軍功訖、

右每度軍忠拔群之上者、早被經御注進、且下賜御證判、備弓箭之面目、彌爲致忠節、

延元四年(曆應二年)

淺字津
落野寺城
二岡城

南江守城

恐々言上如件、

曆應二年十二月日

足利高經

(足利高經)
承了(花押)

五月三日 直義、石橋和義ヲ遣シテ、越前金崎城ノ新田軍ヲ攻メシム。
是日、佐々木經氏ニ令シテ赴キ援ケシム。

〔朽本文書〕△六、五、五二九、

越前國金崎凶徒退治事、所差遣尾張左近大夫將監(石橋和義)也、依之佐々木五郎(義氏)并淺井伊香坂田郡地頭御家人等、同令發向畢、急速馳向可致軍忠之狀如件、

氏佐々木經

曆應二年五月三日

(直義)
(花押)

佐々木出羽四郎兵衛尉とのへ

五月六日 越前西方寺城、中島城ノ新田軍、足利方ノ木田城ヲ攻ム。尋
デ、二十七日、足利軍、中島城ヲ攻落ス。六月十五日、新田軍、伊部岡城ヲ
陥イレシモ、直チニ奪還セラル。二十九日、新田軍、經峯城ヲ攻ム。

〔得江文書〕(三月二十八日)
ノ條ニ收ム

六月二十九日⁽¹⁾ 征西將軍宮懷良親王、伊豫ヲ發シテ九州ニ赴カセラレ

ントス。是日、天皇、更ニ勅シテ、九州ノ事ヲ委任シ給フ。

〔五條文書〕△六、五、五八九、

〔阿蘇文書〕△六、五、五九〇、

〔忽那一族軍忠次第〕

六月二十九日⁽²⁾ 是ヨリ先、二日、仁木賴章、丹波官軍ノ和久城ヲ攻メ、是
日、之ヲ降ス。尋デ、七月四日、雀部城ヲ陥イル。

〔久下文書〕(丹波水上郡)
上竹田村 △六、五、五六三、

久下重基
和久城
雀部城

久下彌五郎重基申、今年⁽²⁾ 曆應 六月二日、和久城(丹波天田郡) 御發向之御共仕、一族相共於
大手攻口構高箭倉、至于同晦日、晝夜抽軍忠之刻、御敵悉降參之間、同日雀部城(天田郡)
御發向御共仕、大手東尾構役所、致合戰之處、同七月四日、寅刻、令没落候、然者爲後證、
可賜御判之由相存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、(曆應二年七月日)
附仁木賴章證判

〔註〕 延元二年七月二十六日、延元四年三月十八日條參照。

七月五日 新田左馬助義氏等、石見市山城ヲ攻メ、尋デ、十二日、木村山
城ニ據リテ足利黨ノ小笠原長氏等ト戰フ。

〔庵原文書〕(石見)
△六、五、五九三、

小笠原貞
宗
新田左馬
助

石見國河本郷一方地頭小笠原信濃守(貞宗)代武田彌三郎入道申、
右去七月五日、市山城(石見邑智郡) 御敵新田左馬助(義氏)、福屋孫太郎高津余二(長幸)、津野

延元四年(曆應二年)

九四三

木村山城

神主長瀬八郎以下打寄之間、爲後局同七日小笠原又太郎(長氏)相共馳向之時、御敵引退木村山(石見通)構城、同十二日打寄彼城、擲於搦手土屋彦太郎相共致散々合戰、津野神主手物源三打取畢、則頸御見知之上者、爲後證欲預御一見狀、仍狀如件。

曆應二年八月廿日

承了(花押)

(註) 新田左馬助三河遠江方面ニ活動セル事、延元元年四月八日、二十日、六月八日、二十八日、八月十二日、九月十三日ノ條ニ收ム。又石見豊田城ヲ救援スル事、明年八月十八日條ニ收ム。

七月十三日 新田金谷經氏ノ據レリト思ハル、播磨山田丹生寺城ノ官軍ヲ攻撃スル爲、石塔某、大將軍トシテ發行ス。是日、同國志染ニ軍ヲ集ム。(島津文書本^{色川}三^{八月二十日}ノ條ニ收ム)
八月十六日 後醍醐天皇、吉野ニ崩ジ給フ。前夜、後村上天皇、踐祚シ給フ。諸國官軍ニ遺勅アリ。就中、義助ニハ他ニ異ナリテ優渥ナリ。

〔神皇正統記〕^六

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける、芳野の宮には本の延

年號區々
タリ

崩御

元の號なれば、國々も思ひの號なり、もろこしにはかゝるためし多けれど、此國には例なし、されど四年にもなりぬるにや、大日本島根は本よりの皇都なり、内侍所、神聖も芳野におはしませば、いづくか都にあらざるべき、さても八月の十日、あまり六日にや、秋霧(あきぎり)におかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし、寢が中なる夢の世、今にはじめぬならひとは知りながら、かすかす目の前なる心ちして、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへとゞこほりぬ、昔仲尼は獲麟(くわくりん)に筆を絶つとあれば、爰にてとゞまりたく侍れど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申しのべて、素意の末をあらはさまほしくて、しひてしるしつけ侍るなり、かねて時をもさとらしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば左大臣の第へうつし奉られて、三種の神器をつたへ申さる、後の號をば仰のまゝにて、後醍醐天皇と申す、天下を治め給ふ事二十一年、五十二歳おましゝき。

〔五條文書〕^一

(筑後) △六、五、六五〇。

自去頃依有御惱事、御讓國于陸奥親王(義良親王)了、不違日來之軍忠、可達叡旨、縱雖有不慮御事、深被憑思、食候上者、令勇官軍等、殊可廻朝敵、追罰之籌策、於當山者、云要害云、祇候輩、更不可有子細、存其旨、可下知軍勢等、給者、天氣如此、仍執達如件。

延元四年(曆應二年)

九四五

五條頼元
ヘノ遺勅

八月十五日

右中將實躬

謹上 勘解由次官殿

〔結城文書（松平伯）△六、五、六五〇、

附本〕

道忠（結城）々節之次第、異他之處、不相替勵其忠之由、被開食之條、尤以神妙、其境事不遲々之様、運籌策、急速可被發向京都之由、天氣所候也、仍執達如件、

延元四年八月十五日

左中辨（花押）

結城大藏（親體）大輔館

〔註〕新田氏ニモ是ニ似タル遺勅下リシナルベシ、

〔參考太平記〕卷第二 後醍醐天皇崩御事

南朝ノ年號、延元三年（天正本作四年、爲得、後醍醐帝崩年月、諸書有異同、詳註下）八月九日ヨリ、吉野主上御不豫ノ御事

有ケルカ、次第ニ重ラセ給フ、醫王善逝ノ誓約モ、祈ルニ其驗ナク、耆婆扁鵲カ靈藥

モ、施スニ其驗オハシマサス、玉體日々ニ消テ、晏駕ノ期遠カラジト、見ヘサセ給ヒ

ケレハ、大塔忠雲僧正（中院贈左大臣光忠子也）御枕ニ近ツキ奉リテ、（天正本云、同十二日夜ニ入テ、忠雲御枕ニ近ツキ、云々）涙ヲ

押ヘテ申サレケルハ、神路山ノ花再開ル春ヲ待、石清水ノ流途ニ澄ヘキ時アラハ、

サリトモ佛神三寶モ、捨進ラセラル、事ハヨモ候ハシトコソ存候ツルニ、御脈已

結城親朝
ヘノ遺勅

御不豫

御遺勅

義助ガ忠
功ヲ賞セ

崩御

ニ變ラセ給ヒテ候由、典藥頭驚申候ヘハ、今ハ偏ニ十善ノ天位ヲ捨テ、三明ノ覺路ニ赴セ給フヘキ御事ヲノミ、思召定ラレ候ヘシ、サテモ最期ノ一念ニ依テ、三界ニ生ヲ引ト、經文ニ説レテ候ヘハ、萬歳ノ後ノ御事萬叡慮ニ懸リ候ハン事ヲハ、悉仰置レ候テ、後生善所ノ望ヲノミ、叡心ニ懸ラレ候ヘシト申サレケレハ、主上苦ケナル御息ヲ吐セ給ヒテ、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、是如來ノ金言ニシテ、平生朕カ心ニ有シ事ナレハ、秦穆公カ三良ヲ埋ミ、始皇帝ノ寶玉ヲ隨ヘシ事、一モ朕カ心ニ取ス、只生々世々ノ妄念トモ成ヘキハ、朝敵ヲ悉亡シテ、四海ヲ泰平ナラシメント思フ計ナリ、朕即早世ノ後ハ、第七宮ヲ（北條家、金勝院、西源院、南都本、作三宮、爲得、天子ノ位ニ即奉リ、賢士忠臣事ヲ圖リ、義助（大日本史料、義助ノ上ニ義貞ヲ入ル、）カ忠功ヲ賞シテ、子孫不義ノ行ナクハ、股肱臣トシテ、天下ヲ鎮ヘシ、是ヲ思フ故ニ、玉骨ハ縱南山ノ苔ニ埋ルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ、若命ヲ背、義ヲ輕セハ、君モ繼體ノ君ニ非ス、臣モ忠烈ノ臣ニ非シト、委細ニ論言ヲ遺サレテ、左御手ニ、法華經ノ五卷ヲ持セ給ヒ、右ノ御手ニハ、御劔ヲ按シテ、八月十六日丑刻ニ（北條家、西源院、南都本、作三寅刻、）遂ニ崩御ナリニケリ、（毛利家、北條家、西源院、南都、天正本云、年五十二、）悲カナ、北辰位高シテ、百官星ノ如クニ列トイヘトモ、九泉ノ旅路ニハ、供奉仕ル臣一人モナシ、奈何セン、南山地僻ニシテ、萬卒雲ノ如クニ集

延元四年（曆應二年）

九四七

北向ノ陵

吉水法印
宗信

ルトイヘトモ、無常ノ敵來ルヲハ、禦キ止ムル兵更ニナシ、只中流ニ船ヲ覆シテ、一
 瓠ノ浪ニ漂ヒ、暗夜ニ燈滅テ、五更ノ雨ニ向フカ如シ、葬禮ノ御事、兼テ遺勅有シカ
 ハ、御終焉ノ御形ヲ改ス、棺槨ヲ厚クシ、御座ヲ正シテ、吉野山麓、藏王堂ノ良ナル、林
 ノ奥ニ圓丘ヲ高ク築テ、北向ニ葬奉ル、
 寂寞タル空山ノ裏、鳥啼日已ニ暮ヌ、土墳數尺ノ草、一徑涙盡テ愁イマタ盡ス、舊臣
 后妃、泣々鼎湖ノ雲ヲ瞻望シテ、恨ヲ天邊ノ月ニ添、霸陵ノ風ニ夙夜シテ、別ヲ夢裏
 ノ花ニ慕フ、哀ナリシ御事ナリ、天下久シク亂ニ向フ事ハ、末法ノ風俗ナレハ、誓言
 ニ足ズ、延喜天曆ヨリ以來、先帝程ノ聖主神武ノ君ハイマタオハシマサ、リシカ
 ハ、何トナクトモ、聖徳一タヒ開テ、拜趨忠功ノ望ヲ達セヌ事ハアラシト、人皆憑ヲ
 ナシケルカ、君ノ崩御ナリヌルヲ見進ラセテ、今ハ御裳濯河ノ流ノ末モ絶ハテ、筑
 波山ノ蔭ニ寄人モ無テ、天下皆魔魅ノ掌握ニ墮ル世ニ成ンスラント、アチキナク
 覺ケレハ、多年著纏進ラセシ卿相雲、客或ハ東海ノ波ヲ蹈テ、仲連カ跡ヲ尋、或ハ南
 山ノ歌ヲ唱テ、甯戚カ行ヲ學ハント、思思ニ身ノ隱家ヲソ求給ヒケル、爰ニ吉野執
 行吉水法印宗信、潘ニ此有様ヲ傳聞テ、急參内シテ申ケルハ、先帝崩御ノ刻、遺勅ヲ
 遺サレ、第七宮御位ニ即進ラセ、敵追討ノ御本意ヲ遂ラルヘシト、諸卿親綸言ヲ含

命ヲ輕ン
ズル官軍
ヲ數フ

新田義興
新田義宗
脇屋義助
脇屋義治

新田ノ一
族都合四
百餘人々
他家人々

セ給ヒシ事ナリ、イマタ日ヲ經サルニ、退散隱遁ノ御企有ト承及候コソ、心得カタ
 ク存候ヘ、異國ノ例ヲ以、吾朝ノ今ヲ計候ニ、文王草昧ノ主トシテ、武王周業ヲ起シ、
 高祖崩シ給ヒテ後、孝惠漢代ヲ保候ハヌヤ、今一人萬歳ヲ早シ給フトモ、舊勞ノ輩
 其功ヲ捨テ、敵ニ降ント思フ者ハ有ヘカラス、就中世ノ危ヲ見テ、彌命ヲ輕セン官
 軍ヲ數フルニ、先上野國ニ新田左中將義貞次男北條家、金勝院、西源院、天正本、作長男、非也、義興者義顯弟也、左兵衛佐
 義興、武藏國ニ其家嫡左少將義宗北條家、西源院、南都、作左中將、非也、越前國ニ西源院本作、越後、非也、脇屋刑部卿義
 助、同子息左衛門佐義治左、天正、本作、右、此外江田、大館西源院本作、大野、恐非也、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃
 井金勝院本不載、額田、一井、金谷、堤、青龍寺本文此下有、青龍寺三字、按、諸本無、青龍寺、氏、蓋青龍寺三字重複、爲、青龍寺、故刊之、小守澤毛利家、山名桃井、
 西源院、南都、天正本、載、大井田、天正本、又載、堀口、石堂、吉良、岩松、一族都合四百餘人、國々ニ隱謀シ、所々ニ楯籠ル、造次ニ
 モ忠戰ヲ計スト云事ナシ、他家ノ輩ニハ、筑紫ニ菊池、松浦、鬼八郎天正本云、志佐、鬼八郎、云々、草野、
 山鹿、土肥、赤星、四國ニハ土居、得能、江田金勝院本作、河田、天正本作、合田、羽床天正本載、淡路ニ、淡路字、阿間、志知西源院本作、斯波、金勝院本作、志地、安藝ニ有井西源院本作、有元、天正本作、熊谷、石見ニハ三角入道、合四郎天正本、
 西源院本自、江田、至此、皆爲、安藝人、金勝院本不載、有井、直載、三隅、出雲、伯耆ニ、長年カ一族共天正本載、
 江合四郎、共爲、安藝人、按、三隅等實爲、石見人、蓋誤漏、石見字、手、出雲、伯耆ニ、長年カ一族共天正本載、
 山、富士、備後ニハ、櫻山天正本載、三川、尻肥後守、備前ニ今木、大富、和田、兒島西源院本、載、三時越、播磨ニ吉川、毛利家本、
 天正本載、河内ニ和田、楠、橋本、福塚、大和ニ三輪、西阿今川家、天正、本、作、西河、眞木、寶珠丸天正本云、伊賀、

延元四年(曆應二年)

根尾入道

義心金石ノ如シ

萬機親房ノ計ヒト洞院實世、奏諸事ヲ執

族、伊勢ニハ、九紀伊國ニ、湯淺、山本、井遠三郎、井遠、金勝院本作「伊達」、西源院本作「田邊別當」、天正本載「野上、山東、志貴、生地、牲川」又云、熊野ニハ、田邊別當云々、

加藤太郎、西源院本不出、金勝院本爲「遠江人」、遠江ニハ、井伊介、美濃ニ根尾入道、天正本載「慶庭」、石谷、落合、尾張ニ熱田

大宮司、天正本載「越前ニハ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、載「瓜生川島、金勝院本又有「深町」一黨、小國、金勝院本云、越後國ニハ、池、

信濃守、云々、池、風間、彌津、越中守、太田、信濃守、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、又載「河内、而無「小國」字、小國以下作「越後人」、天正本云、近江ニハ、儀儀、高山、野村、

熊谷、山徒ニハ南岸圓宗院、天正本載「妙光坊妙觀院」、此外泛々ノ輩ハ數ルニ違アラヌ、皆義心金石

ノ如クニシテ、一度モ變セヌ者共ナリ、身不肖ニ候ヘトモ、宗信角テ候ハン程ハ、當

山ニ於テ又何ノ御怖畏カ候ヘキ、何様先御遺勅ニ任テ、繼續ノ君ヲ御位ニ即進ラ

セ、國々ヘ給旨ヲ成下サレ候ヘカシト申ケレハ、諸卿皆實モト思ハレケル處ニ、又

楠帶刀、正行和泉守、二千餘騎ニテ馳參リ、皇居ヲ守護シ奉リテ、誠ニ他事ナキ體

ニ見ヘケレハ、人々皆退散ノ思ヲ翻シテ、山中ハ無爲ニ成ニケリ、

〔參考太平記〕卷第二十一 因遺勅被成給旨、附義助攻落黑丸城事

同十一月五日、南朝ノ群臣相議シテ、先帝ニ尊號ヲ獻ル、御在位ノ間、風教多クハ延

喜ノ聖代ヲ追レシカハ、尤其寄有トテ、後醍醐天皇ト設シ奉ル、新帝幼主ニテ御座

アル上、君崩シ給ヒタル後、百官冢宰ニ任テ、三年政ヲ聽召レヌ事ナレハ、萬機悉北

畠大納言ノ、天正本作「中納言」、按「關城書裏書」、延元三年、親房歸「常陸」、計ヒトシテ、洞院左衛門佐實

先ツ義助成ナル

山田丹生寺ノ官軍ヲ討ツ

世、佐當、作四條中納言隆資卿二人、專諸事ヲ執奏セラル、同十二月、今川家、毛利家、北條家、

二月十七日、先北國ニアル脇屋刑部卿義助朝臣ノ方ヘ給旨ヲ成レ、先帝御遺勅他ニ

異ナル上ハ、故義貞ノ例ニ易ラス、官軍恩賞以下ノ事相計ヒテ、奏聞ヲ經ヘキノ由、

宣下セラル、其外筑紫ノ征西將軍宮、按「李花集」、中務卿懷良、號「九州宮」、遠江井伊城ニ御座アル妙法院

宗良、奥州新國司顯信卿ノ方ヘモ、舊主遺勅ニ任セテ、殊ニ忠戰ヲ致サルヘキノ由、

給旨ヲソ下サレケル、下文ハ明年七月十日、一日ノ條ニ收ム

八月二十日、丹生寺城ヲ攻撃スル爲、石塔某ノ率キル足利軍、播磨ノ男

神山・押部神澤城等ニ馳向ヒ、是日、志武禮ニ官軍ト戰ヒ、同日、又、山田

城山ノ詰城ニ戰フ。尋テ、赤松則祐等ノ足利軍、淡河・岩峯三田城・檀谷城

等ニ戰フ。十月九日、山田城攻撃尙續ク。

〔島津文書色川〕三、△、六、五、六、三、九

島津周防三郎左衛門尉忠兼軍忠事

播磨國爲山田丹生寺御敵對治、大將軍御發向之間、今年七月十三日馳參志染、美、

軍陣、同八月四日馳向男神山、明、石同十三日發向押部、明、石神澤城、同廿日於志武禮

〔美、〕陣合戰、同廿九日赤松律師坊則祐、相共淡河、美、岩峯三田城、美、津田村、美、九月

延元四年〔曆應二年〕 九五二

八日於榎谷城(明石郡)數刻合戰之條當日大將軍赤松律師坊河原二郎等同所合戰之間令見知者也其後于今不罷去山田軍陣致忠節之上者可賜御證判之由可有御披露候恐惶謹言(曆應二年十月九日附某證判)

〔東大寺文書〕

第二回 △六、五、六、三九

東大寺領播磨國大部庄預所禪宗堯賢申今年八月十三日發向押部神澤左衛門尉之城付御著到於西尾河原面警固仕同廿日馳向志武禮峰致合戰之同日追落山田城山(明石郡)之凶徒即至于詰城麓致合戰之忠次第釜谷新左衛門尉中村四郎同一族等同所合戰之間令存知者也然者早爲後證賜御判可備龜鏡之由相存候以此旨可有御披露候恐惶謹言(曆應二年十月廿八日附石塔某ノ證判)

山田城山ノ官軍ヲ追フ詰城攻撃

東大寺御領播磨國大部庄雜掌僧堯賢謹言上(中略)

右當庄者(中略)雖然近年之儀御敵之城令散在于國中之間察時儀堯賢馳向于所々之城抽涯分軍忠之條去年(曆應二年)十月廿八日大將軍御一見狀分明也案文備右矣今年又軍忠及度々八月五日以後兩度參于著到畢雖爲非職之身於公方具申入此等子細之時者爭無御感乎而號守護使(不知名)率數多人勢今日(廿日)亂入預所敷地右近

尉之住宅奪取供米已下於向後者不濟寺家之年貢每事可隨守護方下知之旨可出請文之由及嗽々譴責之間沙汰人百姓等少々既棄私宅而令逃散畢仍爲被經急速御沙汰粗勒事由言上如件(曆應三年六月廿日附)

〔註〕

去年九月二十四日明年二月十七日條參照。東大寺文書ニ見ユル釜谷某

ハ金谷氏ナルカノ疑ヒアレドモ別ノ氏ナルベシ。釜谷ナル人△六、一七、八

ノ〔古文書〕ニモアリテ赤松氏ノ家人ト見ユ。

九月十五日 越前路野寺城・二岡城ノ新田軍、淺宇津城ヲ攻ムル足利軍ト戰フ。

〔得江文書〕(三月二十八日ノ條ニ收ム)

十一月十五日 尊氏、上野新田莊八木沼郷以下ノ地ヲ義貞追善料所トシテ長樂寺ニ寄進ス。義貞ヲ安養寺殿ト稱ス。

〔長樂寺文書〕

世良田長樂寺領所目錄事(中略全文ハ貞治四年七月五日ノ條ニ收ム)

一所 八木沼一方 曆應二年十一月十五日安養寺殿追善料所

〔長樂寺文書〕

延元四年(曆應二年)

將軍家御判(中略)

世良田長樂寺領除不□□知行所可被載御判所領等事、

(中略、全文ハ明德三年八月十一日ノ條ニ收ム)

義貞追善料所

以八木沼郷以下散在之地、爲義貞追善料所、將軍家御寄附御判、中略

十二月十日 越前ノ新田軍、南江守城ノ敵ヲ攻ム。尋デ二十日、足利軍、又、二岡城ノ新田軍ヲ攻ム。(得江文書)(三月二十八日ノ條ニ收ム)

延元五年・興國元年(四月二十一日改)(曆應三年) 庚辰 三〇〇〇

正月二十四日 是ヨリ先、去年十一月二十四日、細川定禪、土佐大高坂城ノ官軍ヲ攻メントシ、堅田・津野・三宮・佐竹等ノ人々ニ後攻ノ官軍ヲ防ガシム。同十二月三日、之ガ攻撃ヲ開始シ、二十八日、西城戸ニ攻メ入り戰フ。是日、新田綿打入道等、花園宮ヲ奉ジテ、大高坂城ノ救援ニ赴キ、明日、潮江山ニ激戰ス。

〔蠢簡集拾遺〕(土佐) △、六、五、八一—二、

後攻ノ官軍ヲ防ガシム

近日所令發向大高坂城(土佐土)也、津野(家)三宮(頼)佐竹人々相共率一族等、可被防後攻凶徒等之狀如件(曆應二年十一月二十四日附)(細川定禪ヨリ方田又三郎宛)

〔蠢簡集拾遺〕(土佐) △、六、五、八二—六、

大高坂城ノ西ノ入ルニ

堅田小三郎經貞申軍忠事、去年(曆應)十二月三日、奉屬于大將軍御手、押寄大高坂城、

(土佐)於西大手櫓、向矢倉致日夜合戰之處、同廿八日、西之城戸口責入、致散々合戰之處、經貞被疵、弓手ヘニサキ被射貫畢、此等次第守護代高橋七郎兵衛入道見知之上者、爲後證可賜御證判候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(曆應三年正月十日附、某ノ證判)

〔佐伯杏庵藏古文書〕(南山巡狩錄) △、六、五、八二—七、

堅田小三郎經貞申軍忠事、去年(曆應)十二月三日、奉屬于御手、押寄大高坂城於西大手櫓、向矢倉連日致軍忠之處、今月廿四日、爲彼城後攻、凶徒花園宮、新田綿打入道殿、金澤左近將監、土左權守、近藤四郎左衛門尉、和倉孫四郎、有井又三郎、河間左衛門次郎、佐河四郎左衛門入道、度賀野又太郎入道、大野中村名主庄官以下凶徒等、數千騎寄來、陣取于潮江山之間、同廿五日、奉屬御手、致散々合戰、數十人誅伐之時、近藤四郎左衛門尉、若黨淺野孫九郎分取仕畢、此等次第、吉良中務尉、佐竹一族彦三郎殿見知之上者、爲後證可賜御證判候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應三年正月廿八日

佐伯經貞

進上 御奉行(所股カ)

承了(花押)

延元五年・興國元年(曆應三年)

九五五

花園宮、新田綿打入道等ノ官軍來リ、江ノ山ニ陣取アル

内藤孫七、河間彌次郎依令見知、曆應三年四月賜御證判、

〔廣峯系圖〕（播磨） △六、六、四七、

播磨國御家人廣峯又太郎入道子息五郎次郎長種（號廣峯大別當兵部大輔）申、

山田丹生寺城ノ追

右攝州山田丹生寺凶徒等爲御退治、御追城御發向之間御共仕、自最初於城山之城

並柏尾谷上、數月致宿直警固畢、就中三月廿六日、鼓筒御合戰之間抽軍忠條、岩崎新

兵衛尉同所合戰之間令見知畢、四月九日、谷上御合戰之時致忠之條、秋米助六入道

致見知者也、將又六月五日、馳向多田源藏人城、捨身命致合戰、切破逆茂木、越堀壁責

入城内、追落御敵畢、次責上同上城並、方岸城、追落御敵等於追城、燒拂城内役所者

也、此條肥塚六郎、芝原又五郎、同所合戰之間令見知畢、七月二日、御合戰之時、切破逆

茂木越壁、致軍忠之條、同所合戰之間、内藤孫七、河間孫次郎令存知者也、然早賜御判、

爲備末代教鏡、言上如件、（曆應三年七月日附左馬頭ノ證判）

〔佐藤文書〕（伊勢） △六、九、九一九、

陸奥國信夫佐藤十郎左衛門入道性妙謹言上、（中略）

右性妙雖爲不肖身、去建武二年、斯波奥州爲當國前宰吏顯家卿追討御發向之時、爲

御方子息一族等致軍忠以來、奥州所々、勢州小屋松、雍州八幡山、攝州天王寺、安部野、

追城

湊河、花熊、生田森、摩耶山、攝州山田生、丹生寺、谷上、諫方尾以下合戰、性妙代子息彦左衛門尉行清、并若黨等被疵之條、所見分明也、（下略貞和二年四月日附）
〔註〕 去年八月二十日條參照。今年七月二日、正平六年九月七日條參照。
三月七日 足利黨吉見賴隆、得江賴員等ヲ率テ、新田軍ノ越前助田城ヲ攻ム。翌八日、芝原口ニ陣ヲ取り、十四日、相槻渡ニ戰フ。

〔得江文書〕 △六、六、七四、

得江九郎賴員申越前國軍忠事

一今年（曆應三年）三月七日、奉屬吉見十郎三郎（賴隆）殿御手、押寄助田城、（今立郡ニ助生田村アリ）致合戰忠節之條、長井藤内左衛門尉見知訖、

一同八日、馳向芝原口、至于同十三日、令警固彼陣、翌日十四日、於相槻渡致戰功、追歸

凶徒次第岡部六郎兵衛尉同所合戰之間、所見及也、

一同七月十一日、西方寺城凶徒等寄來木田城之間、馳向春日宮前、賴員致軍忠、追歸

御敵之條、土田十郎右衛門尉見知訖、然者早下賜御判備後證、彌爲致軍功、恐々言

上如件、

曆應三年七月日

延元四年・興國元年（曆應三年）

吉見賴隆助田城

芝原口相槻渡

西方寺城木田城

(吉見顯勝) 承了(花押)

三月十二日 官軍新田遠江禪師、深江孫次郎種長ト共ニ、筑前一貴寺山ニ據ル。是日、重富正高・松浦保等、攻メテ之ヲ陷イル。

〔重富文書〕乾(筑前) △六、六、七六

深江孫次郎種長、燒拂深江、片山村(並ニ怡土郡)楯籠一貴寺山(怡土郡)之間、不相待宰府御左右、重富兵衛四郎正高馳向彼山、今月十二日辰時責落凶徒候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(曆應三年三月日) (附少貳額尙證判)

〔兒玉韞採集文書〕中村家古文書 (筑前) △六、六、七六

號新田禪師之仁、并原田孫次郎以下凶徒等、楯籠筑前國一貴寺之所、抽軍忠追落凶徒條尤神妙、可注進京都也、仍執達如件、

曆應三年三月十九日

(一色顯長) 沙彌(花押)

松浦中村彌五郎殿

〔重富文書〕乾(由比重富家藏感錄記) △六、六、七七 深江孫次郎種長者、筑前州治土郡高磯

城主原田侯之族也、方光嚴帝曆應之初、武威擅於西州、不從太宰都督府之命、故有是戰、放兵燹焚筑前伊都郡深江片山邑民家、而據一貴山、一貴山上古祠天目一箇命、故

深江種長一貴寺山

新田禪師

原田侯

名焉、後爲佛場、號夷巍山一貴寺、

重富左兵衛尉正高者、筑後守正守八代孫也、正守始領筑前志摩早良兩郡諸邑、爲由比重富之高祖、正守子正光、正光子國光、國光子正良、正良子良高、良高子良種、良種子正種、正種弟正繼、正繼子爲正高、正高子千代房丸、千代房丸無嗣、良種弟良遠之後相續、爲長子之家督、即今九郎介正治之家是也、總之迨正治者、是筑後守正守廿二代孫也、

〔註〕 新田遠江禪師、字佐ヨリ、筑前ニ打出ヅル事、延元二年十月十一日條ニ收ム、又六月八日、九月二十三日條參照。

三月二十六日 新田金谷經氏ノ率キル官軍、赤松則村ト攝津鼓筒ニ戰フ。尋デ、四月九日、又、谷上ニ戰フ。

〔廣峯系圖〕〔廣峯神社文書〕(何レモ二月十日條ニ收ム)

六月二日 細川定禪、先ニ新田綿打入道等ト戰ヘル堅田某ニ土佐國衛領時久名ヲ預ケテ、兵糧料所ニ充テシム。

〔蠶簡集拾遺〕(土佐) △六、六、一七二、(曆應三年六月二日附、細川定禪力ヨリ堅田又三郎宛ノモ、ノ一通、曆應三年六月九日附、左近將監實正ヨリ時久名沙汰人宛ノモノ一通)

延元五年・興國元年(曆應三年)

(註) 正月二十四日條參照。

六月五日 赤松則村、新田金谷經氏ノ詰城タル攝津鳥渡・石柱本城ノ攻撃ヲ開始シ、多田源藏人・吉川八郎左衛門ノ居城及上城並縁方岸城ヲ陥イル。尋デ、十日、十一日、二十一日、岩鼻要害ヲ攻ム。官軍、石柱城ニ退ク。

〔後藤文書〕〔廣峯文書〕〔廣峯神社文書〕〔廣峯系圖〕(何レモ二月十七日ノ條ニ收ム) (東

大寺文書)(去年八月二十日ノ條ニ收ム)

〔東大寺文書〕(天和) △六六、一七九

五日以後、一兩度著到付て候了、理不盡事に候、何様逃房山田へ被向候間、委細

治定之時、重可被申候、

今日十八日御狀、同廿日到來、委細拜見仕了、

抑當庄御著到事、五日合戰著到事、無相違之處、其後無沙汰候とて、可被入給主由催
促使今日廿日入部、(下略、六月廿日附音、阿ヨリ禪定御房宛)

(註) 去年八月二十日、今年二月十七日、三月二十六日條參照。

六月八日 小貳頼尙、菊池武敏等ノ官軍ヲ撃タンガ爲、肥後ニ赴カント

山田

五日合戰

ス。因テ、筑後頼貞ヲ遣シテ筑前原田莊ヲ警固シ、新田遠江禪師ト聯合セル深江種長等ノ進出ニ備ヘシム。

〔兒玉韞採集文書〕

中村家古文書 (筑前) △六六、一八〇。

菊池武敏已下凶徒爲追伐、御發向肥後國也、爰深江孫次郎種長等伺彼陣、可打出原田庄(御笠)之間、依有其聞、差走筑後小次郎頼貞、依屬彼手可被致在庄警固、於忠節之段々(者カ)可被注進候、仍執達如件、

曆應三年六月八日

太宰少貳(頼尙)(花押)

中村彌五郎殿

(註) 三月十二日條參照。

六月二十二日 上杉憲顯、足利幕府ノ命ヲ奉ジテ、上野長樂寺法輝ヲシテ、臨時祈禱ヲナサシム。

〔長樂寺文書〕(上野)

臨時御祈禱事、殊可被抽丹誠之狀、依仰執達如件、

曆應三年六月廿二日

民部大輔(上杉憲顯)(花押)

世良田長樂寺長老

延元五年・興國元年(曆應三年)

九六三

深江種長

中村保

大徳王寺
城

六月二十四日 先ニ新田義興等ト共ニ東下セル北條時行、信濃大徳王寺城ニ據リテ兵ヲ擧グ。諏訪頼繼、之ヲ援ク。尋テ、守護小笠原貞宗、來リ攻メ、十月二十二日、城陷ル。

〔守矢文書〕（信濃） △六六、一九九

六月二十七日 新田義宗、南保重貞ヲシテ、養父齋藤實利ノ遺領越後奥山莊内黒河條地頭職ヲ安堵セシム。

〔色部文書〕（羽前） △六六、二〇七

南保藤藏人重貞申、養父長井福阿齋藤三郎實利法師法名圓心、遺領、越後國奥山庄内黒河條地頭職事、

右任建武貳年四月廿七日、圓心并同妻平氏等連判讓狀、不可有領掌相違之狀如件

興國元年六月廿七日

（新田義宗）
武藏守（花押）(50)

〔註〕 延元二年三月十四日、七月二十六日條參照。本年八月二十日條參照。

七月二日 赤松則村、新田金谷經氏ノ詰城タル石柱城ヲ攻ム。石柱城、遂ニ陷ル。

〔後藤文書〕〔廣峯文書〕〔廣峯神社文書〕〔廣峯系圖〕（何レモ二月十七日ノ條ニ收ム）

新田義宗
ノ安堵狀

六五 南保重貞宛新田義宗公安堵狀（色部文書）

南保藤藏人重貞申、養父長井福阿齋藤三郎實利法師圓心、遺領、越後國奥山庄内黒河條地頭職事、右任建武貳年四月廿七日、圓心并同妻平氏等連判讓狀、不可有領掌相違之狀如件。興國元年六月廿七日。

高經、黒丸
城ニアリ
義助、先
帝ノ遺勅
ニ感シ、
活ニ激シ
始ス

越前、能登
七部ノ
前部ノ
十二箇
ヲ攻メ、
略ス

七月十一日 是頃、越前ニ於ケル義助ノ勢威再ビ振ヒ、足利高經ノ黒丸城以下多數ノ城砦ヲ攻略ス。高經、加賀ニ走ル。是日、西方寺城ノ新田軍、木田城ニ攻寄ス。賊黨吉見頼隆等、春日社前ニ邀ヘ戰フ。

〔参考太平記〕

卷第二 (上文ハ去年八月十日ノ條ニ收ム)

義助ハ義貞討レシ後、勢微ナリトイヘト

モ、所々ノ城郭ニ軍勢ヲ籠置、サマテハ敵ニ挾メラレサリケレハ、何マテ角テモ有ヘキソ、城々ノ勢ヲ一ニ合テ、黒丸城ニ楯籠ラレタル、尾張守高經ヲ攻落サハヤト、評定有ケル處ニ、先帝崩御ノ御事ヲ承テ惘然タル事、暗夜ニ燈ヲ失ヘルカ如シ、サハ有ナカラ、御遺勅他ニ異ナル宣旨ノ忝サニ、忠義彌心肝ニ銘シケレハ、如何モシテ一戰ニ利ヲ得、南方伺候ノ人々ノ機ヲモ扶ハヤト、御國忌ノ御中陰ノ過ルヲ遅トソ相待ケル、此兩三年、越前城三十個所^{三十、金澤院本作三十二、天正本作四十一}、相交テ、合戰ノヤム日ナシ、中ニモ湊城トテ、北陸道七箇國ノ勢共カ^{西源院本云、加賀、能登、越中、越前、四箇國勢云々}、終ニ攻落サ、リシ城ハ、義助ノ若黨、畑六郎左衛門時能カ、纔二十三人ニテ籠タリシ平城ナリ、^{西源院、南都、天正本云、方二町ニ足サル平城ナリ、云々、天正本云、此年月能登加賀越中越前四箇國ノ勢ニ圍マレ、終ニ落ズト、ハイヘトモ、力サスカニ衰ケル、云々}、南帝御即位ノ初、元運圖ニ膺ル時ナルヘシ、諸卒同シク城ヲ出テ、一所ニ集リ、當國ノ朝敵ヲ平ク、他國ニ打越ヘキ由ヲ、大將義助ノ方ヨリ牒セラレケレハ、七月^{按、本文前段曰、延元三年八月、後醍醐帝崩、同十二月依遺勅、賜三輪旨於義助、由レ是見、之今所謂七月者爲延元四年}

延元五年・興國元年(曆應三年)

由良光氏
略ス

堀口氏政
十一城ヲ
攻略ス

義助十七
城ヲ攻略
ス

全官軍河
合庄ニ集

明矣、然後醍醐帝崩、實延元四年八月也、而本文誤作三年、然則延元四年七月、義助發兵越前之時、帝未崩焉、不當曰「因遺勅」也、論旨、太平記次序真可疑也、若必爲「帝崩後義助發兵、則所謂七月者、延元五年七月也、是北朝曆應三年也、然第二十二卷曰、曆應三年五月義助卒、云々、因而考之、非「曆應三年七月」亦明矣、今按、義助發兵者、三日ニ、今川蓋延元四年七月也、自「本文所謂帝崩後發兵者」而見之、前後年月差謬、詳註三十二卷、可合考、

毛利家本、畑六郎左衛門三百餘騎ニテ、湊城ヲ出テ、金津、長崎、河合、河口金勝院本、アラユル所ノ敵城十二箇所ヲ打落シテ、首ヲ斬事八百餘人金勝院本、女童三歳ノ嬰兒迄、殘サス是ヲ刺殺ス、同五日ニ由良越前守光氏金勝院本、五百餘騎ニテ西方寺城ヨリ出テ、和田、江守、波羅密、深町金勝院本、安居莊内ニ今川家、毛利家、西源院、天正本、作志居、金勝院本云、東郷ノ者、北莊ノ内キヒシク構タル、云々、而不レ、居、敵ノ嚴ク構タル、六箇所ノ城ヲ六、天正本作三、二日ニ攻落シ、則御方ノ勢ヲ入替テ、六箇所ノ城ヲ守ラシム、同五日按、西源院本作七、堀口兵部大輔氏政、大輔、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作少輔、鶴澤全勝院本作、穴間、河北、十一箇所ノ城ヲ、五日カ中ニ攻落シテ、降人千餘人ヲ引率シ、河合庄へ出合ル、總犬將脇屋刑部卿義助ハ、彌津、風間、瓜生、川島金勝院本、宇都宮、江戶、波多野カ勢金勝院、天正本、載深町、三千餘騎ノ將トシテ、國府ヨリ三手ニ分テ、織田、田中、荒神峯、安居渡城、十七箇所ヲ、三日三夜ニ攻落シテ、其城ノ大將七人虜リ、士卒五百餘人ヲ誅シテ、河合庄へ打出ラル、同十六日、四方ノ官軍一所ニ相集リテ六千餘騎、三方ヨリ黒丸ヲ相夾テ、毛利家、金勝院、天正本云、イマタ戰ハサルニ、河合孫五郎種經、孫、西源院本、

黒丸城ヲ
攻撃ス

義貞土地
不案内ニ
戦死セ

高經黒丸
城ヲ落チ
テ加賀ニ
退ク

降人ニ成テ畑ニ屬ス、其勢ヲ率シテ、夜半ニ足羽ノ乾ナル、金勝院本、小山ノ上ニ打上リテ、終夜城ノ四邊ヲ打廻リ、関ヲ作リ遠矢ヲ射懸テ、後陣ノ大勢集ラハ、一番ニ城へ攻入ント勢ヲ見セテ待明ス、爰ニ上木平九郎家光ハ、元ハ新田左中將ノ兵ニテ有シカ、近來將軍方ニ屬シテ、黒丸城ニ在ケルカ、大將尾張守高經ノ前ニ來テ申ケルハ、此城ハ先年新田殿ノ攻ラレシニ、不思議ノ御運ニ依テ、打勝セ給ヒシニ御習候テ、猶仔細アラシト思召候ハンニハ、疎ナル御計ヒニテ候ヘシ、其故ハ先年此所へ向候シ敵共、皆東國西國ノ兵ニテ、不知案内ニ候シ間、深田ニ馬ヲ馳コミ、塹溝ニ陥テ、遂ニ名將流矢ノ鏑ニ懸リ候キ、今ハ御方ニ候ツル者共カ、多ク敵ニ成テ候間、寄手モ城ノ案内ハ能存知候、其上畑六郎左衛門ト申テ、日本一ノ大力ノ剛者、命ヲ此城ニ向テ止ント思ヒ定テ向候ナル、恐クハ今時ノ御方ニ誰カ是ト牛角ノ合戦ヲシ候ヘキ、後攻モナキ平城ニ、名將ノ小勢ニテ御籠候テ、命ヲ失ハセ給ハン事、口惜カルヘキ御計ヒニテ候、只今夜中ニ、加賀國へ引退セ給テ、天正本云、富經介カ構タル那谷城ニ立籠給ヘ、云々、京都ノ御勢下向ノ時、力ヲ合セ兵ヲ集テ、却テ敵ヲ御對治候ハンニ、何ノ仔細カ候ヘキト申ケル、細川出羽守細川、金勝院本、作鹿草、鹿草兵庫助、淺倉西源院本作、淺倉彦三郎、而載、黒丸入道、齋藤北條家、金勝院、西源院、南都本、作齋藤三郎、天正本無、淺倉、等ニ至マテ、皆此議ニ同シケレハ、尾

延元五年・興國元年（曆應三年）

張守高經、五城ニ火ヲ懸テ、其光ヲ松明ニ成テ、夜ノ間ニ加賀國富樫カ城ヘ落給フ、
畑カ謀ヲ以テ、義助黒丸城ヲ落シテ、コソ、義貞ノ討レ給ヒシ會稽ノ恥ヲハ雪ケレ、

〔得江文書〕(三月八日ノ條ニ收ム)

〔註〕 八月二十日條參照。

七月十七日 一色範氏、筑後ノ新田遠江禪師・大城藤次、及ビ肥後ノ菊池
武敏等ノ官軍討伐ノ爲、筑後豊福原竝ニ竹野莊ニ發向ス。

〔大悲王院文書〕(筑前)

△六六、二三九

爲筑後肥後兩國凶徒退治所發向也、御祈禱事可被致精誠、仍執達如件

曆應三年七月十七日

(一色範氏ナルベシ)
沙彌判

(筑前志)
雷山衆徒中

〔武雄社文書〕(九月二十三日ノ條ニ收ム)

〔註〕 三月十二日、六月八日、九月二十三日條參照。

七月二十三日 月翁元規、上野長樂寺ニ住持ス。尋デ八月、眞如寺ニ移
リ、泥牛正參、之ニ替ル。

〔禪刹住持籍〕(山)

上野州世良田山長樂寺歷代

十五世月翁諱元規

副約翁、曆應三年庚辰七月廿三日入寺、歲六十五年、同年八月住京眞如、

康永元年壬午十一月五日寂、

〔黃龍十世錄〕

佛祖

眞如月翁和尚 月心首 △六、七、三七九

龍峯會裏獨秀穎、猶如臨濟接三聖、探頤諸方二十年、最念兩刹聊應請、眞如圓枕夢不成、
長樂鐘聲堪發省、小小叢林大作興、千楹萬指非微倖、不見風穴與楊岐、單丁寂寥道
益盛、舒卷晦明雖有時、由來雲月是心性、當機提三尺黑蛇、師僧皆喪身失命、忽然載廢
牧護歌、調入無聲誰解聽、打破鏡兮去何從、萬象森羅同輝映、紹開厥家代有人、應須坐
斷亘山頂、

又 元受藏主請

出千葉故家、爲一時僧傑、眼正而心空、才優而行潔、謂之一味平常、又見十分超軼、定慧
今均持、機用兮敏捷、三刹匡徒二十年、偏爲師僧碎窠窟、其量也綽然有餘、其守也確乎
不拔、有時枯木擁寒烟、有時光風拂霽月、有時敲破沙盆出太古希聲、有時提茗帶棒作
倚天照雪、任它萬別千差、信手拈來一截、頓增龍峯之巍峩、堪揚蘭溪之清徹、有抱負不
大用、而始終迥絕玷缺、所謂隱德報應、不身享而及子孫者、予於此翁亦說、

八月十八日 是ヨリ先、足利黨上野賴兼、石見官軍ノ豊田城ヲ攻ム。是
夜、新田左馬助義氏、日野邦光・三隅信性・高津長幸等ト共ニ豊田城ノ救

援ニ來ル。翌十九日、兩軍戰ヒテ、義氏等ノ救援軍退ク。同日、賴兼、高津城・稻積城ヲ攻ム。

〔吉川家付書〕

十四 經明御代

△六、五、七六一

吉河次郎三郎經明申軍忠事

右今月十三日、押寄石見國豐田城、内田工藤三郎構之合戰之時、致軍忠畢、此子細上野四郎殿御見知之上者、給御判欲備後證、仍言上如件、(曆應二年十月日附) (上野賴兼ノ證判)

〔益田家付書〕

六

△六、六、三〇七

(曆應參年八月廿七日附) (上野賴兼證判)

石見國御神本益田孫次郎藤原兼見申軍忠事、

右今年七月六日、爲追伐當國凶徒、大將軍御發向之間、令御共仕、於丸竹山御陣、致日夜警固畢、同八月十三日、押寄豐田城、及合田城、同十八日夜、日野左兵衛佐國光、高津與次長幸以下凶徒、爲後卷寄來之間、翌日、於大手致度々、追落畢、同日馳向高津城、於山手捨一命抽忠節、田御陣致警固忠切畢、如此所々軍忠之段、侍所松田左近將監令見知之上者、下略

〔益田家付書〕

六

(曆應四年二月日附) (御神本兼射軍忠狀)

(來年二月十八日) (日ノ條ニ收ム)

〔萩藩閱録〕

六十五 三井善兵衛

△六、六、三〇八

長門國御家人三井孫五郎藤原資基申軍忠事

右屬于御手、去七月十三日、令發向石州圓嶽取向陣、同八月十三日、押寄豐田郷、(美濃郡)工藤三郎城、致合戰之處、同十八日夜、爲彼城後卷、當國先國司日野宰相、新田左馬助、吉見八郎、高津與次、都野神主、周埵、福谷、三隅、入道以下凶徒等、以大勢寄來間、於山手致合戰、同十九日、於大手致合戰、同日高津城、(美濃郡ニ高津村アリ)致山手合戰畢、御見知上者、賜御證判、爲備龜鏡、謹言上如件、

曆應三年八月廿五日

承候畢判

〔萩藩閱録〕

四十五ノ二 三浦又右衛門

△六、六、三〇八

(曆應三年十月日附) (但馬權守弘員證判)

周防國仁保多々良兩庄一分先地頭平子孫太郎親重申軍忠事、自最初屬御手、去八月十八日、令發向于石州豐田城、小山陣取之處、御敵日野左兵衛佐、高津與次、今者號播磨權守豐田公藤三郎以下凶徒等、夜討寄來之間、捨身命致合戰、同十九日、自山手御敵追拂畢、其後豐田原取陣、致夜縮警固之處、同十月十五日夜、彼城内之凶徒悉責落畢、如此致忠勤之條、御見知之上者、下略

〔萩藩閱録〕

四十五ノ一 三浦又右衛門

△六、六、三〇九

延元五年・興國元年(曆應三年)

益田兼見
丸竹山陣
豐田致員
ノ城

圓嶽ノ陣
先國司日
野邦光馬
助攻ニ
來リテ
高津城合
戰

豐田城陷
落

圓瀧ノ陣
新田左馬助
河之陣
水道ヲ固
ム
豐田城ヲ
攻落ス
須子原陣

平子彦三郎重嗣軍忠事、去七月廿五日、差進周防國守護代土屋四郎左衛門尉定盛於石州之處、相副重嗣代官平子彌九郎時重、八月三日馳參大將軍左馬助殿御陣圓瀧、令警固所々役所、同十三日取卷豐田公藤三郎城之刻、重嗣相加弘員令發向、同十八日夜、丑刻、日野左兵衛佐新田左馬助、高津余次以下凶徒等、爲後卷致夜討之處、重嗣致隨分合戰追拂、生捕高津次郎三郎、則誅伐候畢、次取陣于豐田原經數日、取移隅河之陣、送兩月、致連々合戰、固水之通道抽夜措以下之忠、中間彌四郎被疵、十月十五日、攻落凶徒等、同廿三日、發向高津取陣于須子原、至于今致拔羣之軍忠候、此條若偽申候者、八幡大菩薩御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應三年十二月十二日

但馬權守弘員

進上 御奉行所

(註) 新田左馬助、石見市山城ヲ攻ムル事、去年七月五日條參照。明年二月十八日條參照。

八月二十日⁽¹⁾是ヨリ先、越前新田軍ノ勢威振ヘルヲ恐レ、足利方、諸將ヲ遣シテ之ヲ討ツ。八月一日、足利高經、吉見賴隆等ノ賊黨、新田軍ノ金津城・上野城ヲ陷イレ、三日、三國湊千手寺城ヲ陷イレ、十七日、黑丸城攻

撃ヲ開始シ、二十日、遂ニ之ヲ陷イル。

〔天野文書〕(前田侯爵本) △六六、二六七

天野安藝三郎遠政代石河藤左衛門尉賴景申軍忠事

金津城上野城陷落
千手寺城ヲ打破ル
黑丸城攻
府中陷落
妙法寺
大鹽城陷
松崎城妙法寺城陷
義助ノ據城陷ル

一今年^{曆應}八月一日、馳向越前國金津、上野、(鉾坂)致合戰忠節、追落凶徒之條、高田彦次郎同所合戰之間、令存知畢、
一同三日、同國三國湊押寄千手寺城大手、致合戰忠勤、打破城壘、散々令及大刀打之條、須賀準人允沼田與一、同所合戰之間、所令存知也、
一同自十七日、押寄黑丸城、日々致合戰、就中廿日於大手致合戰忠節、打破一木戶口、於二木戶被疵、右敗畢如此次第、高田彌次郎、土田安察房、同所合戰之間、令存知之上、金持三郎左衛門尉疵實見畢、
一同九月十二日、氏家岡取陣、同十三日、打入府中、追落凶徒、乙部兵衛三郎令存知畢、
一同十四日、妙法寺麓燒拂千伏存家、生捕一人召捕了、
一同廿二日夜半、押寄大鹽燒拂麓、令追落凶徒、翌日廿三日、松崎城妙法寺城、并楯籠脇屋^(原)平茸等燒拂、令對治凶徒條、木内下總權守、同所合戰之間、令存知畢、然早軍忠異他之上者、且被經御注進、且賜御判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

延元五年・興國元年(曆應三年)

曆應三年九月日

(新波高經)
承了(花押)

斯波高經

〔得江文書〕

△六、六、二六八

得江九郎頼員申越前國軍忠事

一今年曆應三年八月一日、奉屬大將吉見大藏大輔(頼隆)殿御手、馳向金津上野、先懸一陣

致合戰、令對治凶徒、則責落同所城、至于少蓮華宿、追落凶徒等、燒拂在所畢矣、

一同三日、押寄三國湊千手寺城、西面渡堀、越堀致戰功、攻落彼城了矣、

一同十七日、構向城於藤島内丸岡之處、自黑丸城凶徒打出之間、馳向一陣致合戰、追

籠御敵於城中、抽日々軍功、同廿日、押寄黑丸城大手、頼員不惜身命、攻戰之刻、中間

源四郎被疵、右足射疵、攻落彼城了矣、

右致每度軍忠之次第、軍奉行土田十郎右衛門尉令見知畢、然早下賜御證判、爲備

向後龜鏡、恐々言上如件、

曆應三年九月日

(吉見頼隆)
承了(花押)

〔得江文書〕

(曆應三年十一月日附、斯波高經殿) (九月二十三日)
(判及ビ給ド同ジキモノ今一通) (ノ條ニ收ム)

黑丸城陷落

千手寺城陷落

金津城上野城少蓮華宿

曆應三年九月日

(新波高經)
承了(花押)

斯波高經

〔得江文書〕

△六、六、二六八

得江九郎頼員申越前國軍忠事

一今年曆應三年八月一日、奉屬大將吉見大藏大輔(頼隆)殿御手、馳向金津上野、先懸一陣

致合戰、令對治凶徒、則責落同所城、至于少蓮華宿、追落凶徒等、燒拂在所畢矣、

一同三日、押寄三國湊千手寺城、西面渡堀、越堀致戰功、攻落彼城了矣、

一同十七日、構向城於藤島内丸岡之處、自黑丸城凶徒打出之間、馳向一陣致合戰、追

籠御敵於城中、抽日々軍功、同廿日、押寄黑丸城大手、頼員不惜身命、攻戰之刻、中間

源四郎被疵、右足射疵、攻落彼城了矣、

右致每度軍忠之次第、軍奉行土田十郎右衛門尉令見知畢、然早下賜御證判、爲備

向後龜鏡、恐々言上如件、

曆應三年九月日

(吉見頼隆)
承了(花押)

〔得江文書〕

(曆應三年十一月日附、斯波高經殿) (九月二十三日)
(判及ビ給ド同ジキモノ今一通) (ノ條ニ收ム)

〔參考太平記〕

卷第二 鹽治判官讒死事

北國ノ宮方類ニ起テ、尾張守黒丸城ヲ落サレヌト聞ヘケレハ、京都以外ニ周章シ

テ、援兵ヲ下サルヘシト評定アリ、天正本云、曆應三年二月ニ、四方ノ大將ヲ備サ、ル、云々、此説可レ疑、詳註三十二卷ニ可レ合考、則四方ノ大將

ヲ定テ、其國々ヘ勢ヲソ添ラレケル、高上野介師治、天正本作、師重、恐非也、系圖作、師春、師氏子也、下做之、大手ノ大

將トシテ、加賀能登、越中ノ勢ヲ率シ、加賀國ヲ經テ、加賀、今川家、毛利家、西源院、天正本、作、甲斐、宮腰ヨリ向

ハル、土岐彈正少弼頼遠ハ、搦手ノ大將トシテ、美濃尾張ノ勢ヲ率シ、穴間郡上ヲ經

テ、郡、金勝院、西源院本、作、求、大野郡ヘ向ハル、佐々木三郎判官氏頼ハ、天正本作、佐々木子手丸、蓋氏頼小名也、江州勢ヲ

率シテ、木目峠ヲ打越テ、敦賀津ヨリ向ハル、鹽治判官高貞ハ、船路ノ大將トシテ、出

雲伯耆勢ヲ率シテ、兵船三百艘ヲ汰、三方ノ寄手ノ相近ツカントスル比、津々浦々

ヨリ上テ、敵ノ後ヲ襲ヒ、陣ノアハヒヲ隔テ、戰ヲ機變ノ間ニ致スヘシト、合圖ヲ堅

ク定ラル、陸地三方ノ大將已ニ京ヲ立テ、分國ノ軍勢ヲ催サレケレハ、鹽治モ我國

ヘ下テ、其用意ヲ致サントシケル最中ニ、不慮ノ事出來テ、高貞忽ニ武藏守師直カ

爲ニ討レニケリ、下略

〔參考太平記〕

卷第二 畑六郎左衛門事(明年七月二十)

(註) 七月十一日條參照、明年三月二十四日條參照。

延元五年・興國元年(曆應三年)

高師治

土岐頼遠

佐々木氏

頼

鹽谷高貞

八月二十日の新田義宗等、越後ノ兵ヲ率キテ信濃ノ志久見山ニ攻メ入リ、長峯ニ陣ス。是日、及ビ明日、賊黨信濃守護代吉良時衡、市河倫房等ヲ指揮シテ拒ギ戦ヒ、之ヲ却ク。

〔市河文書〕三 △六、六三、一七

市河大炊助倫房軍忠事

右信州與越州堺志久見口高井郡關所事、任被仰下之旨、自去建武二年以來、無緩怠之儀令警固之處仁、新田武藏守義宗同一族并越後國凶徒等、引卒數多勢責入信州志久見山、於同所長峰取陣之間、倫房同子息郎從等馳向、同廿日廿一日兩日致散々之合戰、於彼凶徒等者悉追落畢、此條守護御代官吉良兵庫允時衡被見知候上者、仍給御證判、向後爲備龜鏡、恐々言上如件、

曆應三年八月日

(吉良時衡)
承了(花押)

〔註〕六月二十七日條參照、明年五月二十八日條參照、

八月二十四日 賊黨仁木義長、宗良親王ノ據リ給フト思ハル、遠江大平城ヲ攻メテ之ヲ陷イル。〔訖磨文書〕〔瑠璃山年錄殘編〕〔鶴岡社務記錄〕

志久見口

新田武藏守

〔祇園執行日記裏書〕

〔註〕明年二月二十六日條參照、

九月十八日 足利幕府、岩松賴宥ニ令シテ、宗眞等ノ伊豫河原庄内公文名ヲ濫妨スルヲ停メシム。

〔六波羅密寺文書〕(山城) △六、六、三四七、

伊豫國河原庄内公文名雜掌(成光申力) 宗眞法師以下輩募武威、或濫妨由事重申狀如此、度々可沙汰付雜掌於下地由、雖被仰下 嚴密可遵行之、若又有子細者以起請之詞可被注申之狀、依仰執達如件、

(所懸下見云)
三年九月十八日

左京大夫(花押)

岩松(賴有ナルベシ)禪師御房

〔六波羅密寺文書〕(ヨリ河野對馬入道通治宛)

九月二十三日の是ヨリ先、九月十三日、足利高經・吉見賴隆等、新田軍ヲ討チテ、越前府中ヲ陷イル、更ニ、二十二日、大鹽城ヲ陷イル、二十三日、妙法寺城・松鼻城及ビ脇屋義助ノ據レル平葺城ヲ陷イル。

〔天野文書〕〔得江文書〕(何レモ八月二十日ノ條ニ收ム)

延元五年・興國元年(曆應三年)

九七七

岩松禪師

〔得江文書〕 △六、六、二六九

得江九郎頼員申越前國軍忠事

一今年^三歷應 八月一日、馳向金津上野致合戰、令對治凶徒、則攻落同所城、至于勝蓮華宿、追落御敵等、燒拂在所訖、

一 同日、押寄三國湊千手寺城西面、渡堀越塀致戰功、攻落彼城訖、

一 同十七日、構向城於藤島内丸岡之處、自黑丸城凶徒打出之間、馳向一陣致合戰、追籠御敵於城中、抽日々軍忠、同廿日、押寄黑丸城大手、頼員不惜身命、攻戰之刻、中間源四郎被疵、^{右足}射疵、隨而追落彼城訖、

一 同九月十二日、取陣於氏江岡、翌日十三日、押寄府中、追落凶徒訖、

一 同廿二日夜、^丑刻令夜討大鹽城、燒拂麓、追落城塹、同廿三日、^辰刻追落妙法寺城松鼻城、并平葺陣^{脇屋殿}被疵之、訖、

一 同十月十九日、押寄畑城致合戰、同廿一日、打破一二木戶、燒拂麓城、至于同廿六日、頼員致軍忠之處、翌日廿七日、畑六郎左衛門尉參御方之間、破却城塹訖、

一 同日廿七日、押寄糸崎城之時、城中凶徒等參御方訖、

右每度軍忠至極之上者、且被經御注進、且下賜御證判、備弓箭面目、彌爲抽軍功、恐

金津城 上野城 勝蓮華宿 千手寺城 黑丸城 府中陷落 大鹽城 妙法寺城 松鼻城 義助ノ葺 城落ツ 畑城 畑時能降 參ス 糸崎城降 參

々言上如件

曆應三年十一月日

^(附箋)右馬頭殿(所波高經) 承了(花押)

得江九郎頼員申越前國軍忠事 △六、六、二七〇 (中略、前掲文書ト)

右每度軍忠至極之上、於侍所^{金持三郎 兵衛尉}實檢訖、然者且被經御注進、且賜御證判、備

弓箭面目、彌爲抽軍功、恐々言上如件、^(曆應三年十一月日附、某證判)

得江九郎頼員申越前國軍忠事 ^(右ト同ジ日附) ^(吉見頼隆證判) ^(十月二十七日) ^(ノ條ニ收ム)

(註) 十月二十七日條參照。

九月二十三日⁽²⁾ 一色範氏、官軍新田遠江禪師等討伐ノ爲、今川某ヲ筑後赤司城ニ遣シテ兵ヲ聚メシム。尋デ、二十六日、同國生葉山ニ戰ヒテ官軍ニ勝ツ。十月十四日、範氏、博多ニ歸ル。

〔武雄社文書〕 ^(佐賀文書) ^(纂所收) △六、六、二六三

□筑後國凶徒退治、去七月^(十五カ)□日御發^(向之時肥カ)前國武雄女大宮司^(代小三)□郎通^(中)

延元五年・興國元年(曆應三年)

豐福原并竹野庄陣
今川六郎
赤司城

自最前御共仕於同國豐福原并竹野庄已下所々軍陣致警固同九月廿三日可屬于今河六郎殿御手之由被仰下之間御共仕於赤司城致宿直警固迄于同十月十四日御歸津御共仕候訖以此旨可有御披露候恐惶謹言

曆應三年十月十九日

藤原通幸上

進上 御奉行所

(一色範氏)
承了(花押)

爲菊池武敏以下凶徒等退治大將筑後國豐福原同牧村御發向之間肥前國武雄女大宮司代小三郎通幸馳參候處去九月廿三日可屬今河殿御手之旨蒙仰於赤司城令付御著到致警固候訖以此旨可有御披露候恐惶謹言(曆應三年十月日附某證判)

新田遠江禪師
大城藤次
赤司城

新田遠江禪師大城藤次以下凶徒對治事爲構要害於筑後國赤目差遣今川六郎之時軍勢解退之處被相向之條尤神妙也仍狀如件

曆應三年十一月五日

(一色範氏)
沙彌(花押)

後藤武雄大宮司代

〔深堀系圖證文記錄〕(佐賀文書纂所收)

△六六二六四

爲凶徒退治御發向之間肥前國深堀彌五郎政綱馳參自筑後國豐福原迄于竹野木庄生葉庄以下御共仕抽忠節候畢以此旨可有御披露候恐惶謹言(曆應三年十一月日附一色範氏證判)

〔石志文書〕△六六二六五 (曆應三年十月廿五日附源照上) 一色範氏及今川貞世證判

松浦石志源三郎照軍忠事

一筑後國石垣山合戰事 建武五年三月三日

一同國生葉山合戰事 曆應三年九月廿六日

右致所々合戰之上者下賜御判欲備後證龜鏡(下略)

〔青方文書〕長崎圖書館所藏 (建武三年五月日附)

肥前國五嶋青方孫四郎高直謹言上早給御教書備累代龜鏡筑後國鳥飼津留并北野原二ヶ所合戰事

□菊池掃部助大城藤次三原秋月大村□一族以下凶徒等蜂起之間今月十六日向于彼兩所懸先令分取之條大將軍御見知之上先日進上勘入了(下略)

〔歷代鎮西要略〕三 △六六二六五

三年(曆應)庚辰七月依筑後官軍蜂起武家大將一色右典厩率管内之兵二萬發筑後國擊勝所々防戰一色之武威桓々九月廿六日

延元五年・興國元年(曆應三年)

九八一

生葉庄

大城藤次

於生葉庄山、官軍與管領挑戰、官軍乘勝、道獻軍周旋、

(註) 七月十七日條參照。

十月十五日 上野賴兼、石見官軍ノ豊田城ヲ陷イル。尋テ、二十三日、高津城ヲ攻ム。

〔萩藩閥閥録〕(平子親重軍忠狀、曆應三年十月日附、八月十八日) (平子重嗣軍忠狀、曆應三年十二月十二日附、八月十八日) (條ニ收ム)

(註) 八月十八日條參照。

十月二十七日 是ヨリ先、十月十九日ヨリ足利高經、吉見賴隆、越前新田軍ノ畑城ヲ攻ム。是日、城主畑時能ヲ降ス。同日、又糸崎城ヲ降ス。尋テ、十一月八日、此ノ戰ニ功勞大ナル得江賴員ヲ褒ス。

〔得江文書〕△、六、六、三四四。

得江九郎賴員申越前國軍忠事 (曆應三年十一月日) (九月二十三日) (附斯波高經證判) (ノ條ニ收ム)

得江九郎賴員申越前國軍忠事 (曆應三年十一月) (九月二十三日) (日附某ノ證判) (ノ條ニ收ム)

得江九郎賴員申越前國軍忠事

義助ノ據
レル平葺
城陷ル

畑時能降
參ス
糸崎城ヲ
降ス

一今年^{曆應三年}九月十二日、取陣氏江岡、翌日十三日、押寄府中追落凶徒訖、

一同廿二日夜、^丑令夜討大鹽城燒拂、追落城墾、翌日^辰令追落妙法寺城并松

鼻城平葺陣^{脇谷殿}被籠之、訖、是等之次第軍奉行土田十郎右衛門尉見知訖、

一同十月十九日、押寄畑城致合戰、同廿一日、打破一二木戸、燒拂麓城、至于同廿六日、

賴員致軍忠之處、翌日廿七日、畑六郎左衛門尉參御方之間、破却城墾訖、

一同日、廿七日、押寄糸崎城之時、城中之凶徒等參御方訖、是等之次第侍所治田太郎

見知訖、然者下賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

曆應三年十一月日

(吉見賴隆) 承了(花押)

〔得江文書〕△、六、六、三八八。

於當國越前、每度合戰、致軍忠之條尤神妙、尙々可被致戰功之狀如件、

曆應三年十一月八日

得江九郎殿

(註) 九月二十三日條參照。

十二月十九日 細川定禪、土佐ノ賊黨堅田某ノ軍功ヲ賞シテ、同國佐賀

延元五年・興國元年(曆應三年)

別府ヲ與ヘ、又、吾阿山預所職ヲ預ケテ、兵糧料所ニ充テシム。

〔藁簡集拾遺〕

〔註〕 六月二日條參照。 興國三年九月二十六日條參照。

是歲 足利幕府、高師冬・上杉憲顯ヲ關東執事職ト爲ス。

〔鎌倉大日記〕〔自鎌倉至室町〕 武家補任

興國二年(曆應四年)辛巳(三〇〇二)

正月二十九日 越前ノ新田軍、吉見賴隆ト鯖波・脇本・大鹽ニ戰フ。同日、二峯ノ新田軍、八王寺城ヲ攻メ、翌日、更ニ、瓜生城ヲ燒キ拂ヒ、再、比八王寺城ヲ攻ム。尋デ、二月六日、帆山ニ攻寄セテ此處ニ據リシモ、七日、吉見軍ノ爲ニ陷サル。

〔得江文書〕

△六、六、六四三

得江九郎頼員申越前國軍忠事

一奉屬大將吉見大藏大輔(頼隆)殿御手之處今年曆應正月廿九日、於鯖波、脇本、大鹽、致合戰忠節、同日二峯城凶徒等寄來八王子城之間、爲後攻馳向彼陣致戰功、追歸御敵訖。

二峯官軍
八王寺城
ニ寄ス

瓜生ヲ燒
拂ヒ八王
寺城ニ寄
ス

帆山ニ戰
フ

脇本大鹽

八王寺城
ニ寄ス
頼員瓜生
出ツヨリ打
出ツヨリ打
鯖波城
山城陷落
大瀧城陷

一翌日晦日、同城凶徒等燒拂瓜生、寄來八王子城之間、馳向一陣致合戰、追籠御敵於城中訖。

一同二月六日、凶徒等寄來帆山構城墾之間、翌日七日、於彼所致軍忠、同夜攻落御敵等訖。

一同閏四月二日、押寄脇本并大鹽、燒拂籠在家致軍功訖。

一同四日、於二峯城籠致戰功、燒拂在家訖。

一同十八日、押寄同城籠、致合戰忠節畢。

一同廿五日、攻寄同城籠之時、凶徒等懸出之間、致戰功、追籠御敵於城中訖。

一同五月十四日、同城凶徒等寄來八王子城之間、爲後攻頼員自瓜生城打出、馳向一陣致合戰、追歸御敵訖。

一同六月廿五日、攻寄鯖波、柚山城等之處、同夜彼城等令沒落訖。

一翌日廿六日、押寄大瀧城、日々致合戰、同廿八日攻落彼城畢。

右於所々如此、每度致軍忠次第、侍所長井藤内左衛門尉、并土田十郎右衛門尉見知之上者、早下賜御證判、向後爲備龜鏡、恐々言上如件。

曆應四年七月日

興國二年(曆應四年)

承了(吉見頼勝)
(花押)

(註) 去年十月二十七日條參照。三月二日、閏四月二日、七月二十四條參照。

二月十八日 是ヨリ先、去年八月十八日以來、上野頼兼、新田左馬助義氏ト聯合セル官軍高津長幸ヲ石見高津城ニ、日野邦光ヲ同國稻積城ニ攻メ居タリシガ、是日、皆之ヲ陷イル。

〔益田家什書〕六 六六六六三

石見國御神本孫次郎藤原兼躬申軍忠事、

右去年八月十九日、大將軍上野左馬助(頼兼)殿、打向高津(美濃郡)稻積兩城、被召須古山御陣之、兼躬令御共、日々夜々馳向高津余次長幸之城、每度抽軍忠畢、仍今年二月十八日夜詰落彼城畢、此段侍所松田左近將監令見知畢、加之自去年八月十九日迄于今年二月十八日、致警固御陣、抽無貳之忠節之段、且御存知之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件(曆應四年二月日附、上野頼兼證判)

石見國御神本孫次郎藤原兼躬申軍忠事

右當國凶徒日野左兵衛權佐邦光以下之輩、盾籠稻積城之間、依爲近所兼躬□□致

高津城稻積城ヲ攻ム須古山陣高津城落ツ
日野邦光據ル
三隅信性稻積城ニ糧米ヲ運ブ
稻積城陷落

御陣警固、馳向彼城度々合戰、抽軍忠畢、次凶徒三隅次郎入道信性、去正月十八日夜、稻積城被入兵糧米之間、馳向袴田挾所致散々合戰、打留兵糧米、御敵信性家□□藤三打取、即侍所松田左近將監被見知畢、去年八月十九日取卷彼城、毎日每夜致軍忠、今年二月十八日夜詰落畢、此段御存知之上者、爲預御證判、粗言上如件、

曆應四年三月日

上野左馬助頼兼ノ承了判

(註) 去年八月十八日、十月十五日ノ條參照。

二月二十六日 足利幕府、足利高經ニ令シ、臨川寺領加賀大野莊ノ年貢ヲ敦賀・小濱ニ廻漕セルモノヲ監護セシム。

〔臨川寺文書〕(山) △六、六、六六六

臨川寺領加賀國大野庄年貢事、著岸敦賀小濱津者、無違乱之様、可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

曆應四年二月廿六日

(高經) 武藏守(花押)

(新渡高經) 右馬頭殿

(註) 延元四年五月三日條參照。當時、金崎城ハ官賊何レノ手ニアリシカ不詳、

興國二年(曆應四年)

九八七

敦賀津小濱津

三隅信性稻積城ニ糧米ヲ運ブ
稻積城陷落

三月二日 中院右中將、足利軍ヲ伐タントシテ、新田軍ト交戦セル越前ノ足利黨得江頼員ヲ招ク。此ノ前後、越前ノ官軍、白鹿ノ年號ヲ用ヒシモノノ如シ。

〔得江文書〕

△六、六、六七六

(花押)

爲朝敵對治、御發向候之處也、急參御方、奉儀柄被致忠節者、可有忠賞之由、中院右中將家依仰執達如件

興國二年三月二日

行貞奉

得江九郎殿

(花押) (同前)

云先年軍忠今御志、以殊神妙候、善惡一頭之時者、先立可有忠賞御沙汰之由、中院右中將家依仰執達如件

白鹿二年卯月廿日

行貞奉

得江九郎殿

白鹿ノ年號

(註) 大日本史料、ニ曰ク、白鹿ノ年號ハ他ニ徵證ナキヲ以テ、何年ニ當ルカヲ詳

カニセズト雖ドモ、前書ト關連セルニ似タルヲ以テ、姑ク此ニ合致ス、ト

三月二十四日 足利幕府ヨリ越前新田軍討伐ノ令ヲ受ケタル鹽治高貞、京都ヲ出奔ス。尋デ、二十九日、幕兵ニ追撃セラレテ自盡ス。

〔師守記〕(參考太平記) 卷第二 (八月二十日)

是春 是ヨリ先、遠江井伊城ニ居給ヒシ宗良親王、駿河、甲斐、信濃ヲ經テ、是春、越後寺泊ニ駐リ給フ。〔李花集〕 雜歌

〔李花集〕 春歌

興國二年、越後國寺泊といふところにしばしすみ侍しに、歸雁をきゝて、ふる郷と聞しこし路の空をたに猶うらとをく歸る雁かね

〔李花集〕 冬歌

越後國寺泊といふ海つらにすみ侍し比、夜もすから千鳥をきゝて、あら磯のほかゆく千鳥さそなけにたちるも浪のくるしかるらん

(註) 去年八月二十四日條參照

四月十五日 上野長樂寺正參、寂ス。尋デ、十月二日、南叟、入寺ス。

興國二年(曆應四年)

九八九

泥牛正冬
南叟

〔禪刹住持籍〕(山城) 上野州世良田 十六世泥牛諱正參、副桃溪悟、曆應三年入寺、同四年辛巳四月十五日示寂、壽七十二歲、
十七世南叟諱 嗣西綱、曆應四年辛巳十月二日入寺、歲五十七、康永二年癸未九月八日於當寺燒香侍者寮示寂、壽五十四。

閏四月二日 吉見賴隆、越前新田軍ヲ脇本・大鹽ニ攻メ、更ニ、四日、十八日、二十五日、二峯城ヲ攻ム。尋デ、五月十四日、二峯城ノ官軍、八王寺城ヲ攻メ、瓜生城ノ得江頼員ト戦フ。

〔得江文書〕(正月二十九日條ニ收ム)

五月二十五日 是頃、新田義興、常陸ニ在リ。北畠親房、亦、常陸小田城ニ在リ。小山氏等、義興ニ依リテ任官ヲ望ミ、吉野ニ直奏ス。親房、東國諸族ノ直奏ヲ禁ズ。

〔結城文書〕(松平伯) △六、六、七、九、四

師冬已立、苒連著垂柳畢、自京都嚴密催促之間、關諸方直可豐當城云々、且又今明日發向之由其間候、被待懸候、坂東之安否宜在此時節歟、此時念可有勳力歟之由、以伊豆次郎并關郡使者、兩度被仰畢、猶々急速沙汰候者、殊可爲御本望候、

一、小山邊事荒說兩條、元來非信用之限候、然而小山自身年少、可然之輔佐輩も不候

高師冬小田城ヲ攻メントス
結城親朝ニ勳力ヲ望ム
小山邊ノ荒說

小山ノ義興者ニヨリテ任官ヲ望ム

荒說

歟(中略)義興事是又荒說勿論候、其も義興家人之中、物念張行事候て參吉野殿朝氏已參御方畢、所屬某也、仍可申補廷尉之由、火急申入候き、一向推參之儀候歟、比興之次第候、所詮此兩條聞慮之樣候之間、且爲才學先度被仰候き、更非御疑心之重候也、とてもかくても、敵方已置意之條勿論候上、早速ニ思定候て、且存正理令參候は、云恩賞云昇進、申御沙汰之條、何不足か候へきとこそ覺候へ、相構猶加詞可有教訓候、(以下略)

〔條々〕(中略)

一、小山邊事可爲御方之由申候らん、先以目出候、當時機嫌尤可然歟、早速令思立は、可有不次賞之由、猶々可被仰遣哉、敵方ニハ大略已參御方之由謳歌候歟、不二佛之中間之樣ニ思定候者、可然事候哉、就之此邊又種々之荒說候、一ニハ一族一揆して、可致別建立沙汰歟云々、一ニハ可被立新田子息歟云々、此兩條共以不審候、假令一族一揆して對治凶徒、爲一方之固、爲朝家之御護之條、元來本意歟、然者恩賞も官途も、面々可有優譽沙汰ニて候、別建立とて、様替て如足利之所存や、候へきと覺候へは、此段ハ一向荒說候歟、新田か跡ヲ取立事、是又不審候、當國ニ新

新田ノ子息ヲ立テ

新田義興
常陸ニ在
小山ノ者
義興ニヨ
リテ任官
宣下ヲ古
野ニケフ
義興ハ關
親房之ヲ
疑フ

奥羽坂東
ノ任官恩
賞ノ事ハ
親房ヨリ
ナリ

新田氏遺族篇

田兵衛佐義興在國候、彼内ニ小山内通者候けるか、參吉野して、小山已參御方望申廷尉、念被宣下候、んと申ける、此事御不審也、坂東國事自是不執申、小山參程事、爭不存知乎とて、難被許容候けるを、已參候ける程ニ被宣下乎、何様事哉と被憑之間、被尋義興之處、自身全不存知云々、家人中構出事有之歟、仍不審之輩少々、追出之由申之、此事又非無疑殆候、如此事も面々しと、と不評定申、又一編ニ不思想之間、爲彼仁云敵方之間、又爲當方も旁輕忽事候、所詮此間事ヲ、まことしき使者などにて、宜被談合哉らん、且故判官(大日本史料ニハ義貞ト註シタレド)ハ故兵部卿親王(親王)隨分と憑給候き、彼若宮令坐坂東給候、んすれハ、旁可有舊好事歟、同參御方ても、不乖物義者、可叶先皇冥慮歟と覺候也、(中略)

一兩國并坂東人々任官恩賞等事、任舉申可有沙汰之由、先皇御時勅定候畢、當御代、又以其儀候、而屬便宜入々掠給給旨輩之由、風聞候、不可然(候カ)、石川矢葺も先日進狀候、書駿河權守候、自是ハ未及御沙汰候き、屬誰人申任候哉、如風聞者、伯耆織殿祇候吉野之間、執申けるかと荒説候、吉野にてハ、一定掠申事も候つらんと被推量候、可有沙汰者、何可有御抑留候哉、直奏之條、亂法候段、無子細者、可被用本官候、自余輩事、以此趣可被仰聞候也、(中略)

五月廿五日

法眼宣宗

謹上 結城修理權大夫殿

五月二十八日 越後妻在庄ノ新田氏一族、信越ノ國境志久見河ニ攻寄せ、賊黨ト戦ヒシモ敗レ退ク。尋デ、六月三日、新田右馬助・同大善亮等、妻在庄内赤澤南山ニ陣ヲ取り兵ヲ催セシモ、賊黨ニ撃タレテ敗退ス。尋デ、賊黨上杉憲顯、越後ノ官軍ヲ撃チテ諸城ヲ陷イル。

〔市河文書〕

〔本間光正氏藏〕

△六六、八〇五

市河大炊助倫房軍忠事

右爲越後國凶徒等御對治、大將伊與守殿、并信州守護御方御發向之間、令馳參常岩北條(共ニ下)之處、可向妻在庄(越後中)之由依承之、舍兄刑部大夫助房、同左衛門十郎經助、中野五郎太郎、同孫五郎入道、四郎太郎入道等相共、去月(曆應)廿八日馳向妻在庄處、新田一族等、信州與越州之境、於志久見河渡場(高井)令馳向之間、倫房、同子息彦三郎經兼、同彌三郎親房等、馳越彼河責上、追落凶徒等、於在所等者、悉所令放火也、將又今月三日、於妻在庄内赤澤南山取陣、催勢之由就承及之、不廻時日馳向、致散々合戰、追落凶徒等、燒拂新田右馬助、同大善亮等館畢、然則給御證判、向後彌爲施弓箭面

興國二年(曆應四年)

九九三

市河倫房

足利黨妻
在庄ヲ攻
メントス
新田一族
河志久見
河ニ戦フ
妻在庄内
赤澤南山
ノ陣ヲ攻
ム
新田右馬
助、同大

善亮

目、恐々言上如件

曆應四年六月日

承了(花押)

(註) 去年八月二十日、去年是歲條參照。

〔鶴岡社務記錄〕坤 曆應四年_巳、六月七日、越後城悉打落之由、以飛脚上相戶部(蓋)

上杉憲顯
越後官軍
ヲ討ツ

懸令申了、

〔武家年代記〕下 曆應四年、今年六月十四日、自越後國早馬參、大將上杉戶部、因

徒三百餘人被誅之所殘少々降參、又沒落云々、

是夏、護良親王ノ若宮興良親王、常陸ニ著シ、大寶城ニ入ラセ給フ。

〔阿蘇文書〕七 〔結城文書〕(五月二十五日條ニ收ム) 〔結城古文書寫〕伊勢(有造) 館本 坤

六月五日 吉野朝廷、先ニ新田義宗ノ南保重貞ニ安堵セシメタリシ越

後奥山莊内黒河條地頭職ヲ、重貞養子土代一丸ニ安堵セシメ給フ。

〔色部文書〕(羽前) 六、六、八、一、六、

越後國奥山莊内黒河條地頭職、任心(頭心)圓(齋藤)讓(實利)、南部土代一丸知行不可有相違者、天

氣如此、悉之以狀、

興國二年六月五日

右中將(花押)

(註) 去年六月二十七日條參照。

六月二十五日 吉見賴隆、越前新田軍ノ鯖波城・袖山城ヲ攻メテ之ヲ陷

イル。翌二十六日、大瀧城ヲ攻メ、二十八日、陷イル。(得江文書)(正月二十九日條ニ收ム)

七月二十四日 先ニ足利軍ニ降參セシ新田軍ノ將畑時能、新田一井氏

政等ト共ニ、越前鷹巢城ニ據リテ奮戰ス。是日、吉見賴隆等、之ヲ攻ム。

〔附〕義助、藤原藤房ニ逢フ。

〔得江文書〕六、六、八、六、五、

得江九郎賴員申越前國軍忠事、

右今年_四曆應 七月廿三日、奉屬大將吉見大藏大輔殿(賴隆)御手、攻寄高柄城籠取陣、翌

日廿四日、於同城東麓、賴員不惜身命致合戰之刻、自身被疵、右膝口射疵、訖、此條爲大將

軍御前問、御見知畢、隨而長井藤内左衛門尉、并土田十郎右衛門尉所令實檢也、然早

被經御注進、且下賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件

曆應四年九月日

承了(花押)

興國二年(曆應四年)

吉見賴隆
高柄城ヲ
攻ム

義助ノ物語
義助、如
時能ヲシ
テ鷹巢城
ヲ守ラシ
ム

遁世ノ庵

遁世僧

名乗ル

藤房ノ面
影ニ似タ
リ

〔吉野拾遺〕^上 刑部卿義助朝臣の越前^國よりいましてものがたり、越前のくにたかの巢の山はたかくそぼだちて城廓にしかるべきところなりければ、畑六郎左衛門時能^{時能}といふものにまぼらせけるに、あないをしらんがために、なをおくふかくわけ入にけるに、谷河のいときよくながれるを、そのみなかみをたづねにのぼりけるに、さし出たる岩をかたどりて、松の葉にて葺たる庵のみえけるを、かゝるところにもすむ人のありけるにやとたちよりて見侍れば、木葉をあつめてむしろとしたいらなる石の上に法華經ををきける外にはなにもみへず、しばしありけるに、山路をたどりくる人をみれば、^髪疲をとろへたる僧の、しきみを手にもてり、いかにしたまふにやと物のかくれよりみけるに、谷河の水をむすびて庵のうちにいり、^下經のひもとをときけるほどに、よみはじめ玉はぬさきにといそぎ行て、かかる御住居こそいとたとくおぼえさぶらへ、いかなる人の世をそむかせたまひけるにやと、とひたてまつるに、そこにはいかにとたづねさせける程に、名のりをしつれば、いとほいなきさまして、あづまのものにこそとばかりの玉ひて、經をよみたまひしほどに、かへりてさぶらへ、藤房卿の御面影して侍るといひしまゝに、いとゆかしくて一條少將をとまひてまいりけるに、庵はそのまゝありて僧は

姿ヲ消ス

一條少將
筆蹟ヲ見
知リタリ

足利大軍
攻下リ新
田軍衰微

みえたまはず、經のありつる石ときこえしに、

こゝも又うき世の人の問くれば空行雲にやどもとめてん

とかきつけ給へる筆の跡を、少將のよく見しり玉ひて、そのほとりの山々をたづねさせたまひけれども、さらにみえ玉はねば、いとほいなくてとの玉ひしを、人びと聞もあへたまはで、みな涙おとしてけり、さしもいみじかりける人の、きゝしがごとの御住るは、まことにありがたきおこゝろにこそ、とし月をあはせてみ侍るに、君がすむ宿といひこされしはのちの事なり、こしのかたよりつくしへとをり玉ふらん折にや、そののちはたえて御をとづれもきかざりし、この藤房の卿は、大納言宣房卿の御子なりし、才智世にすぐれさせたまひて、君にも御おぼえのあさからで、中納言までなりたまひしが、建武きのえ戌のとしの春^春にはかに世をすてたまひし。

〔参考太平記〕

卷第二

畑六郎左衛門事

此段除大
戎國事

去程ニ京都ノ討手大勢ニテ攻下シカハ、^{此段除大戎國事} 柚山城モ落サレ、^{今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、去年九月柚山城} 越前、加賀、能登、越中、若狭五箇國ノ間ニ、^{元爲、脱卷也、因第二十一卷與此卷、編次不三相連串、事跡多有可疑、詳註于下段} 宮方ノ城一所モ無リケルニ、畑六郎左衛門時能、僅ニ二十七人籠

興國二年(曆應四年)

堀時能、
一井氏政、
鷹巢城ニ
據ル

足利高經
攻圍ス

堀時能ノ
人トナリ

新田氏遺族篇

リタルケル、鷹巢城計ソ相殘タリケル、一井兵部少輔氏政ハ、去年柚山城ヨリ平泉寺へ越テ、衆徒ヲ語ヒ、旗ヲ舉ント議セラレケルカ、國中ノ宮方弱シテ、與カスル衆徒モ無リケレハ、是モ同シク鷹巢城ヘソ引籠リケル、

○北條家、西源院、南都本云、氏政十三騎ノ北條家本作十二騎勢ニテ、白晝ニ國中ヲ打通リ、鷹巢城ニ籠ル、云々、

時能カ勇力、氏政カ機分、小勢ナリトテ闇ナハ、何様天下ノ大事ニ成ヘシトテ、足利尾張守高經、高上野介師重第二十一卷作師治、爲得、今相繼繼、重、當作、兩、大將トシテ、北陸レ治、金勝院本作同上野介、恐非也、同蓋高之訛道七箇國ノ勢、七千余騎ヲ率シテ、鷹巢城ノ四邊ヲ千重百重ニ圍マレ、三十箇所ノ向城ヲソ取タリケル、彼堀六郎左衛門ト申ハ、武藏國住人ニテ有ケルカ、歳十六ノ時ヨリ、相撲ヲ好テ取ケルカ、坂東八箇國ニ更ニ勝者無リケリ、腕ノ力筋太クシテ、股ノムラ肉厚ケレハ、彼薩摩ノ氏長モ、角ヤト覺テ夥シ、其後信濃國ニ移住シテ、生涯山野江海ノ獵漁ヲ業トシテ、年久シク有シカハ、馬ニ騎テ、惡所岩石ヲ落ス事、恰モ神變ヲ得カ如シ、唯造父ガ御ヲ取テ、千里ニ疲レサリシモ、是ニハ過シトソ覺タル、水練ハ、又馮夷カ道ヲ得ダレバ、驪龍領下ノ珠ヲモ自ラ奪ツヘシ、弓ハ養由ガ跡ヲ追シカハ、弦ヲ鳴シテ、遙ナル樹頭ノ栖猿ヲモ落シツヘシ、謀巧ニシテ人ヲ呢、氣

強剛三名

敵ノ向城
ヲ荒ス

健ニシテ心撓サリシカハ、戰場ニ臨ゴトニ、敵ヲ靡ケ堅ニ當ル事、樊噲周勃ガ得サル道ヲ得タリ、サレハ物ハ類ヲ以テ聚マル習ナレハ、彼カ甥ニ、所大夫房快彘今川南都本、作三永、尊、下倣之唇ナル大カアリ、又犬獅子ト名ヲ附タル不思議ノ犬一匹有ケリ、此三人ノ者共、關ニタニナレハ、或ハ帽子兜ニ鏢ヲ著テ、足輕ニ出立時モアリ、或ハ大鎧ニ七物持時モアリ、様様姿ヲ替テ、敵ノ向城ニ忍入、先件ノ犬ヲ先立テ、城ノ用心ノ様ヲ伺フニ、敵ノ用心嚴シクシテ隙ヲ伺ヒ難キ時ハ、此犬一吠吠テ走出、敵ノ寢入夜巡モヤム時ハ、走出テ主ニ向ヒ尾ヲ振テ告ケル間、三人トモニ此犬ヲ案内者ニテ、堀ヲノリ越、城中へ打入テ、叫喚テ縱横無礙ニ切テ廻リケル間、數千ノ敵軍驚騒テ、城ヲ落サレヌハ無リケリ、此間載三犬或國、事一今除之サレハ此犬城中ニ忍入テ、機嫌ヲ計ケル間、三十七箇所ニ城ヲ拵ヘ分テ、逆茂木ヲ引、堀ヲ塗タル向城トモ、毎夜一ツ二ツ打落サレ、物具ヲ捨馬ヲ失ヒ、恥ヲカク事多ケレハ、敵ノ強キヲハ顧ス、御方ニ笑レン事ヲ恥テ、偷ニ兵糧ヲ入、忍々酒肴ヲ送テ、然ヘクハ我城ヲ、夜討ニナセソト、堀ヲ語ラハヌ者ソ無リケル、爰ニ寄手ノ中ニ、上木平九郎家光ト云ケルハ、元ハ新田左中將ノ侍ナリケルカ、心ヲ翻シテ敵トナリ、攻口ニ候ケルカ、數百石ノ兵糧ヲ送テ、堀ニ内通スト

上木家光
城ヲ攻ム

攻撃軍
敗ス

云聞へ有シカハ、如何ナル者カシタリケン、大將尾張守高經ノ陣ノ前ニ、畑ヲ討ン
ト思ハ、先上木ヲ伐ト云秀句ヲ書テ、高札ヲソ立タリケル、是ヨリ大將モ上木ニ
心ヲ置レ、傍輩モ、是ニ隔心アル體ニ見ヘケル間、上木口惜キ事ニ思ヒテ、二月二十
七日早旦ニ按、興國二年、北朝曆應三年、己カ一族二百余人、俄ニ物具ヒシヒシト堅メ、大竹ヲヒシ
キテ、楯ノ面ニ賞カツキ連テソ攻タリケル、自余ノ寄手是ヲ見テ、城ノ案内知タル
上木カ俄ニ攻ルハ、何様落ヘキ様ソ有ラン、上木一人カ高名ニナスナトテ、三十余
箇所ノ金勝院本作三十七箇所、非也、諸本前作三十七箇所向城兵共七千人、取物モ取敢ス、岩根ヲ傳ヒ、木ノ根ニ取
附テ、サシモ峻シキ鷹巢城ノ坂十八町ヲ一息ニ攻上リ、切岸ノ下ニソ著タリケル、
サレトモ城ニハ鳴ヲ靜メテ、事ノ様ヲ見ヨトテ、靜マリカヘリテ有ケルカ、己ニ鹿
垣程近成ケル時、畑六郎所大夫房快彘、惡八郎毛利家、金勝院、西源院、南部、天正本、不載、惡八郎、鶴澤源藏人、勝院本
作鶴澤、恐非也、下倣之、長尾新左衛門長尾、今川家、毛利家、北條家、西源院、南部、天正本、不載、今川家本無、新字、兒玉五郎左衛門五人ノ
按、本文、既出、如以下六人、而云、五人、者非也、者トモ、思々ノ物具ニ、太刀長刀ノ鋒ヲ汰ヘ、聲々ニ名乗テ、喚テ切
テソ出タリケル、誠ニ人ナシト油斷シテ、ソ、ロニ進ミ近ツキタル、前驅ノ寄手百
余人、是ニ驚散テ、互ノ助ヲ得ント、一所ヘヒシヒシト寄タル處ヲ、例ノ惡八郎、八九
尺許ナル大木ヲ脇ニ挾、五六十人毛利家本作五十六人シテモ押ハタラカシカタキ、大盤石ヲ

轉シ懸タレハ、其石ニ當ル有様、輪寶ノ山ヲ崩シ、磊石ノ卵ヲ壓ニ異ナラス、

○今川家、北條家、金勝院、西源院、南部本云、其盤石大木四五本、押倒シテ崩ケレハ、
岩ニ當リ碎ケテ落ル石、二三百ニ分レ、楯ヲ打兜ヲ碎キケレハ、矢場ニ打殺サル
ル者七十余人、後ニ血ヲ吐テ死スル者數ヲシラス、云々、金勝院、西源院本又云、創ヲ被リテ、カタハニナル者數ヲ知ス、云々、
是ニ利ヲ得テ、左右ニ激シ、八方ヲ拂破テハ返シ、歸テハ進ミ、散々ニ切廻リケル間、
或ハ討レ或ハ創ヲ被ル者其數ヲ知ス、去ナカラ其後ハ彌寄手攻上ル者モナクテ、
只山ヲ阻川ヲ堺テ、向陣ヲ遠ク取ノキタレハ、中々兎角モスヘキ様ナシ、(下文ハ十月二十二日條ニ)

(註) 去年十月二十七日條參照。

九月十八日 是頃、義助、越前ヨリ美濃ニ來リ、由良某ノ根尾城ニ據ル。尋デ、根尾城ヲ落チテ尾張波津崎ニ逗留シ、ヤガテ吉野ニ詣ル。

〔參考太平記〕卷第二 義助參芳野附隆資卿物語事

爰ニ脇屋刑部卿義助ハ、去九月十八日按、延元四年、美濃根尾城ニ楯籠シカトモ、土岐彈
正少弼頼遠、刑部大輔頼康ニ頼清子也、攻落サレテ、金勝院、西源院本云、去月十八日美濃根尾城破レシ時、郎等七十三人ヲ召具、云云、金勝院本、根尾作尾張、
郎等七十三人ヲ召具シ、微服潛行シテ、熱田大宮司カ城、尾張國波津崎ヘ落サセ給

義助美濃
根尾城ニ
據ル
尾張波津
崎城

吉野ニ參

ヒテ、十余日逗留シテ、敗軍ノ兵ヲ集サセ給ヒテ、伊勢伊賀ヲ經テ吉野殿ヘソ參ラレケル、

○按、本文第二十一卷尾、載義助攻落黒丸城、段、次以鹽治高貞讒死段終、而其段有云、尊氏聞、義助發兵、越前拔黒丸城、其勢漸强大、命諸將率大兵擊之、云々、至此直云、義助敗走、遂詣吉野、而其間越前及美濃之戰、竝無所載、固非無疑、今以鳥津家、北條家、西源院、南都等異本、第二十二卷竝闕、察之、則後人分篇足卷者、益信然矣、異本舊體、既載于凡例、可并見焉、

參内

限リナキ
御愛憐

恩賞官位

洞院實世
ノ評

則參内シ、龍顔ニ謁シ奉リシカハ、君玉顔殊ニウルハシク、照臨有テ、席ヲ前メ、此五六年カ間ノ北征ノ忠功、他ニ異ナル由ヲ感シ仰ラレテ、更ニ敗北ノ無念ナル事ヲハ仰出サレス、其命恙ナクシテ、今此ニ來ル事、君臣水魚ノ忠德、再ヒ顯ハスヘキ故ナリト、御涙ヲ浮ヘサセオハシマシテ、仰下サル、次ノ日臨時ノ宣下有テ、一級ヲ加ラレ、加之、當參ノ一族、并ニ相從ヘル兵共ニ至マテ、或恩賞ヲ賜ハリ、或ハ官位ヲ進メラレケレハ、面目人ニ超テソ見ヘタリケル、其時分殿上ノ上口ニ、諸卿參候セラレタリケルカ、物語ノ次ニ、洞院右大將實世按、洞院太勝、右、金聲、院本作左、非也、イマタ左衛門督ニテオハセシカ、欺申サレケルハ、抑義助、越前ノ合戰ニ打負テ、美濃國ヘ落ヌ、其國ヲサ

四條隆資
ノ辯

敗北ハ義
助ノ責ニ
アラズニ
勅裁將威
シテ輕クセ
シ故ナリ

ヘ又追落サレテ、身ノ置處ナキ儘ニ、當山ヘ參リタルヲ、君御賞賚有テ、官祿ヲ進マセラル、事、返々モ心得ス、是唯治承ノ昔異本或作三元、歷、非也、權左三位中將惟盛カ、東國ノ討手ニ下テ、鳥ノ羽音ニ驚テ逃上タリシヲ、祖父清盛入道カ計ヒトシテ、一級ヲ進マセシニ異ナラストソ笑ハレケル、四條中納言隆資卿ツクツクト是ヲ聞給ヒケルカ、退テ申サレケルハ、今川家、北條家、金藤院、西源院、南都本云、隆資ハ、良彦ニ有テ、過言一タヒ出テ、嗣馬追トモ、舌ニ及ハスト申事候ニ、ナド加様ノ事ヲハ仰候ヤラン、云々、下同、本文、今度ノ儀、叡慮ノ赴ク處、其理ニ當ルカトコソ存候ヘ、其故ハ義助北國ノ軍ニ利ヲ失ヒ候シ事ハ、全ク彼カ戰ノ拙ニ非ス、只聖運時イマタ到ラス、又勅裁ノ將ノ威ヲ輕クセラレシニ依テナリ、高才ニ對シテ、加様ノ事ヲ申セハ、管ヲ以テ天ヲ窺ヒ、道ニ聽テ塗ニ説風情ニテ候ヘ、共、只其一端ヲ申ヘシ、昔周ノ末、戰國ノ時ニ當テ、七雄ノ諸侯相爭ヒ、互ニ國ヲ奪ハント謀リシ時、吳王闔閭、孫氏ト云ケル勇士ヲ大將トナシテ、敵國ヲ伐ン事ヲ計ル、孫武斬吳王愛姫、文、今略之、孫氏カ教タル謀、誠ニ當レリト思ハレケレハ、遂ニ孫氏ヲ用テ、多ノ敵國ヲ亡サレテケリサレハ、周武王殷紂王ヲ伐ン爲ニ、大將ヲ立ル事ヲ、太公望ニ問給フ、太公望答曰、凡國有難、君避正殿、召將而詔之曰、社稷安危、一在將軍、今某國不臣、願將軍帥師應之、將既受命、乃命太史、卜齋三日、之、太廟、饗靈龜、卜吉日、以授斧鉞、君入廟門、西面而立、將入廟門、北面而立、君親操鉞、持首授將其

柄曰從此上至天者將軍制之復操斧持柄授將其乃曰從此下至淵者將軍制之見其
 虛則進見其實則止勿以三軍爲衆而輕敵勿以受命爲重而必死勿以身貴而賤人勿
 以獨見而違衆勿以辯說爲必然士未坐勿座士未食勿食寒暑必同如此則士衆必盡
 死力將已受命拜而報君曰臣聞國不可從外治軍不可從中御二心不可以事君疑志
 不可以應敵臣既受命專斧鉞之感臣不敢生還願君亦垂一言之命於臣君不許臣臣
 不敢將君許之乃辭而行軍中之事不聞君命皆由將出臨敵決戰無有二心若此則無
 天於上無地於下無敵於前無君於後是故智者爲之謀勇者爲之闘氣勵青雲疾若馳
 驚兵不接乃而敵降服戰勝於外功立於內吏遷上賞百姓懽悅將無咎殃是故風雨時
 節五穀豐熟社稷安寧トイヘリ古ヨリ今ニ至ルマテ將ヲ重ニスル事如此ニテコ
 ソ敵ヲ亡ホシ國ヲ治ル道ハ候事ナレ去程ニ此間北國ノ有様ヲ傳承ルニ大將ノ
 舉狀ヲ帶セス共士卒直ニ訴ル事アレハ應テ勅裁ヲ下サル僅ニ山中本文此下有衍字今依真本改之
 伺候ノ勞ヲ以テ軍用ヲ支ヘラル北國ノ所領共ヲ望ム人アレハ事問ズシテ聖斷
 ヲナサル是ニ依テ大將威輕ク士卒心态ニシテ義助遂ニ百戰ノ利ヲ失ヘリ是全
 ク戰ノ罪ニ非ス只上ノ御沙汰ノ違フ處ニ出タリ君忝モ是ヲ思召知ルニ依テ今
 其賞ヲ重ンセラル者ナリ秦將孟明視西乞術白乙丙鄭國ノ軍ニ打負テ歸タリ

北國ノ有様

天皇義助ノ苦衷ヲ知召サル

シヲ秦穆公素服郊迎シテ我百里奚蹇叔カ言ヲ用スシテ辱シメラレタリ三子ハ
 何ノ罪カアル其心ヲ專ニシ懈ルコトナカレト云テ三人ノ官祿ヲ復セシニテ候
 ハスヤ何ソ古ノ惟盛ヲ入道相國賞セシニ同カラシヤト申サレシカハサシモ大
 才ノ實世卿言ナクシテ退出セラレケリ

(註) 本條ノ事他ニ確徵ナケレドモ太平記ノ記事ノマニ此處ニ掲書ス根
 尾城ノ官軍顯家ノ軍ニ參加スル事延元三年正月二十八日ノ條ニアリ

[吉野拾遺] (七月二十四日)
(ノ條ニ收ム)

(參考)

[太平記評判理盡鈔] 卷第二 已ニ杣山ノ城攻落サレテ義助行方不知ト披露有
 シカバ北國ニハ官方一人モナカリケリ此段ハ本書ニナシ此ノ時美濃根尾城軍
 ノ事モ書ニハ不載今因ニ記スル者也義助杣山ノ城ヲ落テ由良右衛門ノ太夫ガ
 楯籠タリケル美濃根尾ノ城ヘ落ラレケルニ右衛門ノ太夫力ヲ得テ十月七日ニ
 ハ同國加々見次郎ヲ討テ兵糧ヲ奪取テ人足ヲ催シ根尾ノ城中ヘ運入サセケリ
 故ニ杣山ヨリノ落人又根尾ノ城ヘ馳集ケレバ其勢七百餘騎ニ成タリ(以下戰況
 モ略ス)

根尾城合戰
由良右衛門太夫

十月二十二日 越前鷹巢城ニ據リシ畑時能、伊知山城ニ據ル。是日、足利高經、伊知山城ヲ攻ム。時能、之ニ死ス。

〔參考太平記〕

卷第(上文ハ七月二十)廿二(四日ノ條ニ收ム)

懸リシ程ニ畑ツクツクト思案シテ、此儘ニテ

一井ハ鷹巢城ニ據ル地ヲ指ス

高經之ヲ攻ム

ハ叶マシ、珍シキ戰今一度シテ、敵ヲ散スカ散サル、カ、二ノ間ニ天運ヲ見ント思ヒケレハ、我城ニハ大將一井兵部少輔ニ、兵十一人ヲ附テ殘シ留メ、又我身ハ宗徒ノ者十六人ヲ引具シテ、金勝院本云、我身ハ甥ノ所大夫房永專、惡八郎爲頼以下ノ手柄者、十六騎ヲ引具シテ、云云、按、此上所大夫房號同、本文、今作「永專」前後相繼十月二十一日夜半ニ、豊原ノ北ニ、異本或作「平泉寺北、當タル、伊地山ニ打上リ、中黒ノ旗二流打立テ、寄手遲シトソ待タリケル、尾張守高經是ヲ聞テ、鷹巢城ヨリ勢ヲ分テ、此ヘ打出タルトハ思寄ス、豊原平泉寺ノ衆徒、宮方ト引合テ、旗ヲ擧タリト心得テ、些モ足ヲタメサセシト、同二十二日卯刻、三千餘騎ニテソ押寄ラレケル、寄手初ノ程ハ、敵ノ多少ヲ量兼テ、左右ナク進マサリケルカ、小勢ナリケリト見テ、些モ恐處ナク、我前ニトソ進タリケル、畑六郎左衛門、敵外ニ控タル程ハ、態在トモ知レサリケルカ、敵既一二町ニ攻寄セタリケル時、金胴ノ上ニ、火威鎧ノ敷目ニ拵タルヲ草摺長ニ著下シテ、同毛ノ五枚兜ニ、鍔形打テ緒ヲシメ、熊野打ノ頬當ニ、大立揚ノ藤當ヲ脇楯ノ下マテ引籠テ、四尺三寸ノ太刀ニ、三尺六寸ノ長刀莖短ニ握リ、一引兩ニ三鄰

畑時能ノ奮戰

ノ笠驗、馬ノ三頭ニ吹懸サセ、鹽津黒トテ五尺三寸有ケル馬ニ、鏝ノ鎧懸サセテ、劣ラサル兵十六人、前後左右ニ相隨ヘ、畑將軍此ニアリ、尾張守ハ何クニオハスソト呼テ、大勢ノ中ヘ懸入、追廻シ懸亂シ、八方ヲ拂テ四維ニ遮リシカハ、萬卒忽ニ散シテ、皆馬ノ足ヲソ立兼タル、是ヲ見テ、尾張守高經、鹿草兵庫助、旌ノ下ニ控ヘテ、云甲斐ナキ者共哉、敵縱鬼神ナリ共、アレ程ノ小勢ヲ見テ、引事ヤ有ヘキ、唯馬ノ足ヲ立寄セテ、魚鱗ニ控ヘテ、兵ヲ虎韜ニナシテ取籠、一人モ漏サス打留ヨヤト、透間モナクソ下知セラレケル、懸リシカハ三千餘騎ノ兵トモ、大將ノ諫言ニカヲ得テ、十六騎ノ敵ヲ真中ニヲツ取籠、餘サシトコソ揉タリケレ、大敵欺カタシトイヘトモ、畑カ騎タル馬ハ、項羽カ離ニモ劣ラサル程ノ駿足ナリシカハ、鎧ノ鼻ニアテ落サレ、蹄ノ下ニコロフヲハ、首ヲ取テハ馳通り、取テ返シテハ颯ト破ル、北條家、金勝院、西源院、南如何ナル大磐石ヲモ切通ス程ナレハ、一打相從兵モ、皆似ルヲ友トスル事ナレハ、目ニ當ル敵ヲニ二三人打落サレスト云事ナシ、云々、當ル敵、五騎十騎斬テ落サスト云事ナシ、云々、其膚撓マス、其目逃ガハ、斬テ落サスト云事ナシ、今川家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、目ニサル勇氣ニ、三軍敢テ當リ難ク見ヘシカハ、尾張守ノ兵三千餘騎、東西南北ニ散亂シテ、河ヨリ向ヘ引退ク、向、金勝院、西源院本、作「西、軍散シテ後、畑帷幕ノ内ニ打歸テ、其兵ヲ集ルニ、五騎ハ討レ、九人ハ痛手負タリケリ、此段始云、守、城者僅二十七騎、而云一井將三十一騎留在城、畑率二十六騎、出、城、則合三井畑、都二十九人也、合戰時又云、高

興國二年(曆應四年)

烟時能死

經兵團擊十六騎云々、至此云、五人戰死、存者九人、云々、前後皆顯赫、按、第二十一卷、義助賜遺勅繪旨、其中殊更段云、烟二十三騎守鷹巢城、而此段首云三十七騎、顯赫、且云三井來加、則亦非三十七騎、皆不可考、憑タル大夫房快彘、七所マテ痛手負タリシカ、其日ノ暮程ニソ死ニケル、烟モ藤當ノハツレ、小手ノ餘リ、切レヌ所ソ無リケル、少々ノ小創ヲハ、物ノ數トモ思ハサリケルニ、障子ノ板ノハツレヨリ、肩サキヘ射籠レタリケル白羽ノ矢一筋何ト拔ケレ共、鐵更ニ拔サリケルカ、三日ノ間苦痛身ヲセメテ、終ニ吠死ニコソ失ニケレ、凡此烟ハ惡逆無道ニシテ、罪障ヲ恐サルノミナラス、無用ナルニ僧法師ヲ殺シ、佛闍社壇ヲ燒壞チ、修善ノ心ハ露計モナク、惡業ヲナス事ハ、山ノ如ク重リシカハ、勇士智謀ノ其藝有シカ共、遂ニ天ノ爲ニヤ罰セラレケン、流矢ニ侵サレテ、死ニケルコソ無慙ナレ、此間數行引、罪及宋門府故、事且文義失、實、今除之、烟已ニ討レシ後ハ、北國ノ宮方氣ヲ撓マシテ、頭ヲ差出ス者モ無リケリ、

(註) 本條ノ事、他ニ確徵ナケレド、太平記記事ニ據リテ此處ニ置ク。

十一月十日 常陸小田城主小田治久、賊黨ト和ス。小田城ニ在リシ北畠親房、關城ニ移リ據ル。

〔結城古文書寫有造館本〕乾

興國三年(曆應五年・康永元年(四月二十)七日改)壬午三〇〇二

二月十七日 去年ヨリ石見諸方ニ官賊ノ抗戰續キ、今年二月一日、官軍ノ福屋城、陷ル。是日、賊黨小石見城ヲ攻ム。官軍總大將新田左馬助義氏等、出デ降ル。爾後、猶、當國ニ於テ、官賊ノ抗戰續ク。

〔萩藩閥閱錄〕

五十八 内藤次郎左衛門

△、六、六、八一、九

(曆應四年六月六日附直義ヨリ内藤左衛門尉ニ宛ツ)

石見國凶徒退治事、所遣武田伊豆守信武也、早令發向可致軍忠之狀如件

〔吉川家什書〕

十四 經明御代

△、六、六、九四、九

馳向小石見城

(石見那賀郡)

可被軍忠之狀如件(曆應四年十月十三日附、上野頼兼ヨリ吉河次郎三郎ニ宛ツ)

〔益田家什書〕

六 △、六、六、八七、七

(曆應五年二月日附、上野頼兼ノ證判)

石見國御神本孫次郎藤原兼躬申軍忠事、

福屋城

右大將軍去年七月廿日、(石見カ)國凶徒爲御退治、御廻東方之間、兼躬御共仕、同八月七日、御發向福屋城(石見那賀郡)之時、相共土屋平三懸先陣、打破三和田狹所凶徒等、追籠城内畢、加之對彼城、兩年之間、致警固御陣、日々夜々合戰、每度抽軍忠、今年二月一日、詰落福屋城畢、此之段侍所松田左近將監被見知之上者、爲預御一見狀、粗言上如件

〔萩藩閥閱錄〕

百廿一ノ四 周布吉兵衛

△、六、六、八七、七

(曆應五年二月日附、上野頼兼ノ證判)

石見國有福五分一地頭越生七郎光氏申軍忠事、去年八月七日、御發向福屋城時、奉

興國三年(曆應五年・康永元年)

武田信武

小石見城

上野頼兼

福屋彌太郎

屬御手、於三和田川切所、致散々合戰打破畢、其以後度々御合戰、抽戰功之間、福屋彌太郎令降參上者、爲後證賜御判、可備龜鏡、以此之旨可有御披露候、恐惶謹言、

〔小早川什書〕

六、六、八五二、
逸見家

安藝國安木町村地頭逸見五郎二郎入道大阿代子息四郎有朝申軍忠事、

大朝新庄

一令發向石州、可退治凶徒等之由、依被成下御教書、就御催促、去年曆應四七月十日、馳參尾朝新庄(安藝山縣郡)御共仕候、

河上城

一同七月廿八日、於大朝致警固了、
一從同廿九日、至于八月四日、於奥原(安藝山縣郡)取陣、相待御敵、日夜致警固訖、
一同日、宇津木、多和御敵等取陣之間、捨身命責上後多和之到、河上城凶徒孫三郎入道并子息五郎左衛門尉令降參了

大多和城
通降參
福屋城攻

一同廿六日、大多和城凶徒都野左近將監保通、邑智備後介、宗連以下降參了、
一自去年八月八日、至于當年二月一日、取卷福屋城、日夜軍忠之處、同九月一日、於大手中尾、舍弟六郎有經被射通左鼻崎江右口脇畢、并旗差左近二郎被射右腰、此條福島左衛門四郎入道、并內藤二郎於兩使被見知之候了、依而福屋彌太郎左衛門尉兼景舍弟修理亮令降參了、

小石見城
新田義氏
降參

一同二月十二日、自福屋城令發小石見城取陣、同十七日、凶徒總大將新田左馬助義氏、并周布城凶徒左近將監兼氏令降參之、同夜小石見城凶徒井村石見權守兼氏以下令降參了、

周布城
三隅城ニ
發向ス
大多和外
城
鳥屋尾城
矢原城

一同十八日、令發向周布城、致軍忠了、
一同廿二日、令發向三隅、對大多和外、并鳥屋尾、矢原三ヶ所之城取陣、日夜所致軍忠之處、同三月十七日夜、鳥屋尾之城令退治候畢、其後大多和外城高津原孫三郎、波多野彦三郎、河越安藝守、德屋彦三郎令降參了、所詮自去年七月八日、至于當年五月廿七日、令致警固、度々軍忠畢、此等條々爲後證、可賜御證判候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應五年六月十八日

源有朝狀

進上 御奉行所

承了(花押)

〔吉川家什書〕

十三、
實經御代

△、六、六、八五四、

目安

安藝國大朝本庄一分地頭吉河辰熊丸(實經)代須藤彌五郎景成申軍忠事、

興國三年(曆應五年・康永元年)

大朝新庄

河上城

大和田城

福屋城降
参ス

新田左馬
助義氏降
参

三隅城
大多和外
城
鳥屋尾城
矢原城

一令發向石州、可對治凶徒等之由、依預御催促、屬御手、去年^{曆應}七月十日、馳參大朝

新庄、同七月廿一日、於大樽^(安藝山縣郡)終夜警固了、

一自同廿九日、至于八月四日、於奥原取陣、相待御敵、日夜致軍忠了、同日、宇津々木多和御敵等取陣之間、捨身命攻上彼多和、抽戰功之刻、河上城凶徒孫三郎入道、並子息五郎左衛門尉令降參了、

一同廿二日、大和田城凶徒都野左近將監、邑智備後介以下令降參了、

一自去年八月八日、至于當年二月一日、取卷福屋城、致日夜軍忠之處、福屋彌太郎左衛門尉、并舍弟修理亮以下凶徒等令降參了、

一同二月十二日、自福屋城令發向小石見城取陣、同十七日、凶徒惣大將新田左馬助義氏、并周布城凶徒左近將監以下令降參了、同夜小石見城凶徒井村石見權守兼雄以下令降參、同十八日、發向周布、致軍忠了、

一同廿一日、令發向三隅城、對大多和外、并鳥屋尾矢原三ヶ所城取陣、致日夜軍忠之處、同三月十七日夜、對治鳥屋尾城了、而其後大多和外城凶徒高津孫三郎、波多野彦三郎、河越安藝守、徳屋彦三郎等令降參了、

右以前條々如言上、自去年七月一日、至于今、度々戰功了、然早賜御證判、爲備後證、

目安言上如件、^(康永元年六月廿三日附某前條ト同ジ證判)

〔益田家什書〕^{六、六、七、六七、}

石見國御神本孫次郎藤原兼躬申軍忠事、

右曆應五年二月廿二日、大將軍御發向三隅次郎入道信性城之際、令先懸、打破折所狹所、馳向納田河原、致散々合戰、凶徒等追籠城內畢、加之自去二月廿二日、迄于今月廿六日夜、日夜朝夕抽軍忠、致警固畢、此段侍所松田左近將監被見知之者、預御一見狀、爲備後證、恐々言上如件、^(曆應五年六月附上野頼兼ノ證判)

〔註〕 新田義氏ノ其後ノ消息見エズ。上野頼兼、更ニ本年十二月二十九日、小石見城ヲ攻ム。新田左馬助義氏ハ里見系ナル事、長樂寺源氏系圖ニ見ユ。

三月是月 是頃、宗良親王、越中名子ニ駐リ給ヒテ、三年ヲ經給フ。

〔李花集〕^{冬歌}

越中の國に住て、霧中百首よみ侍しに初冬を、

都にも時雨やすらん越路には雪こそ冬のはしめなりけれ

こしの國に住侍しころ、都の人のもとへ申つかはしける、

雪つもる越の白山冬ふかし夢にも誰かおもひおこさん

興國三年(曆應五年・康永元年)

三隅信性
ノ城ヲ攻ム

かくてなほ年をかさねし冬の頃讀侍し、
何ゆゑに雪見るへくもあらぬ身の越路の冬を三年へぬらん

〔李花集〕

雜歌

興國三年、越中國名子といふうらに忍ひてすみ侍し頃、都へ行人の有し便
宜に、彌生の頃にや爲定卿もとへ申つかはし侍し、

いたつらに行ては歸る雁はあれと都の人のことつてもなし
今は又とひくる人もなこのうらにしほたれてすむ蟹としらなん

興國三年、越中國に住侍し頃、罽中百首讀侍ける哥の中に神祇を

かそふれはな、とせもへぬ頼みこし七の社のかけをはなれて

〔李花集〕

春歌

〔李花集〕

秋歌

〔李花集〕

戀歌

(以上何レモ略ス)

五月一日 征西將軍懷良親王、薩摩ニ著シ給フ。〔阿蘇文書〕七〔阿蘇文書略〕

六月五日 是ヨリ先、義助、吉野ヨリ伊豫ニ至ル。是項、病ニ罹リテ卒ス。細川頼春、之ニ乗ジテ新田軍ノ河江城ヲ攻ム。新田金谷經氏等、水軍ヲ率テ來援シ、賊黨ノ水軍ト大イニ海上ニ戰フ。經氏、尋テ、備後鞆城ヲ攻

ム。頼春、河江城ヲ陷イレ、更ニ、大館氏明ヲ世田城ニ攻メントス。經氏等、頼春ト千丈原ニ戰ヒ、敗退ス。〔尊卑分脈〕(系圖部ニ收ム)

〔忽那一族軍忠次第〕

(豫伊) 他國合戰(前略) 六、七、一八三

- 一大將四條中將殿(有資)字和庄御迎事兩度
- 一同大將當島(忽那)渡御御手人々兵糧以下事
- 一吉野殿連々御使料糧事、此外不違注進
- 一同大將去年(興國二年カ)九月、當島渡御兵糧以下事
- 一熊野勢當國下向兵糧兩度
- 一大濱城兵糧沙汰事
- 一新田脇屋殿(義助)兵糧事
- 一勅使大藏大輔□倍渡島兵糧事
- 一方々上下向押送并兵糧事

〔參考太平記〕

卷第二 佐々木信胤成宮方事

懸ル處ニ伊豫國ヨリ專使馳來テ、急キ然ヘキ大將ヲ一人擇テ下サレハ、御方ニ對シテ、忠戰ヲ致スヘキノ由ヲ奏聞シタリシカハ、脇屋刑部卿義助朝臣ヲ下サルヘ

佐々木信胤

キニ、公議定リケリ、サレトモ下向ノ道、海上モ陸地モ、皆敵陣ナリ、如何シテ下スヘシト、僉議一ツナラサリケル處ニ、備前國住人佐々木飽浦三郎左衛門尉信胤金勝院本作信衡非也、早馬ヲ打テ、去月二十三日、小豆島ニ推渡リ、義兵ヲ舉ル處ニ、國中ノ志アル輩志、本文訛作忠、今依、異本改之、馳加リテ、逆徒少々打從ヘ、京都運送ノ船路ヲ差塞テ候ナリ、急キ近日大將御下向有ヘシトソ告タリケル、諸卿是ヲ聞テ、大將進發ノ道開ケテ、天運機ヲ得タル時至リヌト悦給フ事限ナシ下略

〔参考太平記〕卷第二 義助下向豫州事

去程ニ四國ノ通路開ケヌトテ、脇屋刑部卿義助ハ、曆應三年南朝興國二年四月朔日今川家本

義助四國ニ下向

其數多シトイヘ共、越前美濃ノ合戦ニ打負シ時、大將ノ行末ヲ知スシテ、山林ニ隠レ忍ヒ、或ハ危難ヲ遁テ、境ヲ隔テシカハ、吉野ヘ馳來ル兵五百騎ニモ足サリケリ、サレトモ四國中國ニ、心ヲ通スル官軍多ク有シカハ、今日モ急クヘシトテ、未明ニ吉野ヲ打立テ、紀伊ノ路ニ懸リ、通ラレケルニ、加様ノ次ナラテハ、イツカ參詣ノ志ヲモ遂、當來值遇ノ縁ヲモ、結ヘキト思ハレケレハ、先高野山ニ詣テ、三日逗留シ、院々谷々拜ミ廻ルニ、開ヨリ尙貴クテ、八葉ノ峯空ニソビヘテ、千佛ノ座雲ニ捧ゲ

紀伊路ヲ通ル高野山ニ詣ツ

田邊宿ヨリ渡海ス熊野ノ船
淡路武島
備前兒島

タリ、無漏ノ扉若閉テ、三會ノ曉ニ月ヲ期ス、或ハ說法衆會ノ場モアリ、或ハ念佛三昧ノ砌モアリ、飛行ノ三鉢地ニ墮、驗ニ生タル一株ノ松、回祿ノ餘煙風ニ去テ、軒ヲ焦セル御影堂、香煙窻ヲ出テ、心細キ鈴ノ聲、霧ニ籠テ物冷シ、此ハ昔瀧口入道俗名時頼、齊藤茂頼子也、茂頼、系圖作以頼、住タリシ、庵室ノ跡トテ尋レハ、舊キ板間ニ苔ムシテ、荒テモ漏ヌ夜ノ月、彼ハ古ヘ西行法師カ結置シ、柴ノ庵ノ名残トテ立寄ハ、掃ハヌ庭ニ花散テ、踏ニ痕ナキ朝ノ雪、様々ノ靈場、所々ノ幽閑ヲ見給フニソ、遁ヌベクハ角テヨソアラマホシクト宣シ維盛卿ノ心中、實ト思ヒ知レタル、且クモ懸ル靈地ニ逗留シテ、猶モ憂身ノ汚レヲ濯度思ハレケレ共、軍旅ニ赴キ給フ事ナレハ叶ハスシテ、高野ヨリ紀伊路ニ懸リ、千里濱ヲ打過テ、田邊宿ニ逗留シ金勝院、西源院、南都本云、四五日逗留、云々、渡海ノ船ヲ汰ヘ給フニ、熊野新宮別當湛譽、湯淺入道定佛、山本判官、東四郎、西四郎金勝院本不出、以下熊野人共、馬物具弓矢太刀長刀兵糧等ニ至ルマテ、我劣ラシト奉リケル間、行路ノ資卓散ナリ、角テ順風ニ成ニケレハ、熊野人共兵船三百餘艘汰ヘ立テ、淡路武島ヘ送り奉ル、此ニハ安間、志知西源院本不出、小笠原一族共、元來宮方ニテ城ヲ構テ居タリシカハ、様々ノ酒肴引出物ヲ盡シテ、三百毛利家、金勝院、西源院、南都、天正本、作三百一、餘艘ノ船ヲ汰ヘ、備前兒島ヘ送奉ル備前、毛利家本作、讚岐、非也、兒島、毛利家、北條家、西源院、天正本、作、小豆島、爲得、上段云、信胤在、小豆島、此ニハ佐々木薩摩守信胤、梶原三

伊豫今張

郎、去年ヨリ宮方ニ成テ、島ノ内ニハ交ル人モナシ、サレハ大船數多汰ヘテ、數多、毛勝院、西源院、南都 四月二十三日、伊豫國今張浦ニ送著奉ル、大館左馬助氏明ハ、先帝山

大館氏明

門ヨリ京ヘ御出有シ時、供奉仕テ有シカ、如何思ヒケン降人ニナリ、且クハ將軍ニ

ハ伊豫守

屬シテ居タリケルカ、先帝偷ニ牢ノ御所ヲ御出有テ、吉野ニ御座在ト聞テ、馳テ馳

四條有資

參タリシカハ、君御威有テ、伊豫國守護ニ補セラレシカハ、去年ノ春ヨリ、當國ニ居

伊豫官軍

住シテアリ、按、第十九卷諸國官方條起段云、氏明聞義貞起于北國、潛逃京往伊豫、與土居得能合軍起兵、又云々、所謂義貞起于北國、實延元二年也、而此云氏明自去去年、在伊豫者、相繼歸、未可知孰是、 四條大納言隆資子息少將有資ハ、此國ノ國司ニテ、去々年ヨリ、毛利家、北條家、南都、在天正本、作去去年、 在

振フ

國セラル、土居得能、土肥、河田、武市、日吉ノ者共、多年ノ宮方ニシテ、東ハ讚岐ノ敵ヲ

義助病死

友ヘ、西ハ土佐畑ヲ堺フテ居タリケレハ、大將下向ニ彌勢ヲ得テ、龍ノ水ヲ得、虎ノ山ニ靠カ如シ、其威漸近國ニ振ヒシカハ、四國ハ申ニ及ハス、備前備後安藝周防乃至九國ノ方マテモ、又大事出來ヌト、云ヌ者コソ無リケレ、サレハ當國ノ内ニモ、將軍方ノ城僅十餘箇所有ケルモ、イマタ敵モ向ハヌ先ニ、皆聞落シテケレハ、今ハ四國悉一統シテ、何事カ有ヘキト悉敷思ヒアヘリ、

義助病死

義助病死附稱軍事

細川頼春

病ヲ受テ、身心惱亂シ給ヒケルカ、僅ニ七日過テ、終ニハカナク成給ヒニケリ、相從

金谷經氏

フ官軍トモ始皇沙丘ニ崩シテ、漢楚機ニ乘ン事ヲ悲シミ、孔明籌筆驛ニ死シテ、吳

海上合戦

魏便ヲ得シ事ヲ愁シカ如ク、五更ニ燈消テ破窓ノ雨ニ向ヒ、中流ニ船ヲ失テ、一瓠ノ浪ニ漂フランモ、角ヤト覺テ、此事外ニ聞ヘナハ、敵ニ氣ヲ得ラレツヘシトテ、偷ニ葬禮ヲ致シテ、悲ヲ隱シ聲ヲ吞トイヘトモ、サスガ隱ナカリシカハ、四國ノ大將軍

大館氏明

ニテ尊氏ノ置レタル、細川刑部大輔頼春、此事ヲ聞テ、時ヲハ姑クモ失フヘカラス、

海上合戦

是司馬仲達ガ孔明カ死セル此上本文有脫句、今依異本補之、 弊ニ乘テ、蜀ヲ亡セシ謀ナリトテ、伊豫

海上合戦

讚岐阿波淡路ノ勢七千餘騎ヲ率シテ、先伊豫北條家本作備前、非也、毛利家本載讚岐、 境ナル河江城ヘ推

海上合戦

寄テ、土肥三郎左衛門ヲ攻ラル、義助ニ從附タリシ多年恩顧ノ兵トモ、土居得能、合

海上合戦

田、二宮、日吉、多田、毛利家、金勝院、西源院、南都本、作太田、 三木、羽床、三宅、武市ノ者共、金谷修理大夫經氏ヲ

海上合戦

修理大夫、前作治部大輔、今川家、北條家、南都本、 大將ニテ、兵船五百餘艘ニテ、土肥カ後攻ノ爲ニ

海上合戦

海上ニ推浮フ、西源院本云、日見、 是ヲ聞テ、備後鞆尾ノ道ニ船汰シテ、土肥カ城ヘ寄ン

海上合戦

トシケル、備後安藝周防長門ノ勢、大船千餘艘ニテ推出ス、兩陣ノ兵船トモ、渡中ニ帆ヲツイテ、舷ヲ控キ関ヲ作ル、潮ニ追風ニ從テ推合推合相戦ヒケル、其中ニ大館左馬助氏明カ執事岡部出羽守カ乗タル船十七艘、備後宮下野守兼信、左右ニ別レ

終日海戰

朝合戰

大可島海陸ノ戰

テ漕並へタル船四十餘艘カ中へ分入テ、敵ノ船ニ乘遷乘遷、皆引組テ海中へ飛入ケルコソイカメシカリシ舉動ナレ、第十七卷京都兩度軍段、金勝院本云、同部出羽守仲則戰死、云々、今重出于此、蓋別一人歟、可三并考。備後安藝周防ノ船ハ、皆大船ナレハ、艦舳ニ櫓ヲ高ク搔テ、指下シテ散々ニ射ル、伊豫、土佐ノ船ハ皆小船ナレハ、逆櫓ヲ立テ縱横ニ相當ル、兩方ノ兵ヨシヤ死シテ海底ノ魚腹ニ葬ラル、共、逃テ天下ノ人口ニハ墮ジ者ヲト互ニ機ヲ進メ、一引モ引ス終日戰ヒ暮シケル處ニ、海上俄ニ風來テ、宮方ノ船ヲハ、悉西ヲ差テ吹モトシ、寄手ノ船ヲハ、悉伊豫ノ地へ吹送ル、夜ニ入テ風少シ靜マリケレハ、宮方ノ兵共、是程ニ運ノキカヌ時ナレハ、如何ニ思フ共叶フヘカラス、只元ノ方へ遭返ヘキカト申ケルヲ、大將金谷修理大夫運ヲ計リ勝事ヲ求ル時コソ、身ヲ全シテ、功ヲナサントハ思ヘ、只一人憑タル大將軍脇屋義助、病ニ侵サレ失給ヒヌル上ハ、今ハ爲ヘキ方ナキ微運ノ我等カ、生テアラハ如何計ノ事カ有ヘキ、命ヲ限ノ戰シテ、弓矢ノ義ヲ專ニスル計ナルヘシ、サレハ運ノ通塞モ、軍ノ吉凶モ謂ヘキ處ニアラス、イサヤ今夜備後朝推寄テ、其城ヲ追落シテ、中國ノ勢著ハ、西國ヲ攻隨ヘントテ、其夜ノ夜半計ニ、備後朝推寄スル、城中折節無勢ナリケレハ、三十餘人有ケル者共、且ク戰テ皆討死シケレハ、宮方ノ士卒是ニ機ヲ舉テ、大可島ヲ西源院本作、大可島下、故、詰ノ城ニ拵ヘ、朝浦ニ充満

土肥ノ城
陷落ノ城
世田城攻
擊田城攻
金谷經氏
決死隊ヲ
率テ細川
軍ニ當ル

シテ、武島ヤ小豆島ノ御方ヲ待處ニ、備後、備中、安藝、周防、四箇國ノ金勝院、西源院、南都本、不載、周防、爲三箇國、將軍方ノ勢、三千餘騎ニテ推寄タリ、宮方ハ、大可島ヲ後ニ當テ、東西ノ宿へ船ヲ漕寄テ打テハ上リ、打テハ上リ、新手ヲ入替テ戰タリ、將軍方ハ小松寺ヲ陣ニ取テ、濱面へ騎馬ノ兵ヲ出シ、懸合懸合揉合タリ、互ニ戰屈シテ十餘日ヲ經ケル處ニ、伊豫ノ土肥カ城攻落サレ、細川刑部大輔頼春ハ、大館左馬助氏明ノ籠ラレタル、世田城へ世田、南都本、作、世良田、懸ルト聞ヘケレハ、土居得能以下ノ者共、同シク死ナハ、我國ニテコソ尸ヲ曝サメトテ、大可島ヲ打棄テ、伊豫國へ引返ス、敗軍ノ士卒相集テ、二千餘騎有ケル、其中ヨリ日來手柄ヲ顯ハシ、名ヲ知ラレタル兵ヲ三百餘騎勝リ出シテ懸合ノ合戰ニ勝負ヲ決セント云、是ハ細川刑部大輔目ニ餘ル程ノ大勢ナリト聞テ、中々何トモナキ取集勢ヲ對揚シテ合戰ヲセハ、臆病武者ニ引立ラレテ、御方ノ負ヲスル事有ヘシ、只一騎當千ノ兵ヲ勝リテ、敵ノ大勢ヲ懸破リ、大將細川刑部大輔ト引組テ刺違ヘントノ謀ナリ、サテハ敵ノ國中へ入ヌ先ニ打立トテ、金谷修理大夫經氏ヲ大將トシテ、勝リタル兵三百騎、皆一樣ニ曼茶羅ヲ書テ母衣ニ懸テ、トテモ生テハ歸ルマシキ軍ナレハトテ、十死一生ノ日ヲ吉日ニ取テ、大勢ノ敵ニ向ヒケル心ノ中、樊噲モ周勃モイマタ得サル舉動ナリ、アハレ只勇士ノ義ヲ存スル志程

千町原

究竟者ニ
川ノ戦法細

決戦

ヤサシクモ哀ナル事ハアラシトテ、是ヲ聞ケル者ハ、皆鎧ノ袖ヲソヌラシケル、去程ニ細川刑部大輔七千餘騎ヲ率シテ、敵已ニ打出ルナレハ、心ヨク懸合ノ合戦ヲ致ヘシトテ、千町原ヘ打出テ、敵ノ陣ヲ見渡セハ、渺々タル野原ニ、中黒ノ旗一流、幽ニ風ニ飛揚シテ、僅ニ勢ノ程、三百騎許ソ控ヘタル、細川刑部大輔是ヲ見給ヒテ、當國ノ敵是程ノ小勢ナルヘシトハ思ハヌニ、餘ニ無勢ニ見ユルハ、一定究竟ノ者共ヲ勝リテ、大勢ノ中ヲ懸破、頼春ニ近ツカハ、組テ勝負ヲ決セン爲ニテソアルラン、然ラハ思切タル小勢ヲ、一息ニ討ントセハ、手ニ餘テ討レヌ事有ヘシ、只敵破ラントセハ、破ラレテ然モ跡ヲ塞ケ、轡ヲ並テ懸ラハ、僞テ引退テ、敵ノ馬ノ足ヲ疲ラカセ、打物ニ成テ一騎合ニ懸ラハ、アイノ鞭ヲ打テ推モジリニ射テ落セ、敵疲ヌト見ハ、新手ヲ替テ取籠ヨ、餘ニ近附テ敵ニ組ルナ、引トモ御方ヲ見放スナ、敵ノ小勢ニ御方ヲ合スレハ、一騎ニ十騎ヲ對シツヘシ、飽マテ敵ヲ惱マシテ、弊ニ乗テ一揉揉タランニ、ナトカ是等ヲ討サルヘキト、委細ニ手段ヲ成敗シテ、旗ノ眞前ニ露ハレテ、閑々トソ進マレタル、今川家本云、サル程ニ宮方ノ兵百騎是ヲ見テ、云々、金谷修理大夫是ヲ見テ、スハヤ敵ハ懸ルト見ヘタルハトテ、些モ見ツクロフ處モナク、相懸リニムスト攻テ、矢一ツ射違ル程コソ有ケレ、皆弓矢ヲハ投棄、打物ニ成テ叫喚テ眞クロニソ懸タリケル、細川

官軍十七
騎殘ル

刑部大輔馬廻ニ、藤一族五百餘騎ニテ控ヘタルカ、兼テノ謀ナリケレハ、左右ヘ颯ト分レテ控ヘタリ、此中ニ大將在ト思ヒモヨラス、三百騎ノ者共是ヲハ目ニモ懸ス、裏ヘツト懸拔、二陣ノ敵ニ打テ懸ル、此陣ニハ、三木、坂西、坂東ノ兵共、相集テ七百餘騎、兜ノ鍔ヲ傾テ、馬ヲ立オサメ靜リカヘリテ控ヘタリケルカ、勇猛強力ノ兵共ニ懸散サレテ、南ナル山ノ峯ヘ颯ト引テ上リケルカ、是モハカハカシキ敵ハ無リケリトテ、三陣ノ敵ニ打テ懸ル、是ニハ託間、香西、橘家、小笠原一族共、二千餘騎ニテ二千、天正本、控ヘタリ、是ニソ大將ハオハスラント見澄シテ、中ヲ颯ト懸破テ、取テ返シ、引組テハ刺違ヘ、落重テハ首ヲ取、一足モ引ス戦ケルニ、宮方ノ兵三百餘騎今川家本、其二百餘騎、與前編、金勝院本作二百八十騎、西源院、南都本、作二百八十三騎、忽ニ蹄ノ下ニ討死シテ、僅十七騎ニソ成タリケル、其十七騎ト申ハ、先大將金谷經氏、河野備前守通卿金勝院本作通野、西源院、南都本、作通理、得能彈正、日吉大藏、左衛門金勝院本、有六郎字、而此下數人皆不出、杉原與一、富田六郎富田、西源院、南都本、作富士、高市與三、左衛門西源院本、市下今川家、西源院、南都本、作三郎、土居備中守、淺海六郎等ナリ、彼等ハ一騎當千ノ兵ナレハ、自敵ニ當ル事十餘箇度、陣ヲ破ル事六箇度ナリトイヘトモ、イマタ痛手ヲモ負ス、又疲レタル體モ無リケリ、一所ニ馬ヲ打寄テ、馬モ物具モ見知ネハ、大將何トモ知カタシ、サセル事モナキ國勢共ニ逢テ討死センヨリハ、イサヤ打破テ落ントテ、十七騎ノ人

經氏備後
ニ歸ル

義助供養
板碑

新田氏遺族當

ハ、又馬ノ鼻ヲ引返シ、七千餘騎カ真中ヲ懸破テ、備後ヲ差テ引テ行、イカメシカリ
シ行迹ナリ、

〔安養寺明王院所藏板碑〕(上野、新田) (昭和八年、同寺境) (内大木、株下出土)

(光明眞言)

前刑部卿
源義助

(彌陀種子) 康永元年壬午六月五日

生年四十二
逝去

(光明眞言)

(註) 右板碑ノ眞偽ニツキ論ハアレド、姑ク茲ニ掲グ。

〔花押拾遺〕禮ノ部 新田刑部卿源義助(花押)(51) (義助ノ花押トシテハ疑ハ)

〔宮下過去帳〕(上野、二十一日) 正法寺 曆應三庚辰五月十二日 脇谷治郎義助朝氏息

〔河野土居系圖〕(伊豫) △六、七、一九六、 通胤

通増 土居彌次郎、通増父子討死之後、從吉野殿被補

通世 惣領職、號河野、後從五位下、敘備前守、(中略)

(興國) 九月三日、中道前懸合々戰、武譽、其外讚州島坂合戰、蘇州畑見合戰、備後國稱浦合戰等、抽武雙軍功、凡一生戰功不遺記之、悉見家記錄、故略于此、法

名號西樂寺殿仁山宗義大居士、

通村 彦五郎、母土肥左衛門尉女

通永 彦六郎、母同通村

女子 得能越後守妻



六六 脇屋義助公供養板碑

昭和八年新田郡尾島町安養寺境内大木ノ株下ヨリ發掘、同寺藏



細川頼春
大館ヲ攻
田城ノ世

通景 三郎 於千丈原討死 通家 九郎左衛門 神宮寺準人 通仲 彌九郎

某孫治郎

通元 四郎 於加室討死

(註) 去年九月十八日條參照。

七月六日 前上野長樂寺住持奇英、寂ス。

〔禪刹住持籍〕(山城) 上野州世良田山長樂寺歷代

十二世雄峰諱奇英、嗣無學元弘三癸酉入寺歲五十一、建武元年甲戌退院、後遷禪興、康永元年壬午七月六日示寂、壽六十歲。

九月三日 細川頼春、新田大館氏明ヲ伊豫世田城ニ攻メテ之ヲ陷イル。氏明、之ニ死ス。新田軍ノ將、篠塚伊賀守、勇戰シテ遁レ去ル。

〔附〕大館氏明、吉野ニ鷹ヲ獻ズ。

〔參考太平記〕卷第二 十二 大館左馬助討死附篠塚勇力事

懸リシカハ大將細川頼春ハ、合戰事散シテ、御方ノ手負死人ヲ註サル、ニ、七百人ニ餘レリトイヘ共、宗徒ノ敵二百餘人 今川家、金勝院、西源院本、南都本、作三二、百七十人、諸本與上相齟齬、可三合見 討レニケレハ、人皆氣ヲ舉勇ヲナセリ、サラハ懸テ大館左馬助カ籠リタル世田城ヘ寄ヨトテ、八

興國三年(曆應五年・康永元年)

岡部出羽
守自害

大館氏明
自殺

篠塚伊賀
守

月二十四日早且ニ、世田ノ後ナル山へ打上テ、城ヲ遙ニ見下シ、一萬餘騎ヲ七手ニ分テ、城ノ四邊ニ打寄、先己カ陣々ヲソ構ヘタル、向陣已ニ取巻セケレハ、四方ヨリ攻寄テ、持楯ヲカツキ寄、亂杭逆茂木ヲ引ノケテ、夜晝三十日今川家、北條家、西源院、南都、天正本、作三十日、毛利家本作二十二日、金勝院本作二十五日、皆非也、諸本皆云、八月二十四日圍城、九月三日城陷、云々迄ソ攻タリケル、城ノ内ニハ宗徒ノ軍ヲモシツヘキ兵ト憑レシ、岡部出羽守カ一族四十餘人、皆日比澳ニテ日比、金勝院本作三日、非也、澳本文誤作與、今依異本改之自害シヌ、其外ノ勇士共、千町原ノ戦ニ討死シヌ、力盡食乏クシテ、防ヘキ様モ無リケレハ、九月三日ノ曉、大館左馬助主從十七騎、一ノ城戸口へ打出テ、塀ニ著タル敵五百餘人ヲ遙ナル籠へ追下シ、一度ニ腹ヲ切テ枕ヲ雙テ伏タリケル、防矢射ケル兵共是ヲ見テ、今ハ何ヲカ期スヘキトテ、或ハ敵ニ引組テ刺違ルモアリ、或ハ己カ役所ニ火ヲ懸テ、猛火ノ底ニ死スルモアリ、目モ當ラレヌ有様ナリ、加様ニ人々自害シケル、其中ニ、篠塚伊賀守一人ハ、大手ノ一、二ノ城戸、殘リナク推開テ、只一人ソ立タリケル、降人ニ出ルカト見レハサハ無テ、紺絲ノ鎧ニ紺、毛利家本作黒、鍬形打タル兜ノ西源院本作緒ヲシメ、四尺三寸西源院本作四尺二寸有ケル太刀ニ、八尺餘リノ金材棒脇ニ挟テ龍頭兜、大音揚テ申ケルハ、餘所ニテ定テ名ヲ聞ツラン、今近附テ我ヲシレ、畠山庄司二郎重忠平重能子、六代孫、武藏國ニ生長テ、新田殿ニ一人當千ト憑レタリシ、篠塚伊賀守爰

篠塚隱岐
島ニ落ツ

ニアリ、討テ勳功ニ預レト呼ハリテ、百騎許控ヘタル敵ノ中へ、些モ擬議セス走リ懸ル、其勢事柄勇銳タルノミナラス、兼テ聞シ大力ナレハ、誰カハ是ヲ遮止ムヘキ、百騎ノ勢東西へ颯ト引退テ、中ヲ開テソ通シケル、篠塚馬ニモ騎ラス、弓矢ヲモ持ズ、而モ只一人ナレハ、何程ノ事カ有ヘキ、只近附事無テ、遠矢ニ射殺セ、返合セハ懸惱シテ討トテ、藤橋伴ノ者トモ、二百餘騎跡ニ附テ追懸ル、篠塚些モ騒ガス、小歌ニテ閑々ト落行ケルヲ、敵アマスナトテ追懸レハ、立留リテ嗚呼御邊達、痛ク近附テ、頸ニ中違スナトアザ笑テ、件ノ金棒ヲ打振ケレハ、蜘蛛ノ子ヲ散スガ如ク、颯トハ逃又村立テ跡ニ集リ、鏃ヲ汰ヘテ射レハ、某カ鎧ニハ、旁ノヘロヘロ矢ハヨモ立候ハシ、スハ此ヲ射ヨトテ、後ヲ差向テソ休ミケル、サレトモ名譽ノ者ナレハ、一人ナリトモ、若ヤ打留ルト追懸タル敵二百餘騎ニ、六里ノ道ヲ送ラレテ、其夜ノ夜半許ニ、今張浦ニソ著タリケル、此ヨリ船ニ乗テ、隱岐島へ毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本、作陰島、下做之落ハヤト心サシ、船ヤアルト見ルニ、敵ノ乗乗テ、水主計殘レル船數多アリ、是コソ我物ヨト悦テ、鎧著ナカラ浪上五町許ヲ游キテ、アル船ニガハト飛乗ル、水主梶取驚テ、是ハ抑何者ソト咎メケレハ、サナ云ソ、是ハ宮方ノ落人篠塚ト云者ソ、急此船ヲ出シテ、我ヲ隱岐島へ送ト云テ、二十餘人シテタリ立ケル碇ヲ、安々ト引舉、十四五尋本文、訛作

四十五尋、今依^ニアリケル橋ヲ輕々ト推立テ、屋形ノ内ニ高枕シテ、駢カキテソ臥タリ
異本^ニ改^レ之、^ノアリケル橋ヲ輕々ト推立テ、屋形ノ内ニ高枕シテ、駢カキテソ臥タリ
ケル、水主梶取トモ是ヲ見テ、穴夥シ凡夫ノ態ニハアラシト恐怖シテ、則順風ニ帆
ヲ懸テ、隱岐島ヘ送テ後、暇ヲ請テソ歸ニケル、昔モ今モ勇士多シトイヘトモ、懸ル
事ヲハ聞ストテ、篠塚ヲ譽ヌ者コソ無リケレ、

〔参考太平記〕^{卷第二} 大森彦七事

〔前略〕サテモ大般若經眞讀ノ功力ニ依テ、敵軍ニ威ヲ添ントセシ、補正成カ亡靈靜
マリニケレハ、脇屋刑部卿義助、大館左馬助ヲ始トシテ、土居得能ニ至ルマテ、或ハ
討レ或ハ腹切テ、無カ如クニ成ニケリ、^{下略}

大館氏明
は鷹ヲ
吉野ニ獻
上ス

〔吉野拾遺〕^下

今上御位に居させ玉ひし初つかた、伊豫國大館^{イナシ}左馬介氏明のもと
より、世にためしなき程の逸物なりとて、はい鷹一もとたてまつられしを、大納言
隆資卿にあづけさせ玉ひて、おり／＼御覽じさせたまひけるに、まことに勝れた
りけり、そのころ皇居のうへなる山のしげみより、夜な／＼出て、からすの聲に似
て、内裏にひゞきわたりになくを、あやしき鳥にてあらんと、武士におほせて、射さ
せ玉ひけれども、所さだめざりければ、かれもこれもかなはでやみにけり、あると
きかの鷹を、ふもとの野べにて雉子にあはせたまひけるに、雉子にはめもかけで、

怪鳥ヲ退
治ス

山のかたへそれゆくを、さしもかしこうおぼしめす御鷹をとて、行かたにむら
り行に、しげみのうちに入るを、いかにせんとてまもりおけるほどに、鶴の大き
なるくろき鳥ををひいだして、空にてくみあひ、ともにおちけるを、人々よりてこ
ろしてけり、かたちはからすのごとくにて、右ひだりのつばさをひきのばして見
ければ、七尺あまり有けり、鷹も胸のほどをくはれて、しばし程ありて死^イにけり、
夜な／＼鳴つるは、この鳥にてや有けん、そののちはをとせざりけり、いづれに
たゞごとにてはあらじとて、ふたつの鳥を塚にこめて、そのうへにちいさき社を
たてて、鳥塚といひて當にありける、いとあやしき事にこそありつれ、

〔宮下過去帳〕^{上野三日}

建武三年九月三日勢田伊豆路討死、大館左京權太輔氏時^時
同斷 家氏三男大館彦次郎氏兼

九月二十六日 新田綿打入道等、花園宮ヲ奉ジテ、土佐岡本城ニ賊黨堅
田國貞ヲ攻ム。

〔蠢簡集拾遺〕^三 ^{佐土} △六、七、三五一

堅田又太郎國貞申、自當國蒙初合戰、奉屬于御手、隨分抽忠勤候之上、今月廿六日、花
園宮御手人々、金澤殿^{左近}、綿打殿^新、越智佐河^{四郎左}、度賀野^{又太}、軍勢、戸波名主庄

興國三年(解應五年・康永元年)

花園宮
綿打殿

熊野山凶徒岡本城

官并熊野山凶徒等、當陣津野新庄岡本城寄來之時致散々合戰之刻、國貞嫡子堅田彌三郎、於當座討死仕候畢、且津野惣領一族以下數輩御見知之上者、爲向後可賜御證判候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

康永元年九月廿六日

佐伯國貞

進上 御奉行所

承了

(註) 興國元年正月二十四日、六月二日、十二月十九日條參照、

興國四年(康永二年)癸未三〇〇三

二月十九日 越後及出羽ノ官軍、連リニ起ル。直義、之ニ備フル爲、越後ノ上杉憲顯以下ノ將ニ令シテ、尊氏ノ母上杉氏ノ逝去セルモ、上洛スル事ナカラシム。

[上杉古文書] 上杉憲顯

△六、七、五五四

大方殿御事悲歎之處、自身者爲越州發向、自是被遣子息兵庫助(憲)條、尤以神妙存問、旁可有益、其間子細被仰旨有之之狀如件、

康永二年正月廿七日

(花押)

上相民部大輔殿

[三浦和田文書]

(伊佐早) △六、七、五六二

其後何條御事候哉、去月十九日、左衛門尉(長尾)上野へ上洛候、狀をも可進候處、無差事候間不進候由申越候、去年十二月廿三日、京都大方殿御隱事爲御訪被參候、就其ハ此邊ハ爲羽州警固相構不可有御參候由申置候、爲御心得申候、恐々謹言、(二月五日附藤原公房ヨリ、和田四郎兵衛尉宛)

[三浦和田文書]

(伊佐早) △六、七、五七〇

大方殿御事、公私誠驚入候、戸部(顯)者不被參洛候、被進子息三郎殿候訖、御狀之赴申候之處、悅入之由被申候、御參問事、越州凶徒連々蜂起候之上者、御不參強不可苦候、歎、他事期後信候、恐々謹言、(二月十九日附源頼世ヨリ、三浦和田四郎兵衛宛)

[三浦和田文書]

(伊佐早) △六、七、五七一

爲出羽國大泉庄藤島城(羽前田)凶徒等誅伐、嵩東山警固事、小泉庄立島内大川七被指置役所候、自三月十一日至同廿日、以三十人可被勤仕給之由候、恐々謹言、

二月廿一日

藤原公房(花押)

謹上 奥山庄北條總領地頭殿

興國四年(康永二年)

1031

羽州警固

出羽國大泉庄藤島城凶徒

四月十四日 是ヨリ先、備後ノ官軍廣澤五郎、新田大館右馬亮ヲ大將トシテ、因島ノ城廓ニ據ル。四月五日、賊黨之ガ攻撃ヲ開始ス。是日(十四)ヨリ、攻撃愈々急ヲ加ヘシガ、大館右馬亮、遂ニ敗走ス。尋テ五月十九日、城主廣澤五郎、出デ、降ル。此ノ間、四月六日、某宮將軍、右馬亮ノ軍忠ヲ褒シ給フトモ云フ。

〔福山史料集〕(新田氏研究一九七頁)

備後守護兼(方便者説之)同國因島凶徒廣澤五郎以下輩、構城廓、楯籠云々、早催一族同楯原左近將監令發向、可令追討之狀如件

曆應三年六月廿日

尊氏(花押)

宮平太郎殿

廣澤五郎

〔淨土寺文書〕(備後 六、六、七二一)

東寺領備後國因島地頭方、雜掌朝祐申濫妨事、訴狀如此、廣澤五郎以下輩相語隣國惡黨人等、構城廓不敍用使節之間、嚴密破却要害、追出狼藉人等、可沙汰付雜掌之旨、去年被仰之處、于今不事行云々、何様事哉、不日遂其節、載起請之詞、來月中可被申左右、若猶違期者、可有其咎之狀、依仰執達如件

曆應四年三月廿八日

修理權大夫判

當國守護所

東寺領備後國因島地頭方、雜掌朝祐申濫妨事、安藝國生口島甲乙人等、得廣澤五郎語、打入寺領之間、可被召進交名人等之由、先度被仰之處、于今無音、何様事哉、不日可被申左右、使節更不可有緩怠之狀、依仰執達如件

曆應四年三月廿八日

修理權大夫判

武田伊豆守殿(信武)

〔福山史料集〕(新田氏研究二〇三頁)

當國因島凶徒廣澤五郎以下輩、爲大館右馬亮大將楯籠城廓之由、有其聞、早云國人等、急速相催之、不日令發向、可追討之條、院宣如此、仍執達如件

康永元年十二月朔日

修理亮(花押)

備後守護所

大館右馬亮

當國因島凶徒大館右馬亮以下輩誅伐事、院宣竝御教書如此、早云一族等觸甲乙人

興國四年(康永二年)

一〇三三

等急速相催之、不日可被馳參、仍執達如件

康永元年十二月七日

守護方便者源兼繼

宮平太郎殿

〔福山史料集〕(新田氏研究 一九八頁)

致軍忠之由、被開召畢、尤神妙者、宮將軍令旨如此、悉之以狀

興國四年四月六日

右少辨(花押)

大館右馬助殿

〔鼓文書〕(備 後) △六、七、六一四

備後國三吉鼓少納言房覺辨申軍忠事

右於當國因島(御調 郡)爲大館右馬亮殿大將、構城塙楯籠之間、今年四月五日發向彼城、

警固搦手畢、仍同十四日、一日一夜致合戰、其後連々抽軍忠、此條同所合戰之間、一族

令存知訖、而追落大將大館右馬亮殿、爰城主廣澤五郎、同五月十九日降參之條、無子

細者也、仍爲後證、欲賜御判、粗言如上件

康永二年五月廿一日

僧覺辨

御奉行所

大館右馬亮

大館收走
廣澤降參

承了(花押)

〔註〕 福山史料集所收ノ文書ハ眞僞疑ハシケレド、姑ク茲ニ掲グ。大館氏明戰

死スル事、去年九月三日條ニ收ム。正平三年四月一日條參照。

七月二日 一色範氏、先ニ新田遠江禪師ト聯合セシ大城藤次及、ヒ中院侍從・菊池武茂等ノ據レル筑後竹井城ヲ攻ム。是日、竹井城、陷ル。

〔龍造寺文書〕(佐賀文書墓所收 △六、七、六四二)

竹井城

爲對治中院侍從、菊池五郎武茂、大城藤次以下凶徒等、筑後國竹井城(山本 郡)御發向之間、肥前國龍造寺又四郎家平、最前馳參、自五月五日御共仕、同十五日合戰、同晦日御

合戰之時、致軍忠、迄于七月二日夜城塙沒落之期、抽軍功候畢、以此旨可有御披露候、

恐惶謹言(康永二年七月五日 附一色範氏證判)

〔深堀記錄證文〕(肥前 △六、七、六四八)

中院侍從、菊池五郎、大城藤次以下凶徒、依楯籠筑後國竹井城、御發向之間、肥前國深

堀彌五郎政綱、最前馳參、去五月晦日抽軍忠、將又七月三日至于當城沒落期、致警固

宿直候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言(康永二年八月十日 附一色範氏證判)

〔註〕 興國元年七月十七日、同九月二十三日條參照。正平五年五月二日條參照。

興國四年(康永二年)

一〇三五